

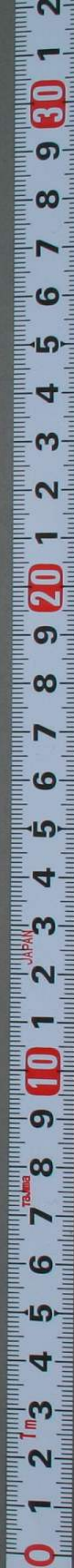


歴史徴

三三上下



伊5
2.469
.18





U5
2469
18

歴史徴卷之三十三 上下冊



壬申元弘二年光嚴院正慶元年鎌倉將
參議藤光顯軍二十五年執權平茂時春二月鎌倉搦前

補任曰前參議藤光顯被召取武家關東形勢云云六月廿五日配流出羽國

三月鎌倉遷帝於隱岐國

增鏡曰何の事より此の使より長井の右の助言冬と云
武士がくへ、これ程の大事乃時よりかへくふせ

歴史徴

まのぬそいまわつたてふもかたさすにものほせはふ
とそアふはわふ安事と信後のかふへうつてまふ
とそやまひのはりち七日教をおきせし
そらりに茶ておほしうそふひく中りあるておほし
ちまうくつておの世乃を信後せまうちまはわ
まかくまはしつてむくいあつて入るに才とをふ
むませいんはるまきとまはるしそ日はかりま
かぬりの信子よりつてせせを給入 いさきとをひふま
かこのまきつておほしこの君とてまのわやせんはまふ

内侍之位及大納言小宰おちと男より信后の中ね

祐之
按太

平記曰一條頭大夫○増鏡曰ゆれまきの西條凡の秋今
又知るかくつたそのたふれいかに入まいまの信后の中ねをや
かへさしつてくるさうまを
忠顯少将 太平記曰
六條少将 かつり信まつ

六條よりのおかりに武士さあつても名ある信はるまのやを
子葉介貞隆とほしうそとおほえことなるう配り十人え
ひてきてまはる六條より七条とあへたまをあへて
東寺の門ふよ西車と茶てあやけり西会福あま
よのまうりてむいひ情の形をいそしけ橋わたり
信ひあり一信末依後判友といふものゆかり入るて

まゝの所おくりはるまはばさふそのよらとおほしそくは
いそ志のいそさふおとせくる 志入るる居るそあつた
なりぬるものさうりハワとれしち
葉介貞胤小山五郎左衛門尉佐佐木佐渡判官入道
道譽五百餘騎ニテ路次ヲ警固仕ル 梅松論曰御
所用意のそりふ南國に後人依る本匠岐さほ高き記
そりて海海しり

鎌倉流中務卿尊良親王於土佐國座主尊澄法親王於
讃岐國

増鏡曰又乃日 祐之曰今案 中孫の尼こ 尊良後醍醐
三月八日 贈從三位為子親王配 帝弟一子母

流土佐金崎城御自害 土佐のくふへおハハ海と法依

為明中ねまつか 畧 尺こく去佐小おハハ法まて序

とりの御まをほりせくる 地とみやうしりかア

とれぬ乃たしり所ふいそまてとハハ日中て

妙法依の尊主尊法親王 尊澄後醍醐弟 もさぬま
八子母曰尊良

乃くまへかりま 通考 太平記曰佐佐木大夫判官時

信路次ノ御警固ニテ土佐ノ畑ハ流ニ奉ル又曰土

佐ノ畑ニテ有井三郎左衛門尉力館ノ傍ニ一室ヲ

攝テ道奉ル○又曰尊澄法親王長井左近大夫將監
高廣ヲ御警固ニト云○参考曰梅松論云流尊良于
讚岐尊澄于土佐非也

新主即位於太政官廳

皇年
代記

增鏡曰廿二日ハ法即位存命ハヨの中終てたく
れと云

新主罷中宮為禮成門院

增鏡曰中まハ后の位もやうに終して法号さふると
人のうらやま不のふきうやともうと云かぬ世あり

禮成門院

有書云後系
極位乃事也

やうやなり

鎌倉欲奉先主為法皇不聽

太平記参考曰關東モ恐アリトヤ思ヒケン此為ニ
後伏見院第一御子ヲ御位ニ即奉リテ先帝御遷幸
ノ宣旨ヲナサルヘシトソ計ヒ申ケル天下ノ事ニ
於テハ今ハ重祚ノ御望有ヘキニモアラサレハ遷
幸以前ニ先帝シハ法皇ニナシ奉ルヘシトテ香深
ノ御衣ヲ武家ヨリ調進シタリケレ凡御法體ノ御
事ハ暫ク有ニシキ由ヲ仰ラレテ衣龍ノ御衣ヲモ

脱セ給ハス毎日ノ御行水ヲシメシテ假ノ皇居ヲ淨
 メテ石灰ノ壇ニ准ヘテ太神宮ヲ御拜アリケレハ
 武家モ持アツカヒテソ覺ヘケル是モ叡慮ニ憑ニ
 思召ス事有ケル故ナリ 通考 太平記又曰元亨元年春
 ノ比 諸本作元徳元年為得明極塔銘曰僧梵俊字明
 極以元天曆二年生六十有九而未日本然則明
 朝日本元徳元年也 元朝ヨリ俊明極ト云禪師未朝
 セリ天子直ニ異朝ノ僧ニ御相看ノ事ハ前々更ニ
 無リシカ此君禪ノ宗旨ニ傾カセ給テ禁中ヘソ
 召レケル時ニ勅問有テ棧山航海得々未和尚以何

度生答曰以佛法緊要處度生重テ曰正當任麼時如
 何答曰天上有星皆拱北人間無水不朝東翌日別當
 實世ヲ勅使ニノ禪師號ヲ下サル時ニ禪師勅使ニ
 向テ此君九龍ノ悔アリトイヘ斥二度帝位ヲ踐セ
 給フヘキ御相アリトソ申ケルニ依テ御法躰ノ事
 ハ暫ク有マシキ由強テ仰出サレケリ

夏四月先主御出雲國

増鏡曰四月一日丁未乃其の中おほいして

さしつかへなくおぼしめされたる衣かへせしきふり

あつたかき風やまきのほとふりうは船をそまつ
 大船二十四艘少舟さくくふかきまをほあふりて
 ふかきまをわらへかきまをほあふりて
 は二ふりのお乃こまをまふりてあふりかの嶋ふ
 かいまをほあふりてあふりてあふりてあふりて
 ふりてあふりてあふりてあふりてあふりて
 さくま 考通 梅松論曰先帝ハ船の日敷十金をへて
 船出さくまの尾のふりてあふりてあふりてあふりて
 けきと一船の空みとてその日は船又あふりてあふりて

涉とくまのさくまの尾はよりいふとてあふりてあふりて
 まの冬上修をいふ東の支使も下向と ○佐佐木隠
 岐判官貞清 参考曰作清高為得或作貞満又非系云
 宗清子貞清塩谷判官高貞父也
 府島ト云所ニ黒木ノ御所ヲ作テ皇居トス
 楠正成攻湯淺定佛降之

太平記曰三日楠五百餘騎俄ニ湯淺カ城へ押寄ル
 祐之案太平記曰去年楠赤坂ニテ燒死タリトテ落
 タル後ハ武家ヨリ其跡ニ湯淺孫六入道定佛ヲ地
 頭ニ時ニ湯淺カ所領紀伊國阿瀬川ヨリ人夫五六
 居置 百人一兵糧ヲ持セテ夜中ニ城へ入ントスル由ヲ

聞テ是是ヲ奪取テ其儀ニ物具ヲ入替テ城中ニ入
ントスルヲ楠カ勢是ヲ追散スル真似メ追ツ返ツ
ニタルヲ城中ヨリ打テ出テソ、口ナル敵ノ兵ヲ
引入ケル楠カ勢入スマシテ儀ノ中ノ物具取出シ
ヒシヒシト堅メテ内外同時ニ関ラ作ル湯浅内外
ニ取籠ラレテ忽降人ニ楠出ツ楠其勢ヲ合セテ七
百餘騎ニ成テ和泉河内ヲ靡ケテ大勢ニ成ヌ

兒嶋高德應先主

太平記曰其比備前國ニ兒島備後三郎高德
参考一
今本三

郎和田備後守範長子孫三宅兒島三
郎亦稱今本新羅王子天日槍後也
ト云者主上笠
置ニ御座有ニ時味方ニ参メ義兵ヲ舉シカ事未タ
成サル先ニ笠置モ落サレ楠モ自害ニタリト聞ヘ
シカハカヲ失テ黙止ケルカ主上隠岐國へ遷サレ
サセ給フト聞テ二心ナキ一族共ヲ集テ評定シケ
ルハ志士仁人無求生以害仁有殺身以成仁ト云リ
イサヤ路次ノ難所ニ相待テ其隙ヲ伺フヘシトテ
備前ト播磨トノ境ナル舟坂山ノ巔ニ隱伏テ待タ
リケルカ臨幸餘リニ遅カリケレハ人ヲ走メ是ヲ
見スニ警固ノ武士山陽道ヲ經ヌ播磨ノ今宿ヨ

リ山陰道ニ懸リ遷幸ヲナシ奉リケル間高德カ支
度相違シテケリサラハ美作杉坂ニテ待ヘシト三
石山ノ道ナキラ直違ニ杉坂ニ著タレハ主上早院
庄へ入セ給ヒヌト申ス間力ナク是ヨリ散々ニ成
テケルカ所存ヲ上聞ニ達セント微服潜行シテ時
分ヲ伺ケレバ然ルヘキ隙モ無リケレハ君ノ御座
アル御宿ノ庭ニ大ナル櫻木有ケルヲ押削テ一句
ノ詩ヲ書付タリ天莫空勾踐時非無范蠡御警固ノ
武士共見付タレト諺カ子テ上聞ニ達シケリ主上

ハ御覺リ有テ殊ニ御快ク笑ハセ給ヘ凡武士共ハ敢テ
其未歴ヲ知ス思ヒ咎ムル事モナカリケリ

前権中納言藤實世罷

公卿補任曰十日前権中納言依關東奏聞止出仕被預
之由按察使資名卿為勅使被仰父前内大臣

鎌倉釋前大納言藤宣房

補任曰十日前大納言藤宣房武家赦免歸宅可出仕
之旨命之○太平記曰萬里小路大納言宣房卿子息

藤房計之案補任今年五月藤房配流下総國未知如何季房ハ遠流ニ虜セラ

レタレ氏賢才ノ聞へ有トテ關東別儀ヲ以テ其罪
ヲ宥ノ當今ニ召仕ハルヘキノ由奏シ申ス是ニ依
テ日野中納言資明ヲ勅使トシテ此旨ヲ仰下サレ
ケレハ宣房申サレケルハ臣不肖ノ身多年奉公ノ
勞ヲ以テ恩寵ヲ蒙リ官祿共ニ進三剩政道輔佐ノ
名ヲ汚ス君ニ事ルノ禮其非アルニ遇テハ嚴顔ヲ
犯メ諫争フ三夕ニ諫テ納ラレサレハ身ヲ奉シテ
退ク匡正ノ忠アリテ阿順ノ徒ナキ是良臣ノ節也
若諫ヘキヲ見テ諫サル是ヲ尸位ト云退クヘキヲ

見テ退カサル是ヲ懷竈ト云懷竈尸位ハ國ノ奸人
ナリトイヘリ君今不義ノ行オハシテ武臣ノ為ニ
辱ラレ給ヘリ是臣カ預知ラサル所ニ依テ諫言シ
獻セストイヘ氏世人豈其罪ナキ事ヲ許サンヤ就中
長子二人遠流ノ罪ニ處セラレ我已ニ七旬ノ齡ニ
傾ケリ後榮誰カ為ニ期セン前非何ソ又耻サラン
ヤ二君ノ朝ニ仕ヘテ辱ヲ衰老ノ後ニ抱ンヨリハ
伯夷カ行ヲ學テ飢ヲ首陽ノ下ニ忍ハンニハシカ
シト宣ヘハ資明暫ク有テ忠臣不必擇主見可仕而

治而亡トイヘリサレハ百里奚ニ仕秦穆公永致霸
業管夷吾 佐齊桓公九朝諸侯主無以道射鈞之罪
世皆不奈鬻皮之耻トイヘリ就中武家如此許容ノ
上ハ賢息二人ノ流罪モ争カ赦免ノ御沙汰ナカラ
ニヤ伯夷叔齊飢テ何ノ益カアリシ許由巢父遁テ
用ルニ足ラス抑身ヲ隱シテ永ク末葉ノ一跡ヲ断
ニト朝ニ仕テ遠ク前祖ノ無窮ヲ耀サント是非得
失何ノ所ニ有ルヤ鳥獸ト群ヲ同フスルハ孔子ノ
取サル所也ト理ヲ盡シテ責ラレケレハ宣房顔色

誠ニ屈伏シテ以罪弁生則違古賢夕改之勸忍垢苟
全則犯詩人胡顏之譏ト魏ノ曹子建カ詩ヲ獻セシ
表ニ書タリシモ理トコソ存スレトテ遂ニ參仕ノ
勅答ヲ申サレケル

比叡山火

皇年代記曰十三日叡山法華堂以下火事

鎌倉釋前中納言藤公明

補任日前中納言藤公明武家赦免歸宅可出仕之由
申之

六波羅道隅田高橋禦楠兵於撰南不利而退

太平記曰十七日楠ハ住吉天王寺邊ニ打テ出渡邊
 橋ヨリ南ニ陣ヲ取ル洛中俄ニ騒動シテ隅田高橋
 祐之案南朝紀傳作隅田ヲ西六波羅ノ軍奉行トノ
 次郎右衛門高橋又四郎
 四十八箇所ノ篝并ニ在京人歳内近國ノ勢ヲ合テ
 五千餘騎同廿日ニ天王寺ニ指向ラル楠ハ二千餘
 騎ヲ三手ニ分テ宗徒ノ勢ヲハ住吉天王寺ニ隱メ
 僅三百騎許ヲ渡邊ノ橋ノ南ニ控サス隅田高橋小
 勢ナリト見侮テ橋ヨリ下ヲ渡シケレハ五千餘騎

ノ兵共モ橋ヲ歩メセ河ヲ渡シテ向ノ岸ニ駈上ル
 楠カ勢ハ遠矢々々射捨テ一戦モセテ引退ク六波
 羅勢勝ニ乗テ天王寺ノ北ノ在家ニテ追タリケル
 楠思フ程敵ノ人馬ヲ疲ラセ三手分タル二千騎一
 手ハ天王寺ノ東一手ハ石ノ鳥居一手ハ住吉ノ松
 陰ヨリ駈出メ開合ス隅田高橋タハカラレタルソ
 ト五千餘騎ノ兵共敵ニ後ロヲ切ラレ又先ニト渡
 部ノ橋ヲ指テ引退ク楠カ勢是ニ利ヲ得テ三方ヨ
 リ追駈ル大勢ノ兵一返モ返サス逃ケ延ントスル

程ニ人馬共ニ推落サレ水ニ溺レ岸ニ倒レ其マ、
 討レ五千餘騎ノ兵残少ニ打成サレ畝々京ヘソ上
 リケル六條河原ニ高札ヲ立テ渡部ノ水イカハカ
 リ早ケレハ高橋落テ隅田流ルラン通考又曰其比洛
 中田樂ヲ弄フ事昌ニシテ貴賤擧テ是ニ著セリ相
 摸入道此事ヲ聞及ヒ新座本座ノ田樂ヲ呼下シ弄
 フ事他事ナシ入興ノアマリニ宗徒ノ大名達ニ田
 樂法師ヲ一人ツ、預テ裝束ヲ飾ラセケル間是ハ
 誰某殿ノ田樂彼ハ何某殿ノ田樂ナト云テ金銀珠

玉ヲ逞クシ綾羅綿繡ヲ飾レリ宴ニ臨テ一曲ヲ奏
 スレハ相摸入道ヲ始トシテ一族大名我者ラシト
 直衣大口ヲ解テ拋出ス其費幾千萬ト云數ヲ知ラ
 ス略拍子ヲ替テ歌フヲ聞ハ天王寺ノヤヨウレホ
 シヲ見ハヤトハヤシケル南家ノ儒者刑部少輔仲
 範参考曰丹後守保範子此事ヲ聞テ天下將ニ乱ントスル時
 妖靈星ト云惡星下テ災ヲナストイヘリ参考曰妖
 星載于史籍無妖靈星抑伏星伏靈ニ
 靈星予仲範附會而然乎シカモ天王寺ハ佛法寂
 初ノ靈地ニテ聖德太子自ラ日本一州ノ未來記ヲ

留ノ給ヘリサレハ彼化物カ天王寺ノ妖靈星ト歌ケルハ
祐之案太平記曰高時田樂ニ混雜ノ醉興ニ
化物ニテ有天王寺邊ヨリ天下ノ動乱出表テ國家
シト云ヘリ敗ヒシ又ト覺エト云ケル

祐之按太平記以此條為五月按参考諸異本及神明鏡皆為四月今從之

京師改元 補任 ○鎌倉遣使定刑

太平記曰公家ノ朝拜武家ノ沙汰始リテ後東使工藤次郎左衛門尉二階堂信濃入道行珍 参考曰俗名行朝三郎左

衛門負網子也 二人上洛ノ死罪ニ行フヘキ人々流刑ニ處スヘキ國々關東評定ノ趣六波羅ニメ定ラレ

鎌倉流藤藤房季房於遠州

増鏡曰万里小路中納之藤房を、（以下省略） 才の季房乃今季房也、（以下省略） 考 通 按補任作五月流藤房於下総國太平記曰藤房ハ季房同國ニ流メ小田民部大輔ニ預ケラ
ル参考以小田名為兼秋又曰季房ハ常陸國ニ流メ長沼駿河守ニ預ケラレ

六月鎌倉殺入道公敏前中納言源具行前宰相平成輔
前権中納言藤資朝藏人藤俊基於諸州

増鏡曰系者くすきそよの中はくすふなりぬる不先帝
の取まかりしよき部も品おとれかきりて成き國へ
侍らしきり洞院梅原仗大納言敏かしくお話しそよ
とくさ進はくもな成ゆりそれまや小山判友秀頼とやふ
まのくして下野國へまき也
祐之案太平
記作上総國 花山院大納言
師賢の子紫介貞隆うらそ下総へくる六月十日あまふ
初めしり源中納言具行と梅原一丁の阿比戸そゆ

たもこ乃中又そりてはておもふはくきこゆるいさはく
かろはくこよあさるへたややらん 畧 坊本佐俊判友入

参考曰俗名高氏蹄勝
樂寺佐渡守宗氏子 まなしてそくりまきかしの系

とよふよ 案補佐柏原
在近江國 志いし屋まして阿比戸乃入

まの阿比戸へ人をはらうたる返りまのちるまへそあわと
まのかかりるとなまきくしうらひかしくたふこも
まのたへまきねのよらむらひは侍まへし西第一かあぬ
まのれいまそかいるねまはにまかくまきねかみまはて
ら矢さるわふかたはくひちらのこうねのあは侍りくはた

まねをぬくほのちふふくろえこそわね 累よつひ
 けきしよのちききとふいふと急そつひあるまじり
 せきやうぬ 略かいらか話えんとらん地ふとんいひて阿い道
 なるよとにま阿の戸のまこやいと思ひ多入道とんて
 こかいたしゆはくくふいふ月十九なりかのまはるなり
 と考れうへぬ 略その日乃くははつわふそきて失はれ
 みきり 祐之案太平記辞世頌曰道遙生死四十二年山
 河一革天地同然○増鏡曰やふハ怪然之位の女有苗
 内信そそむいしういふいふととや一ありせ 平宰相成
 了れ屋そきあつてま阿屋のまら乃きまよりぬ
 補を阿はへとまきえかそそむかのまとやそそ

うーあいはる 祐之案公卿補任常樂記作伊豆國早川
 宿太平記作相模國早川 尻太平記曰河

越三河入道 又元亨の社乃はうふなりきとて登殿乃中
 圓重具足

納まもいま依酒のしぬふ志はとけをのけわてふが
 こふてうらへんうへ阿いりの武きなはれをいふをまを
 けふ地いしうをそそむいひてたふぬきる子のまやう
 阿はれたるみくはてらつそそふきくはる時頑くせ

きくはる一四大本無主五蘊本末空將頭傾白及但如鏡夏
 風 参考曰按公卿補任曰資朝元弘二年被殺於配所
 常樂記為元弘二年五月二十五日被斬増鏡亦為
 元弘二年事然前後通考則太平記諸異本以資朝為
 正中元年被捕元弘元年被斬者非無理又按三十四

卷吉野上北面夢段本文諸異本並云元德三年五月二十九日資朝斬于依渡云云可並見祐之今從公卿補任係 俊基の御所 太平記曰俊基于六月 俊基の御所 太平記曰古来一句無死無生萬 かののこみれきあふふおふあふりなき里雲盡長江水清

考通 太平記曰去年ヨリ 参考曰玄 依渡國 考 作先為得

へ流サレテオハスル資朝卿ヲ斬奉ルヘシト其國ノ守護本間山城入道ニ下知セラル五月二十九日ノ暮程ニ牢ヨリ出シ斬ルト云云○参考曰毛利家天正本云都ヨリノ小生阿新ニ是ヲ取セヨトテ筆

ヲ添テ書レケル天地無定主日月無定時舉有三才強有三綱謂之如夢幻泡影爰和翁懷屈平之楚思八回優游以到今日為汝為言秋霜三尺曾不埋負松士見之豁開眼睛洒洒落落獨立乾坤之間咄元德三年五月廿九日和翁ト書テ下ニ判アリ○太平記曰辞世ノ頌ヲ書給フ五蘊假成形四大今歸空將首當白又截断一陣風○又曰資朝子息邦光中納言其比阿新トテ歳十三ニテオハシケルカ父ノ御囚人ニ成シ後ハ仁和寺邊ニ隠テ居ラレケルカ父誅セラレハ

キヲ聞テ最後ノヤウヲミルヘシトテ母ニ暇ヲ乞
ハレケルカ母モ痛ハ止カ子テ只一人附副タル
中間ヲ添テ佐渡國ヘ下シケル都ヲ出テ十日餘リ
越前敦賀津ニ着テ是ヨリ高船ニ乗テ程ナク佐渡
國ヘソ着ニケル自ラ本間カ館ニ到テシカクノ由
ヲ語りケレハサスガ哀ニヤ思ケンヤカテ持佛堂
ニ偈ヒ入テ疎カラヌ躰ニテ置タリケレ居今日
斬ルヘキ人ニ是ヲ見セテハ障ト成ヘシ又關東ノ
間ヘモ如何有ントテ父子ノ對面モ許サス五月廿

九日ノ夜首ヲ落ノ後常ニ法談ナトシタル僧葵礼
形ノ如ク取營ニ空キ骨ヲ阿新ニ送りケレハ一人
ノ中間ニ持セテ先我ヨリ先ニ高野山ニ參テ奥院
トカヤニ納ヨトテ都ヘ帰上セ我身ハ勞ハル事有
ル由ニテ尚本間カ館ニ留リケル是ハ本間カ情ナ
ク父ヲ今生ニテ見セサリツル鬱憤ヲ散セント思
フ故也四五日經ル程ニ晝ハ病ノヨシニテ終日卧
シ夜ハ忍ヤカニヌケ出テ本間カ寢所ナト細々ニ
伺ケル或夜雨風烈シク吹テ番スル郎等共モ皆遠

侍ニ卧タリケレハ待ツ所ノ幸ト思ヒ本間カ寢所
ノ方ヲ伺フニ今夜ハ常ノ寢所シカヘテ何クニ有
尺見ヘス又ニ間ナル處ニ燈ノ影ノ見ヘケルヲ子
息ニテヤ有ニソレナリ尺討テ恨ヲ散セントヌケ
出テ是ヲ見ルニソレサヘ爰ニハ無ノ中納言殿ヲ
斬シ本間三郎参考天正本云只一人卧タリケルヲ
鐵洞ツギトシテ心閑ニ後ノ竹原ニ隠レ入テ掘ヲ飛越シ
トシケルカ口ニ丈深一丈ニ餘タル掘ナレハ堀ノ
上ニ末靡キタル具竹ノ梢ヘ登リタレハ竹ノ末向

へ靡卧シテ安々ト掘ヲ越テ麻ヤ蓬ノ生茂タル中
ニ匿レ居タレハ追手共ト覺シキ者百四五十騎馳
散テ問音ノ過行ケル夜ニナレハ湊ヘト志テ行程
ニ年老タル山伏一人ニ扶ラレテ舟ニノリ越後ノ
府ニ着ニケル○神明鏡曰元徳元年五月二十日俊
基葛原ニテ誅セラレトテカクナン秋ヲ待タテ
葛原原ニ消ル身ノ露ノ恨ヤ世ニ残ルラン○常樂
記曰元弘二年六月三日俊基朝臣於武藏國葛原被
誅云云

祐之曰參考云按俊基被斬神明鏡為元德元年非也增鏡常樂記為元弘二年太平記異本俊基及資朝被斬皆為元弘元年二說難適從而通考太平記前後文意前段所謂鞠問三僧徒而知資朝俊基為謀首獲捕俊基當斯時持明院殿急遣使鎌倉告有大變於是衆議為長崎高資建議請廢帝流尊雲及殺資朝俊基等也議決矣曰差使佐渡命殺資朝資朝子阿新在京聞之乃赴佐渡阿新至則資朝所斬云云而至下段東使入洛將遷帝等事勢相連然則

資朝俊基被斬云元弘元年者難為妄耳逐段徃徃考異同并注管見冀讀者照應互見證其訛也

六波羅捕殿法印良忠

太平記曰廿一日殿法印良忠

祐之案普光園院開白良實孫權大僧都良寶

子子ヲハ大炊御門油小路ノ篝小串五郎兵衛尉秀信

召捕テ六波羅へ出シタレハ越後守仲時齋藤十郎

兵衛ヲ使ニテ申サレケルハ此比一天ノ君夕ニモ

叶ハセ給ハヌ御謀及ヲ御身ナト思立給ハン事且

ハヤンハナク且ハ粗忽ニコソ覺テ候へ先帝ヲ奪

七進ラセシ為ニ當所ノ繪圖ナトマテ持廻ハラレ
候ケル條武敵ノ至リ重科雙ナシ隱謀ノ企罪責餘
リアリ計ノ次第一々ニ述ラレ候ヘ具ニ關東ヘ注
進スヘシトソ宣ヒケレハ法印ノ返事ニ普天ノ下
王之ニ非スト云事ナシ率土ノ濱王民ニ非スト云
事ナシ誰カ先帝ノ宸襟ヲ歎キ奉ラサラン人タル
者是ヲ喜フヘキヤ獻慮ニ代テ玉體ヲ奪ヒ奉ラン
ト企ル事ナシカハヤンナナルヘキ無道ヲ誅セ
ンタメニ隱謀ヲ企ル事更ニ粗忽ノ儀ニアラス始

ヨリ獻慮ノ趣ヲ存知笠置ノ皇居ヘ参内セシ條子
細ナシ然ルヲ白地ニ出京ノ跡ニ城郭カタメナク
官軍敗北ノ間カナク本意ヲ失ヘリ其間ニ具行卿
相談ノ繪旨ヲ申下シ諸國ノ兵ニ賦リシ條勿論也
有程ノ事ハ此等ナリトソ返答セリ六波羅評定様
様成ケルヲ二階道信濃入道申ケルハ彼罪責勿論ノ
上ハ是非ナク誅セラルヘケレ氏與黨ノ人ナト猶
尋子沙汰有テ重テ關東ヘ申サルヘキカト申ケレ
ハ長井右馬助始メ面々ノ意見一同セシカハ五條

京極ノ篝加賀前司ニ預ラレテ禁篋ス

是月鎌倉流前参議藤公顯於出羽國補任○秋七月鎌倉

遣宇都宮公綱来攻楠兵不利而還

太平記曰其比京都餘リニ無勢ナリトテ關東ヨリ

上セラレタル宇都宮治部大輔公綱初名高綱参河守貞綱子法名理蓮

六波羅ノ命ヲ受テ七月十九日五百餘騎ニテ天王

寺へ下ケル河内國ノ住人和田孫三郎此由ヲ聞テ

楠ニ云ケルハ先日ノ合戦ニ負腹ヲ立テ京ヨリ宇

都宮ヲ向ケ候ナル今夜既ニ柱松ニ著テ候カ其勢

僅六七百騎ニハ過シト聞へ候縱武勇ノ達人ナリ

氏何程ノ事カ候へキ今夜逆寄ニメ討散メ捨候ハ

ハヤト云ケルヲ楠暫思案シテ合戦ノ勝負ハ必シ

モ大勢小勢ニハ依ラス只士卒ノ志シ一ニスルト

セサルト也サレハ大敵ヲ見テハ欺キ小敵ヲ見テ

ハ畏レヨト申事是ナリ先度ノ軍ニ大勢打負テ引

退ク跡へ小勢ニテ相向フ志一人モ生テ帰ラント

思フ者ハ候ハシ其上宇都宮ハ坂東一ノ弓矢取也

紀清西黨ノ兵元來戰場ニ臨テ命ヲ弁ル事塵芥ヨ

リモ尚輕クス其兵七百餘騎志ヲ一ツニシテ戦シ決
 セハ當手ノ兵縦ヒ退ク心ハナク凡大半ハ討タル
 ヘシ天下ノ事全ク今般ノ戦ニ依ルヘカラス正成
 ニ於テハ明日態此陣ヲ引退キ敵ニ一面目アル様
 ニ思ハセ四五日ヲ經テ後方々ノ峯ニ篝火ヲ燒テ一
 蒸シムス程ナラハ坂東武者ノ習程ナク氣疲レテ
 一面目アル内ニ引返サントイハヌ者ハ候ハシト
 夜己ニ曉天ニ及テ楠モ和田湯浅モ諸共ニ引タリ
 ケル夜明レハ宇都宮天王寺ニ押寄古宇都参考或
作難波

浦

ノ在家ニ火ヲ懸閑ヲ揚タレ凡敵ナケレハ戦ハ
 サル先ニ一勝ノ一面目ハアル躰ナレ凡ヤカテ續
 テ敵ノ陣ヘ攻入ニテモ無勢ナレハ叶ハヌ又誠ノ
 軍一度セスシテ引返サンモサスカナレハ進退谷
 タル處ニ四五日ヲヘテ後和田楠野伏四五千人ニ兵
 二三百騎差副天王寺邊ニ遠篝火ヲ燒セケレハ山
 ヲ浦々其勢幾萬騎アラント推量ラレテ夥シ如此
 スルヲ兩三夜ニ及ヒ次第ニ相近ツケハ宇都宮是
 ヲ見テ敵寄来ラハ一軍ノ雌雄ヲ決セント志テ馬

ノ鞍ヲモ息メス鎧ノ上帯ヲモ解カス待懸ケタレ
氏軍ハナクノ敵ノ取廻ス勢ニ勇氣疲レ武力怠テ
引退ント思フ心付ニケリ紀清兩黨ノ輩モ僅ノ小
勢ニテ此大勢ニ當ラニ事ハ始終如何ト覺ヘ候異
故ナク追落ノ候ツルヲ一面目ニメ御上洛候ヘカ
シト申セハ諸人皆此議ニ同シ七月二十七日夜半
ハカリニ宇都宮ハ天王寺ヲ引テ上洛スレハ翌日
早旦ニ楠ハ頓テ入替リタリ正成威猛ハ逞ストイ
ヘ氏民屋ニ頓シモナサス士卒ニ禮ヲ厚クシケル

間遐壤遠境ノ人牧マテモ聞傳ニ馳加ル程ニ其勢
漸強大ニメ今ハ京都ヨリ左右ナク下サレニ事ハ
叶ヒ難クトソ見ヘタリケル

鎌倉流東南院僧正聖尋等於諸州

太平記曰東南院僧正聖尋ハ下総國峯僧正俊雅ハ
對馬國ヘト聞ヘシカ俄ニ其議ヲ改テ長門國ヘ流
サレ給フ 祐之按太平記第十一長門探題降
參下俊雅流於筑州云云與此齟齬

鎌倉流聖護院聖尊法親王於但馬國

太平記曰第四ノ宮ハ但馬國ヘ流シ奉テ其國ノ守

護太田判官ニ預ラル考通祐之按參考以四宮為聖護院聖尊蓋有所據今按紹運錄聖尊第七宮又按參考曰太平記第八卷修金輪法條與此齟齬可併見

八月楠正成納幣於住吉神

太平記曰三日楠兵衛正成住吉ニ參詣シ神馬三匹獻之翌日天王寺ニ詣テ白鞍置タル馬白幅輪ノ太刀鎧一領副テ引進ラス是ハ大般若經轉讀ノ御布施也

祐之按此下載楠檢天王寺未來記之事恠誕不足

取但為擊士卒志氣而構之耶

九月鎌倉癸東西兵攻先主師

太平記曰廿日相摸守ノ一族其外東八箇國ノ中ニ

然ルヘキ大名共シ催メ差上セラル一族ニハ阿曾

彈正少弼參考一曰遠江左近大夫將監治時子也名越遠

江入道參考一曰大佛前陸奥守貞直參考云諸異本

戰死鎌倉而此處及弟七卷赴金剛山弟十一金剛山寄手被誅段云被誅阿弥陀峯然則載貞直死有二所甚為矛盾按保曆間記北條家譜攻金剛山後被誅者大佛陸奥右馬權助高直也戰死鎌倉者大佛陸奥守貞直也今載貞直者蓋誤也同武藏左近將監參考一作陸奥右馬權助高直為得

政 伊具右近大夫將監 参考一云右作陸奥右馬助

一云名家時按式部丞維貞子陸奥右馬權助高直兄

一作赤橋右馬頭一載赤橋左馬頭家時按家時乃陸奥右馬助然一本外様ノ人々ニ八千葉大助胤宇都

宮三河守小山判官 秀武田伊豆三郎小笠原彦五郎

土岐伯耆入道 参考一云孫存孝按俗葦名判官 参考

海老 三浦若狭五郎 参考一有判官字千田太郎城太

宰大貳入道 参考一佐佐木隱岐前司 参考云名清高

不當出 同備中守結城七郎左衛門尉 参考按名親光

小田常陸前司 時長崎四郎左衛門尉 参考云同九郎

左衛門尉 師長江弥六左衛門尉 参考一作長沼

河守渋谷遠江守河越参河入道 参考工藤次郎左衛

門尉高景狩野七郎左衛門尉伊東常陸前司 参考一作伊具

一作伊藤 同大和入道安藤藤内左衛門尉宇佐美撰津前

司二階堂出羽入道 道同下野判官 参考名同常陸介

参考名宗 安保左衛門入道南部次郎 参考一作南山

城四郎左衛門尉 参考一載小原備中守 此等ヲ始ノ

宗徒ノ大名百三十二人都合其勢三十萬七千五百

餘騎鎌倉ヲ立テ十月八日先陣既ニ京都ニ著ク夫

ノ三十ヲス河野九郎 参考諸本作九郎左衛門尉考河野家譜通有子有九郎左衛門尉通治後改名通盛任對馬守按勤王師者有河野備後守通治属高時者亦名作通治河野蓋有二通治歟

四國ノ勢ヲ率ノ大船三百餘艘ニノ居崎ヨリ上テ

下京ニ著ス厚東入道大内介安藝熊谷周防長門ノ

勢ヲ引具ノ兵船二百餘艘ニテ兵庫ヨリ上テ西京

ニ著ス甲斐信濃源氏七千餘騎中山道ヲ經テ東山

ニ著ス江馬越前守淡河右京亮 参考一作近江守或作遠江守按北條家譜佐介越後守時盛子

時治晞淡河右京進 北陸道七箇國ノ勢率ノ三萬餘騎ニノ東坂本ヲ經テ上京ニ著ク

通考 参考一曰大

塔宮并楠兵衛正成誅伐事所差上遠江左近大夫將

監治時也引率一族等来月二十日以前進發就治時

催促可抽軍忠之狀依仰執達如件正慶元年十一月

八日右馬權頭相摸守

冬十月 新主以源通顯為内大臣 元大納言 ○入道師賢卒于千葉

南朝紀傳曰師賢卿配所ニテ逝去辞世雲ノ色時雨

雪氣ニ三上ハカテタハカキクラス我心カナ○太

平記曰師賢ハ志學ノ年ヨリ和漢ノオヲ事トシテ

采辱ノ中ニ心ヲ留メ給ハサリシカハ今遠流ノ刑
ニ逢ル事露計モ心ニカケ思ハレヌ只時ニヨリ興
ニ觸テ諷詠等閑ニ日シ渡ル出家ノ志アル由頼ニ
申サレケルヲ相模入道仔細候ハシト許ノイマ夕
強仕ニ満ス桑門人ト成給ヒシ幾程ナク元弘ノ亂
出来シ始メ病ニ侵サレ圓寂シ給フ
祐之按参考曰公卿補任增鏡元弘元年九月二十
九日笠置落城日出家而太平記諸本至關東之後
請高時而出家恐非也又云元弘元年亂被捕二年九

月流刑十月卒于配所今太平記文義不通又云常
樂記云元弘二年十月師賢於千葉逝去按南朝謚

文貞公

十一月新主以藤兼季為太政大臣

元前右大臣
臣○補任

增鏡曰大嘗會乃と他も言沛座の以を又兼季も太政大臣

又ちりては若き乃の内かくふ小器器はくまはりりまきこて

考通 異本太平記曰五節清暑堂ノ御神樂ニ

ハ役人兼テ其沙汰アリ琵琶ハ菊亭前右府藤兼季其

任ニ當リ給フ前官ニテ神宴ニ預ル條先規嘉模ニ

非ストテ太政大臣ヲ望申サレケル此事京都ニテ如何ト思召ケレハ關東へ仰合サレケルニ返事延引ノ間神宴既ニ相迫ル是ニ依テ左右ヲ待スニテ彼ニ任シケリ略朝議參差ノ由關東内々賧立申由聞ヘアリテ相國ヲ召返サレヌ祐之謂公卿補任正慶二年五月十七日伯州詔命到未停其職為前右大臣

大嘗會

皇年代記曰悠紀近江主基丹波

是歲尊雲法親王楠正成徵兵四方

増鏡曰大塔の首を法親王のりは虎口を乃と進たるはさ返
アノノカノコサシメハカハマシヤモヤハシクなくいそ
オハハレハ身有んとくろくおくハハシクハハシク又曰大
塔の法親王楠の正成とを物おれハハシクハハシクハハシク
とのこりくもへハハシクハハシクハハシクハハシクハハシク
塔とハハシクハハシクハハシクハハシクハハシクハハシク
さて大塔のまは合者も風この法はどのかハハシクハハシク
あるものあもハハシクハハシクハハシクハハシクハハシク
法ハハシクハハシクハハシクハハシクハハシクハハシクハハシク

てより聖に言聖ふとおいすかよいはさるぬきく
くまのいかくはききものいひてきまればありさまのこ
たつていひていひていひていひていひていひていひて
はれきさういきさういひていひていひていひていひて
もと東にまゝいひていひていひていひていひていひて
をせまぐいひていひていひていひていひていひていひて
きくも正威の聖徳太子の御墓乃おをいひていひていひて
いてあひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
かゝいひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

つていひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
さあひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
レニ為ニ暫ク南都般若寺ニ忍テ御座シケルニ一
乗院ノ候人按察使法眼好專 参考一云内侍 五百餘
原按乃好專氏
騎ヲ率メ押寄ル折節附奉ル人ハ一人モ無レハ防
テ落サセ給フヘキ様モナク隠レテ見ハヤト思召
大般若ノ唐櫃三有テ一ハ經ヲ半過取出ノ蓋ヲモ
セサリケル其中ニ御身ヲ縮テ若搜シ出サレハト
カヲ抜テコ、ニコソト云ニスル一言ヲ待セケル

去程ニ兵佛殿ニ乱入テ餘リニ求メカ子テ蓋シ夕
 ル經ノ櫃ニシ開キ底ヲ翻メ見ケレ氏開キタル櫃
 ハ見ルニテモナシトテ皆寺中ヲ出去又若兵立帰
 リテ委ク搜ス事モヤ有ント頓テ前ニ搜シ見タル
 櫃ニ入替テオハシケルカ案ノ如ク兵共又立帰リ
 蓋ノ開タルヲ打移メカラクト打笑テ大般若ノ櫃
 フ中ヲ能々搜シタレハ大塔宮ハイラセ給ハテ大
 唐ノ玄奘三藏コソオハシケレト戯レテ一同ニ門
 フ出ニケルカクテハ南都ニ御隠家モ叶ハス熊野

方へ落給フ御供ニ光林房玄尊参考一云源尊一云源存赤松律
 師則祐参考源則村入道圓心本寺相摸参考一云勝憲弟八卷作
 家定未岡本三河房参考一云武藏房名豪雲村上
 知孰是参考一云馬助按本文往往云名義光梅松
 彦四郎参考一作左馬助按本文往往云名義光梅松
 泰子左片岡八郎参考一作五矢田彦七参考一
 馬権頭参考一作矢田彦七参考一平賀
 三郎彼是以上九人也参考一本無三河房武藏房而載
 野彦五郎舍弟孫参考一本無三河房武藏房而載
 三郎為十一人皆柳ノ衣ニ笈ヲ掛ケ山伏ノ熊野
 参詣スル躰ニ見セテ路ノ程十三日二十津河へ着
 テ竹原八郎入道参考云カ甥戸野兵衛参考一云カ名宗規名正衛

家ニ案内シ御逗留アリケレトイマタ宮ト小知ラ
サリケルニ片岡八郎矢田彦七カアラ熱ヤトテ頭
巾ヲ脱タルニ月額ノ跡隠レナシ事ナク問落シテ
驚キ奉リ俄ノ黒木御所ヲ作りテ守護シ竹原八郎
入道ニ此由ヲ語りケレハ頓テ我館へ入レ進ラセ
テ半年ハカリモ御座有ル程ニ人ニ見知ラレシト
思召ケル御支度ニ御還俗ノ躰ニ成給ヒヌレハ入
道カ息女ヲ夜ノ御殿へ召レテ御覺へ他ニ異ナリ
家主ノ入道モ弥志ヲ傾ケ近邊ノ御民共モ次第ニ

帰伏申タルニ由テ却テ武家ヲハサミシケリ去程
ニ熊野別當定遍此事ヲ聞テ寄セントスルニ縦ヒ
十萬騎ノ勢有ル叶ヘカラス其邊ノ御民共ノ欲心ヲ
勸テ宮ヲ他へオヒキ出サント道路ノ過ニ札ヲ立
テ宮ヲ討奉ラン者ニハ其品々ノ恩賞ヲ與フヘシ
トノ法ヲ出シケル欲心強盛ノ八莊司イツシカ心
變シ色替テ宮モ此所ノ御住居モ悪カリナニ吉野
ノ方へ御出アラハヤト仰ケルヲ竹原入道強テ留
申ケレハサスカ叶ハセ給ハス恐懼ノ中ニ月日ヲ

送ラセ給ヒケルカ入道カ子共サヘ宮ヲ討奉ラン
ノ企アリト聞ヘシカハ宮潜ニ十津河ヲ出テ高野
ノ方ヘ赴カセ給フ○又曰大塔宮ハ十津河ヲ出テ
高野ノ方ヘ赴カセ給フ路ニハ小原芋瀬中津河ト
云敵陣ノ難所ヲ通ル路ナレハ中々敵ヲ打憑テ見
ハヤト思召レ先芋瀬並司カ許ヘ入セ給ヘリ芋瀬
入進ラセスノ使者ヲ以テ申ケルハ三山別當定遍
武弁ヲ言テ隠謀與黨ノ輩ヲ關東ヘ注進仕ル事ニ
テ候ヘハ左右ナク通シ進ラセニ事後ノ罪科陳謝

スルニ據アルヘカテスサリナカラ宮ヲ留進ラセ
ニ事ハ其恐候ヘハ御供ノ人々ノ中ニ名字サリ敢
ヌ人ヲ一兩人賜ハリ候ハシカ然ラスハ御紋ノ旗
ヲ給ハリテ合戦仕テ候ツル支證是ニテ候ト武家
ヘ申ヘキニ候ニツノ間何レモ叶マシクトノ御意
テ候ハ、カナク一矢仕ニスルニテ候ト餘議モナ
ケニ申入タリ宮ハ此事何レモ難儀也ト思召テ敢
テ御返事モ無リケルヲ赤松律師則祐御大事ニ代
リテ出候ハント申ケレハ平賀三郎是ヲ聞テ今附

歴代
御
往

纏奉ル人ハ一人ナリト云凡皆御為ニハ股肱耳目
ヨリモ捨カタシ芋瀬カ申所ケニ黙サレ難ク候ヘ
ハ安キニ就テ御旗計ヲ下サレンニ何ノ煩カ候ヘ
キト申ケレハ宮実モト思召テ日月ヲ金銀ニテ打
テ著タル御旗ヲ下サレ宮ハ遙ニ行過給ヒ又時ニ
村上彦四郎義光遙ニサカリ追著進ラセント急ケ
ル路ニ芋瀬カ下人ニ持セタルヲミレハ宮ノ御旗
ナリ村上恠テ事ノ様ヲ問ケレハ然クノ由ヲ語ル
村上コハソモ何事ソヤ汝等程ノ大凡下ノ奴原カ

左様ノ事仕ヘキ様ヤアルト御旗ヲ引奪テ剩彼下
人ヲ廻テ四五丈ハカリ投タリケル芋瀬モ恠カニ
ヤ怖ケン一言ノ返事モナシ村上ハ御旗ヲ肩ニカ
ケ程ナク宮ニ追著奉リ此様ヲ申ケレハ宮誠ニ嬉
ケニ打笑ハセ給ヒテ則祐カ忠ハ益施舍カ義ヲ守
リ平賀カ智ハ陳丞相カ謀ヲ得義光カ勇ハ北宮歟
カ努ヲ凌ケリ此三傑ヲ以テ我何ソ天下ヲ治メサ
ラニヤト仰ラレケルソ忝キ○又曰宮ハ小原ヘト
志テ薪負タル山人ニ路ノ様ヲ御尋有ケルニ其道

歴代
御
往

ニハ玉置庄司ト云無戴ノ武家方ノ人ノオハシマ
シ候此人ヲ御語ニ候ハテハイクラノ大勢ニテモ
御通り候又斥覺ス候ト申ケル程ニ片岡八郎矢田
彦七二人ヲ遣サレテ木戸ヲ開キ逆茂木ヲ引ノケ
サセヨト仰ラレケル庄司無返事ニテ内へ入ケル
カ事ノ躰蹠ケニ見ヘケレハ足早ニ帰ケルニ玉置
カ若黨共五六百人取太刀計ニテ追駈タリ二人ノ
者立留テ武者ノ馬ノ諸膝雜テ刎落サセ返ス太刀
ニテ首打落メ立タリケレハ續テ進ケル者近ク久

者一人モナシ只遠矢ニ射スクメケレハ片岡ハ討
レ又上下三十餘ノ兵氏宮ヲ前ニ立進ラセ既ニ中
津川ノ峠ヲ越ントスルニ向ノ山ニ玉置カ勢ト覺
テ五六百人カ程射手ヲ左右ニ分テ関ノ聲ヲ揚タ
リケル宮モ御自害ト極メ給フ處ニ北ノ峰ヨリ赤
旗三流ヲ翻メ其勢六七百騎玉置庄司ニ相向テ紀
伊國住人野長瀬六郎同七郎其勢三千餘騎ニテ大
塔宮ノ御迎ニ参タルト叫テ懸ル玉置叶ハシトヤ
思ヒケン忽ニ逃散又其ヨリ後宮ハ模野上野房聖

歴代

賢カ拵タル榎野城へ御入アリケルカ此モ分内狹
シトテ吉野ノ大衆ヲ語ハセ給ヒ愛染寶塔ヲ城郭
ニ構ヘ三千餘騎ヲ從ヘテタテコモラセ給フト聞
ヘシ

祐之按上文所謂事條年月不詳當在此等之間今
合録于此

尊雲法親王改稱兵部卿護良

梅松論曰大塔宮御遷俗有テ兵部卿親王護良トシ
申ケル去年君笠置へ入セ給ヒシ時ハ大和國半西

ニ御座ノ由聞ヘシカ凡御在所分明ナラサリシカ
多武峯吉野法師ヲ相語ヒ給ヒテ御會誓ヲ雪カル
ヘキ旨様々聞ヘシカハ歳内静ナラス

先主以入道源親房為准大臣

隆戒記應永三十二年四月記曰或人云後醍醐院臣
北畠大納言親房卿入道之後先准大臣次為准后彼
宣旨云於南朝
有此事元弘二年月日宣旨入道前大納言源
朝臣親房宜准大臣藏人云云經數年賜同日位記有

例

歴代

西

癸元弘三年光嚴院正慶二年是歲鎌倉亡春正月參議藤隆陰罷○二

月東軍各分兵攻吉野赤坂金剛山

太平記曰正月晦日参考或作二十八日或作閏二月三日按癸京正月而攻城者二月

也諸國ノ軍勢ヲ吉野赤坂金剛山ノ城ヘ向ラル吉野

ヘハ二階堂出羽入道道蘊カ二萬七千餘騎赤坂ヘ

ハ阿曾彈正少弼カ八萬餘騎先天王寺住吉ニ陣シ

張金剛山ヘハ陸奥右馬助カ二十萬騎奈良道ヨリ

向フ通考参考一曰金剛山ヘハ大佛陸奥守同武藏左

近將監名越遠江守陸奥右馬助二十萬騎奈良路ヨ

リ向フ○一云赤坂ヘハ赤橋右馬頭カ八萬餘騎金

剛山ヘハ阿曾彈正少弼二十萬騎大佛武藏將監名

越遠江守伊具駿河將監三十萬騎○保曆間記曰彈

正少弼治時陸奥右馬權助高直遠江入道宗教法師

彼等其外一族大將軍トシテ關東ニサルヘキ侍多

分差上ス其勢五萬騎彼城ヲ攻○元弘日記裏書曰

二月二十日治時向金剛山○神明鏡曰閏二月三日

諸國ノ軍兵吉野ヘハ道蘊二萬餘騎赤坂ヘハ阿曾

時春八萬餘騎金剛山ヘハ大佛陸奥右馬助貞宗二

陸奥

阿曾治時

十萬騎長崎悪四郎左衛門尉高貞其勢十萬騎ナリ
阿曾治時攻赤坂城人見恩阿本間資貞資忠死之

太平記曰赤坂ノ城ヘ向ヒケル阿曾彈正少弼後陣
ノ勢ヲ待拵ヘ同二月二日矢合有ヘシト觸ラレケ

ル所ニ武藏國住人人見四郎入道恩阿参考曰按俗名
光行彦太郎

某之参考曰一作資賴按
系播磨守忠綱子本間九郎資貞ニ語りケル

ハ某武息ヲ蒙テ齡己ニ七旬ニ餘レリソ、口ニ長

生ノ武運ノ傾ンヲ見ニモ老後ノ恨臨終ノ障氏成

又ヘケレハ明日ノ合戦ニハ先懸シ討死シテ名ヲ

遺サント存スルト語りケレハ本間實モト思ヒナ

カラ是程ノ打コミノ軍ニソ、口ナル先駈シテ討

死シタリ氏差テ高名氏云レマシ某ハ人並ニ振舞

ヘキナリト云ケレハ人見モ無興氣ニテ本堂ノ方

ヘ行ケルヲ本間恠テ人ヲ附テ見セケレハ石ノ鳥

居ニ何事トハシラス書テ帰リケル本間サレハコ

ソ此者ニ一定明日先駈セラレヌト唯一騎打立互

ニ先ヲ争テ赤坂ノ城ノ堀照ニ引傍テ二人氏ニ一

所ニ討レニケリ本間子息源内兵衛資忠則打出天

陸奥史

王寺ノ石ノ鳥居ヲ過ルトテ見レハ父ト共ニ討死
シケル人見入道カ書附タル歌アリ我モ右ノ小指
ヲ嚙切テ其血ヲ以テ一首ヲ側ニ書添テ赤坂城へ
向ニ城中ニ案内ノ駈入五十餘人ノ敵ト切合遂ニ
父カ討レシ跡ニテ太刀ヲクハへ貫レテ矢ニケル
石ノ鳥居ノ丸ノ柱ニ花サカ又老木ノ櫻朽ヌ凡其
名ハ苔ノ下ニ隠レシト書テ武藏國住人見四郎
入道恩阿生年七十三正慶二年二月二日赤坂城へ
向テ武息ヲ報セン為ニ討死仕畢ト書リ右ノ柱ニ

歴代

マテ暫シ子ヲ思フ暗ニ迷フラ一
参考一三 迷フトモ 六ノ街
ノ道知ベセン相摸國住人本間九郎資負嫡子源内兵
衛資忠生年十八歳正慶二年仲春二日父カ死骸ヲ
枕ニシテ同戰場ニ命ヲ止畢ト書リ

赤坂城主平野入道等降于阿曾尋殺之

太平記曰阿曾彈正ハ八萬餘騎ヲ率ノ赤坂城へ押寄
四方ヨリ取巻テ攻タレ凡堀ノ中ヨリ鏖ヲ揃ヘテ
射ケル間軍ノ度コトニ手負死人五百六百人射出
タリ寄手モ新手ヲ入替十三日マテ攻ケレ凡城中

歴代

少モ弱ラス爰ニ播磨國住人吉河八郎ト云者前テ
申ケルハ楠此一両年和泉河内ヲ管領ノ若干ノ兵
糧ヲ取入候ナレハ此城カ攻ニハ左右ナク落ヘカ
ラス思案ヲ廻シ候ニ此城三方ハ谷深ノ地ニツ、
カス一方ハ平地ニテ而モ山遠ク隔レリ何クニ水
アリ片ニヘヌニ水彈ニテ火矢ヲ打消候近來ハ兩ノ降
事モ候ハヌニ水ノ阜散ニ候ハ如何様南ノ山ノ奥
ヨリ地ノ底ニ樋ヲフセ水ヲ懸入ルカト覺候アハ
レ山ノ腰ヲ掘キラセテ御覽候ヘカシト申ケレハ

大將ケニモト思ヒ山ノ尾ヲ一文字掘切テ見レハ
案ノ如ク樋ヲ伏タリ此揚水ヲ止ラレテ城中ニ水
乏ク火矢ニテ大手ノ櫓ニツラハ燒落サレ又城中
ノ兵水ヲ飲マテ十二日ニ成ケレハ今ハ討死セント
城ノ木戸ヲ開キテ打出ントシケルヲ城ノ本人平
野將監入道参考神明鏡曰正成使弟楠
五郎據赤坂者又一說也暫ク事ヲ謀
テ降人ニ成テ時至ラン事ヲ待ヘシト阿曾カ兵淡
谷十郎ヲ以テ申入ケレハ大將大ニ喜ヒ本領安堵
ノ御教書ヲ成シ殊ニ功アラシキ者ニハ恩賞ヲ申沙

汰スヘキ由返答ノ合戦ヲ止メケルカ城兵二百八
十二人ヲ長崎九郎左衛門請取高手小手ニ戒メ六
波羅ヘ送り六條河原ニテ首ヲ刎又是ヲ聞テ吉野
金剛山ノ兵齒嚙メ降人ニ出ント思フ者ハ無リケ
リ通考門葉記曰正慶二年二月三十日勅書到未合戦
事凶徒頗雌伏官軍乘勝後二月朔日楠木城既没落
平野將監入道己下生虜數輩自方方賀送之

之
二階堂入道道蘊攻吉野城護良親王僅逃村上義光死

太平記曰正月十六日参考曰太平記第六正月晦日
山者為二月則園吉野蓋二月也金峯山吉水院真遍
言上狀曰元弘三年閏二月朔日道蘊攻上吉野山云
弥為二月明矣然太平記新田義貞賜大塔宮令旨段云
吉野城破大塔宮逃在河内山中二月十一日賜令旨
於義貞云由是見之二月十六日道蘊圍吉野亦無
理但同本第十義貞舉義兵段云三月十一日義貞賜
令旨今按二月道蘊圍吉野閏二月朔日大二階堂出
塔宮逃自吉野三月義貞賜令旨事理符合
羽入道道蘊六萬餘騎ニテ大塔宮ノ籠ラセ給フ吉
野城へ押寄同十八日矢合メ攻戦トイヘ斥城ノ躰
少モ弱ラスノ寄手退屈ノ見ヘニケル處ニ此山ノ
案内者トテ一方へ向ケル吉野執行岩菊丸参考云
一作岩

玉丸按吉野僧口碑云吉野執行自古以吉水院新熊
 野西家任其職大塔宮在吉野之時以竈吉水院任執
 行新熊野怒而謀反後醍醐帝潛幸時以吉水院為行
 宮以皇女降嫁之及其生子賜諱字名尊壽丸岩菊丸即新熊
 野也手ノ者共ニ申ケルハ我等案内タルニ依テ一方
 シ承テ向ヒタル甲斐モナキコソ遺恨ナレ推量ス
 ルニ城ノ後ノ山金峯山ニハ峻ヲ憑テ敵兵ヲ置タ
 ル事アラシト覺ユルソト足輕ノ兵百五十人ヲ金
 峯山ヨリ忍ヒ入ラセ關ノ聲ヲ揚ケ城兵關ノ聲ニ
 驚テ度ヲ失ハン時大手搦手三方ヨリ攻入タレハ
 思々ニ討死シケル程ニ宮ノ御座有ケル藏王堂へ

討テ懸ル今ハ遁ヌ所也ト思召マテ兵二十餘人ヲ
 前後左右ニ立切テ廻ラセ給フニ寄手大勢ナレト
 切立ラレ四方ノ谷へ颯ト引宮ハ藏王堂ノ大庭ニ
 御最後ノ御酒宴有テ数箇所ノ疵ヨリ流ル、血ヲ
 拭ヒ給ハス敷皮ノ上ニ立ナカラ大盃ヲ三度傾給
 へハ小寺相模太刀ノ鋒ニ敵ノ首ヲ刺貫テ御前ニ
 畏リ戈鋌劍戟ヲ降ス事電光ノ如ク也磐石ヲ飛ス
 事春ノ雨ニ相同シ然トハイヘ天帝ノ身ニハ近
 ツカテ修羅彼カ^為ニ破ラルトハヤシヲアケテ舞ニ

ケルカ大手ノ合戦急也ト覺テ敵御方ノ関ノ声相
 交テ聞ヘケルカ村上彦四郎義光鎧ニ立矢十六筋
 折懸テ御前ニ参テ申ケルハ大手ノ一ノ木戸云甲
 斐ナク攻破ラレツル間二ノ木戸ニ支テ数刻相戦
 候ツルニ御所中ノ御酒宴ノ聲冷ク聞ヘ候ニ就テ
 参テ候敵既ニカサニ取上テ御方ノ氣疲レ候又レ
 ハ切ヲ立ン事叶ハシト覺候敵ノ勢ヲ餘所ヘ廻シ
 候ハ又前ニ一方ヲ破テ一先落テ御覽有ベシト存
 候但跡ニ残留テ戦フ兵ナクハ御所ノ落サセ給フ

ト心得テ敵何クマテモ繞テ追込進ラセント覺ヘ
 候ヘハ恐アル事ニ候ヘ尺召レテ候錦ノ御鎧直垂
 ト御物具トヲ下シ賜テ御傘ニ代リ進ラセ候ハン
 ト申ケレ尺御赦シナカリケレハ義光詞ヲ荒ラカ
 ニシ斯ル浅間敷御事ヤ候漢高祖榮陽ニ圍マレシ
 時紀信高祖ノ真似シシテ楚ヲ欺ント乞シハ高
 祖是シ許シ給ヒ候ハスヤ是程ニ云甲斐ナキ御所
 存ニテ天下ノ大事ヲ思召立ケル事コソウタテケ
 レハヤ御物具ヲ脱カセ給ヒ候ヘトテ御鎧ノ上帯
 ヲ解奉レハ宮ケニモトヤ思召ケンコトクク脱給

ハセケル義光二ノ木戸ノ高槽ニ上リ遙ニ見送り
 奉リ御後影ノ函ニ隔ラセ給フ比槽ノ狭間ノ板切
 落シ名乗ケルハ天照太神ノ御子孫神武天皇ヨリ
 九十五代ノ帝後醍醐天皇 参考一作先帝為 第二ノ
 皇子一品兵部卿親王尊仁 得此時何稱諡
 参考諸本或作守仁尊仁 皆非也 一作護良為得
 逆臣ノ為ニヒサレ恨ヲ泉下ニ報セン為ニ只今自害
 スル有様見置テ汝等カ武運忽尽テ暇ヲキランスル
 時ノ手本ニセヨト鎧ヲ脱テ投落シ袴計ニ練貫ノ小
 袖推祖テ左ノ服ヨリ右ノソハ取マテ一文字ニ挿

切テ伏タリケル宮ハ引遠テ天河へ落給フヲ執行
 カ勢道ヲ要リテカサニ廻リテ打留ントス時ニ義
 光カ息兵衛藏人義隆 参考系作彦五郎朝日 父カ自
 太平記異本云年十八 害ノ時共ニ腹切ント馳來リケルカ大ニ父ニ諫ラ
 レテ宮ノ御供ニソ候ケルカ只一人踏留テ五百餘
 騎ノ敵ヲ受半時許支ヘテ討死ス其間ニ宮ハ虎口
 シ道テ高野山へ落給フ道蘊ハ宮ヲ打漏シタル由
 シ後ニ覺テ猶安カラス高野山へ押寄大塔ニ陣取
 テ尋求メケレ氏一山心ヲ合テ隠シ奉レハ甲斐ナ

夕千劍破城へ向ヒケル 通考 門葉記曰後二月九日仙
 洞勅書凶徒合戦事其後武家無申旨候然者朔日告
 野合戦凶徒等没落之由聞候返返日出候大法修中
 法驗掲馬随喜無極候金剛山又定没落不可有程欵
 猶猶大法修中凶徒城廓等多以攻落之由聞候十日
 仙洞勅書熾盛光法無為結願殊日出候就中修中楠
 木城以下數箇所責落候或又降人等濟濟生取等數
 輩召取之條法驗之至弥添信心候者也十二日青蓮
 院法驗叡感給旨尤馬頭親名被給旨曰為鎮逆類暴

惡被修熾盛光法之虜官軍多虜狼啖之族凶徒忽失
 蜂起之謀修中之法驗已掲焉

名越園金剛山楠兵能拒之

太平記曰千劍破城ノ寄手ハ前ノ勢八十萬騎ニ赤
 坂ノ勢吉野ノ勢馳加テ百萬騎ニ餘リケレハ城ノ
 四方二三里カ間ハ見物相撲ノ場ノ如ク打圍テ尺
 寸ノ地ヲモ餘サス充滿スルニ總ニ千人ニ足ラヌ
 小勢ニテ誰ヲ憑ニ何ヲ待テナキニ堪ヘテ防戦ケ
 ル楠カ心ノ程コソ不敵ナレ爰ニ赤坂ノ大将金澤

右馬助大佛奥州ニ申ケルハ是程總ナル山ノ巔ニ
用水有ヘシ氏覺ヘス揚水ナントノ有氏覺ヘ又城
中ニ水ノ卓散ニ候ハ如何様東ノ山ノ麓ニ流タル
溪水ヲ夜々ニ汲カト覺ヘ候是ヲ汲セ又様ヤ候ト
申ケレハ此議然ヘシトテ名越越前守カ三千餘人
ヲ下スヘキ道々ニ逆茂木ヲ引テ待懸ケル楠ハ元
来勇氣智謀相兼タル者ナリケレハ此城ヲ拵フル
始ヨリ用水ノ便ヲ見テ五所ノ秘水トテ峰通ル山
伏ノ秘ノ汲ム水此峯ニ有テ滴ル一ト一夜ニ五斛計

又大ナル水舟ヲ二三百打セテ氷ヲ湛置又数百箇
所作リ並ヘタル役所ノ軒ニ繼樋ヲ懸テ雨フレハ
雷ヲ少モ餘サス舟ニ受入舟ノ底ニ赤土ヲ沈メ水
ノ性ヲ損セ又様ニ拵ケルサレハ城中ヨリ此溪水
ヲ汲ン氏セサリケレハ守ル兵次第ニ心急リ氣弛
タル處ヲ楠射手二三百人城ヨリ下シ水邊ニ居夕
ル者七餘人射伏サセケレハコラヘ兼テ本ノ陣ヘ
引テケル其間ニ捨置タル旗大幕ナト取持セテ翌
日城ノ大手ニ三本傘ノ紋書タル旗ト幕トヲ引テ

名越殿ヨリ賜ツル間是へ御入候テ召レ候ヘカシ
ト同音ニ笑ヒケレハ名越安カラヌ事ニ思ヒ當手
ノ者氏一人モ残ラス討死セヨトテ切岸ノ下マテ
ツメサセケル時城中ヨリ切岸ノ上ニ横夕ヘテ置
タル大木十計切落メ寄手四五百人壓ニ打タレテ
死ニケリ今ハ取巻テ食攻ニセヨト下知ノ軍ヲ止
ラレケレハ徒然ニ皆堪カ子テ或ハ連歌碁雙六百
服茶褒貶ノ歌合ナトヲ翫テ夜明ス少程經テ楠芥
ヲ以テ人形ヲ二三十作り甲冑ヲ著セ城ノ麓ニ立

置其後ニ兵五百人ヲ交テ夜ノ涼ノくト明ル霧ノ
下ヨリ同時ニ闕ヲ作ル寄手驚テ相集ル處ヲ所存
ノ如ク謀リヨセテ大石ヲ四五十一度ニ発スル程
ニ集リタル敵二三百人矢庭ニ打殺ス又名越遠江
入道ト同兵庫助トハ叔侄ノ間ナルカ遊君ノ前ニ
テ雙六ヲ打テ骰子ノ目ヲ論メ互ニ死ケル

先主賜綸旨於新田義貞

太平記曰上野國住人新田小太郎増鏡作
小四郎義貞モ關
東ノ催促ニ從テ金剛山ノ搦手ヘ向ケルカ如何ナ

ル所存カ出来ニケン執事船田入道義昌ヲ近ケ今
相摸入道カ行跡ヲ見ルニ滅亡遠キニ非ス我本國
ニ帰テ義兵ヲ舉先朝ノ宸襟ヲ休メ奉ラント存ス
ルカ勅命ヲ蒙ラテハ叶マシ如何ノ大塔官ノ令旨
ヲ賜テ素懐ヲ達スヘキト問ケレハ船田事安ケニ
領掌申シ若黨三十餘人ヲ野伏ノ姿ニ出立セ葛城
峯へ上セ我身ハ落行勢ノ真似ヲシテ同志軍ヲシ
タリケル宇多内郡ノ者凡御方ノ野伏ト心得カラ
合サント下合處ヲ十一人マテ空捕テ云云ノ由ヲ

語テ宮ノ御在所へ此方ノ使ヲツレテ参レト申ケ
レハ野伏氏大ニ悦ビ此中ニ一人暫ク暇ヲ賜リ十
人ヲ留置テ参リ相待所ニ一日有テ令旨ニハ非ス
綸旨ノ詞ヲ捧テ来レリ被綸旨偁敷化理萬國者明
君徳也揜亂鎮四海者武臣節也頃年之際高時法師
一類茂如朝憲恣振逆威積惡之至天誅已顯焉爰為
休累年之宸襟將起一舉之義兵叡感尤深抽賞何淺
早運關東征罰之策可致天下靜謐之功者綸旨如此
仍執達如件元弘三年二月十一日左少將
一作藏人
左少辨宣

為新田小太郎殿参考曰道蘊向吉野在正月晦日而
奉野太平記第十義貞舉義兵段三月十八日而宮時在吉
十一日賜令旨云云二月當作三月義貞斜ナラス悦
ヒ翌日ヨリ虚病ノ急キ本國へ下ラル、

六波羅復遣宇津宮兵攻金剛山

太平記曰金剛山ノ搦手へ又六波羅ヨリ宇都宮ヲ
ノ下サレケル紀清西黨ノ新手城ノ掘際マテ攻上
テ十餘日攻タリケレハ鹿垣逆茂木皆引破ラレテ
防兼タル躰ニ見ヘタレ氏寄手又為方モ無リケン
面ナル兵ニハ軍ヲサセテ後ナル兵ニハ山ヲ掘倒

サントソ企ケルケニモ大手ノ櫓ヲハ夜晝三日カ
間ニ念ナク掘崩メケリ諸人は是ヲミテ唯始ヨリ軍
ヲ止テ掘ルヘカリケル物ヲト後悔メ掘ケレ氏廻
リ一里ニ餘ル大山ナレハ左右ナク掘倒サルヘキ
トハ見ヘサリケリ

赤松圓心應先主據摩耶山

太平記曰楠カ城強ノ京都ハ無勢也ト聞ヘケレハ
赤松二郎入道圓心播磨國苜繩城ヨリ打テ出山陰
山陽兩道ヲ差塞キ山里梨原ノ間ニ陣ヲ取ル爰ニ

備前備中備後安藝周防ノ勢凡六波羅ノ催促ニ因
 テ上洛シケルヲ赤松筑前守参考一作弥五郎系云
 圓心二男雅樂助範貞
 歴任筑前舟坂山ニ支テ宗徒ノ敵二十餘人ヲ生捕
 守美作守リケリ赤松是ヲ誅セスノ情深ク相交ル間伊東大
 和二郎参考云一
 云名惟群其恩ヲ感ノ合躰シ己カ館ノ上三
 石山ニ城郭ヲ構ヘ熊山ニ取上テ義兵ヲ舉又ルニ
 備前守護加治源二郎左衛門参考云加治當作加地
 備前國加地氏佐佐木
 盛綱後也太平記八作源太左衛門一云名貞季又弟
 十三有加治源太左衛門鎮信未詳孰是本文所謂加
 治氏者宣化帝一戰ニ利ヲ失テ落テ行是ヨリ西國
 後非備前人

ノ路弥塞テ中國ノ動乱斜ナラス西國ヨリ上洛ス
 ル勢ハ伊東ニ支ヘサセ赤松ハ頓テ高田兵庫助ヲ
 攻落シ山陽道ヲ差上テ兵庫ノ北摩耶山寺ニ城郭
 ヲ構フ

土居得能應先主長門探題平時直出奔

太平記曰六波羅今ハ四國勢ヲ待テ摩耶城ヘ向ク
 ヘシト評定シケル處ニ後二月四日伊豫國ヨリ早
 馬ヲ立テ土居次郎参考一作名通治按属
 六波羅河野亦為通治得能弥三
 郎参考一作
 名通言官方ニ成テ土佐國ヘ打越ル處ニ玄月

十二日長門探題上野介時直参考一作遠江守北條家譜上総介越後守實
村子時政 兵船三百餘艘當國へ推渡り星岡ニテ合
六世孫 戦ヲ致ス所ニ長門周防ノ勢打負時直父子行方ヲ
知ス四國勢ハ悉土居得能ニ属ノ其勢已ニ六千餘騎
宇多津今張港ニ舟ヲ揃ヘ只今攻上ラント企候ト
告タリケル

兵部卿親王賜檄於大山寺

太平記曰大塔宮賜大山寺令旨云伊豆國在廳北條
遠江前司時政之子孫東夷等承久以來採四海於掌

奉茂如朝家之屬頃年之間殊高時相摸入道之一族
匪啻以武畧藝業惱朝威剩奉尤遷當今皇帝於隱州
惱宸襟亂國之條下刻上之至甚奇恠之間且為加征
伐且為奉成遷幸所被召集西海道十五箇國內群勢
也各奉帰徳早相催一門之輩率軍勢不廻時日可令
馳參戰場之由依大塔二品親王令旨之狀如件元弘
三年二月二十一日左少將定恒大山寺衆徒中

閏二月佐佐木時信攻摩耶山

太平記曰佐佐木判官時信常陸前司時知ニ四十八

個所ノ篝火在京人并三井寺法師三百餘人ヲ相副
 テ以上五千餘騎ヲ摩耶城ヘ向ラレケル其勢閏二
 月五日京都ヲ立テ同十一日卯刻ニ摩耶城ノ南麓
 求塚八幡林ヨリ寄タリケル 太平記曰先帝船上ニ
 著御成テ隱岐判官打
 負タル由六波羅ヘ告タル故赤松カ摩耶城ヘ推寄
 ルト云云参考曰帝據船上者閏二月二十六日清高
 敗走同月二十九日六波羅攻摩耶城 赤松入道態ト
 同月十一日也今太平説恐非也
 敵ヲ難所ニオヒキ寄セ七曲トテ岨シク細キ路ニ
 至テ寄手少上リ兼テ支タル處律師則祐飽間九郎
 左衛門尉光泰 参考一
 作資明 散々ニ射ケル所ヲ入道子息

信濃守範貞 参考重名太
 郎圓心嫡子 筑前守貞範佐用上月小寺
 頼宮一黨五百餘人討テ出七千餘騎ト聞ヘシ六波
 羅勢纒千騎ニモ足ラテ引返ス重テ討手ヲ下セト
 テ同廿八日又一萬餘騎ヲ差下サル赤松入道勝軍
 ノ利ハ謀不意ニ出大敵ノ氣ヲ凌テ須臾ニ變化シ
 テ先スルニハ如シトテ三千餘騎ヲ率シ摩耶ノ城
 ヲ出^ク文^ク知^チ酒^{サカ}部^ベニ陣取テ待懸タリ

先主潜幸伯耆國

太平記曰閏二月下旬ハ佐佐木富士名判官 参考曰
 佐佐木

家譜曰三郎左衛門尉義綱任カ番候ケルカ如何思
 佐渡守按二郎左衛門高雅子
 ケン此君ヲ取奉テ謀叛ヲ起サハヤト思フ心附ニ
 ケレ氏申入ヘキ便ナシ或夜官女ヲ以テ御前ヨリ
 御盃ヲ下サレケルヲ好便ト思ヒ彼官女ヲ以テ申
 入ケルハ上様ハ未知シメサレス候ヤ楠正成ハ金
 剛山ニテ東國勢百萬餘騎ヲ引受候ヘ氏城強クメ
 寄手引色ニ成テ候備前ニハ伊東大和二郎三石ニ
 城ヲ捕ヘ山陽道ヲ差塞キ播磨ニハ赤松入道圓心
 官ノ令旨ヲ承テ兵庫ノ北摩耶ニ陣ヲ取ル四國ニ

ハ河野一族御方ニ参リ長門探題上野介時直打負
 行方ヲ知ラス御聖運開カル時ト覺ヘ候義綱カ當
 番ノ間ニ忍ヤカニ御出候テ出雲伯耆ノ間ニ御船
 ヲ寄ラレサリヌヘカラシ武士ヲ御憑候テ御待候
 ヘ義綱攻進ラセシ躰ニテ御方ヘ参リ候ヘシト奏
 シケル官女此由申入ケレハ主上偽テ申ヤラント
 思召レ志ヲ伺ヒ御覽セシ為ニ彼官女ヲ下サレケ
 ル判官弥忠烈ヲ顯シ出雲へ渡テ鹽冶判官
 子ヲ語フニ鹽冶如何思ヒケン義綱ヲ追箆テ隱岐

近江判官貞清

國へ帰サス主上ハ餘リニ事滞リケレハ或夜ノ紛
 ニ三位殿御局ノ御産ノ事近附タリトテ六條少將
 忠顯計ヲ召具メ参考一曰忠顯官女ヲ思ヒ懐妊メ
 其産近付タリトテ御所ヲ出サレ
 ケル使ヲ得テ主上御輿ニ召レ御出アリ成人ノ後
 朝廷ニ仕ヘ具忠ト申ス○同按系具忠中將源通清
 子忠顯子有具顯諸實録并太平記
 顯誤為忠字歟比ハ三月廿三日 異本皆為閏二月
 二十日忍ヒ出サセ給ヒ恠ケナル男ノ御道シルヘシ
 四日参考一統ノ後抽賞アルヘキ波港へ着セ給ヒ伯
 テシトテ尋給ヘ尺終ニ知ス千波港
 者國へ漕モトル高船ヲ語ラヒ今ハ海上ニ三十里モ
 過ヌラント思フ處ニ隱岐判官清高カ主上ヲ追奉

ル船也船頭主上ト忠顯トヲ船底ニヤトシ其上ニ
 アヒ物トテ乾タル魚ノ入タル俵ヲ取積テ如本槽ヲ邊
 ケル追手ノ船一艘御座船ニ追附此彼搜ヒケレ尺
 見出シ奉ラス若恠キ舟ヤ通りツルト問ケレハ船
 頭今夜子刻ハカリニ千波港ヲ出ツル舟コソ京上
 薦カト覺シク冠トヤラニ着タル人ト立烏帽子着
 タル人ト二人乗給テ候ツル其舟今ハ五六里モ先
 立候ヌラント申ケレハ此船ハヤカテ隔リ又又一
 里計サカリ追手ノ舟百餘艘御座舟ヲ目ニ懸テ追

駈タリケレハ海上俄ニ風變リ虎口ノ難ヲ御道レ
有テ時ノ間ニ伯耆國名和港ニ着ニケリ 通考 梅松論
曰清高カ兵船千餘艘追付奉ルニ御船ヲ仕リケル
男ニ勅シテ汝敵ノ舟ヲ怖ル、事ナカレ急キ漕向
テ釣ヲ垂ヘシ努々怖ル、事ナカレト仰出サレケ
レハ此男今ヲ限リト思ヘ凡勅命ニ身ヲ忘テ釣ヲ
垂ケルニ敵御舟ニ近付恠シキ舟ヤ有ト云ケレハ
左様ノ舟ハ今朝出雲路ヲ差テ帆ヲ揚タリシカ順
風ナレハ如何ニモ渡海シヌラント答ヘケル程ニ

敵御舟ヲ見ケレハ烏賊ト云物ニテ玉體ヲ埋隠シ
奉ル程ニ是ヲハ思モヨラス疑ヘキニアラストテ
兵船凡ソ漕過ケル云云又云清高カ船ハ出雲國三
尾津ニ着テ一族佐佐木孫四郎左衛門尉高久ハ當
國ノ守護人タルニヨリ國中ノ軍勢ヲ催メ合カス
ヘキ由申遣シタリケレ凡高久返事ニ及ハス是ハ
兼テ綸旨ヲ賜シ故也○参考曰伯耆卷云二月始ノ比
ニヤ成田入道ヲ召テ仰下サレケルハ思召立ル、
事アリ此番衆ノ中ニ誰ヲカ御頼アルヘキト勅定

有ケレハ土屋又四郎ト申ス者ヲ召テ参ル六條少
將殿ヲ以テ汝ヲ頼ミ思召ル由仰下サレケレハ小
分限者ニテ叶ヒ難ク候但伯耆國名和庄ノ地頭ニ
村上又太郎長高ト申者弓箭ヲ取テハ樊噲張良ニ
モ劣ラシト思フ仁ニテ候云云忠顯申候ハ警固ノ
武士共申候シハ長高カ舍弟村上六郎行氏ト申者
偶大番勤テ是ニ候ト申ケル間兄長高ハ頼レ進ラ
セシヤト仰ケレハ某カ計ヒニハ是非ヲ申入カタ
ク候申聞候ハ、ヨモ仔細ヲハ申候ハシト頼モシ

ケニ申ケル世事兄ニ知ラセントテ閏二月廿日後
所ヲ立テ智振島ト云所マテ渡リケレハ折節風難
儀ナレハ逗留ノ有ケル間ニ京都ヨリ隱岐前司カ
許へ早馬ヲ以テ此君ヲ失ヒ奉ルヘキ由申下ス此
事聞召テ六條少將ヲ召テ仰合サル忠顯申サレケル
ハ折節産スヘキ女性候也ソレヲ御覽ノ為トテ三
位御局ヲ御輿ニテ出シ進ラセ候ハニ時夫ニ御紛
レ候テ御出候ヘシ略供奉ノ人々ニハ六條少將忠
顯成田小三郎入道佐佐木富士名三郎義綱下部一

人梶取三人ノ是十人ノ召レケル○増鏡日後の二月
乃はゆりたよりそりまけて密友の秘法とくろりさせ給へ
おとおほのこもぬ日殺してまをういたうこくおひまきり
○又田大塔の宮よりとつり人の女よりにつあてまをえ給ふ
きえと給ふも様よの中志のましか祈るまはふまもまを
よるのふおほなくまて算書のうらわらぬまのい何い
おのまもくまのこくわらぬまやまかまをまのまは
そのまもくまをのこくわらぬまはまはまはまはまは
まのまもくまをのこくわらぬまはまはまはまはまは

三月
月の廿四日阿多不のふいううまなりてかくろへめてまつ
いへやまなる阿多のはの舟乃まはふまをておぬり
そのまもくまをのこくわらぬまはまはまはまはまは
ゆくまもくまをのこくわらぬまはまはまはまはまは
ほろそ念くおぬまのまの風ま吹まてその日乃申れ
けふいほの周おほまおぬぬまてくまくくまをまの
りま

名和長年奉先主據船上山

太平記日忠頭一人舟ヨリ下リ弓矢取テ人ニ知ラ

レタル者ヲ尋問ケレハ名和又太郎長年トテ参考曰名
 和家譜初名長高小太郎行其身サシテ名アル武士
 高子具平親王十四世孫
 ニテハ候ハ子氏家富一族廣クノ心カサアル者ニ
 テ候ト申ス頓テ勅使ヲ立テ御頼アリ度由ヲ仰出
 サル名和ハ折節一族共集テ酒飲テ居ケルカ此由
 ヲ聞テ按シ煩タル氣色ニテ兎モ角モ申得サリケ
 ルヲ舍弟小太郎左衛門長重参考舍弟或作息或作
六郎行氏按家譜太郎
 左衛門長重長重姪也父曰長義長義行氏共申ケル
 長年弟也行氏第六郎左衛門為安藝權守
 ハ古ヨリ今ニ至テ人ノ望ム所ハ名ト利トノニツ

也君ニ頼マレテ尸ヲ暴シ名ヲ残サンハ生前ノ思
 出死後ノ名譽ナレハ外ノ議アルヘシ氏存セ又田
 申セハ又太郎ヲ始メ當座ニ候一族廿餘人皆此議
 ニ同シケレハ長重御迎ニ参リ鎧ノ上ニ新薦ヲ卷
 テ負進ラセ船上ヘ入奉ル長年近邊ノ在家ニ人ヲ
 廻シ兵糧ヲ船上ニ上セ米穀ヲ一荷持テ運タラン
 者ニハ錢ヲ五百ツ、取セケレハ一日カ中ニ五千
 餘石ヲ運ヒケリ其後家中ノ財宝ヲ人民百姓ニ與
 ヘ己カ館ニ火ヲカケ其勢百五十騎ニテ船上ニ馳

参り皇居ヲ警固仕ル長年カ一族名和七郎参考一
作土屋
 彦三郎又一云名國高伯耆卷
 作舎弟竹萬七郎入道氏高 白布五百端ヲ旗ニ拵
 へ松ノ葉ヲ烟ニフスへ近國ノ武士ノ家紋ヲ書テ
 此ノ木彼ノ峯ニ立置ケレハ山中大勢充滿シタリ
 ト見ヘテ影シ考通梅松論曰御舟ヲ仕タル男長年ヲ
 御頼候テ御覽候へカシト申上タレハ彼者ヲ先ニ
 立勅使忠顯ヲ遣サル云云馬ニ鞍置テ引出メ忠顯
 ヲ騎セ奉リ我身ハ鎧ヲ著シ兄弟子共五十餘人歩
 行ニテ御迎ニ参リケリ私奉ヲ皇居ニ成シ奉ルヘケ

レ氏要害ノ地ニ非ストテ家ニ火ヲカケテ當國ノ
 船上山ト云所へ御守ニテ成シ奉ル云云夜ヲ明シ
 シカハ錦ノ御旗ヲ上タリケレハ近所ノ人々國人
 等馳参ス翌日佐佐木隱岐守清高三百余騎ニテ當山ノ麓ニ押
 寄ル○伯耆卷曰御舟ハ雲州島根郡野波浦ト云所
 へ御著アリ其所ノ地頭御頼有ケレハ御志ハ存候
 へ凡小分限ニテ暫ノ支へモ叶難ク候イワクニモ
 御座候ハ、馳参ヘキ由ヲ申ケリ伯州名和庄ト云
 所ハ是ヨリ何方ソ何ナル道ソト御尋有ケレハ是

ヨリ東二日路ニテ候今ノ折節ニハイカニモ叶ヒ
候マシト申ス其ヨリ三浦ト申所へ御着有テ供御
ニハ只御酒許ナリ其間ノ御事凡浅猿凡申ハカリ
ナシ閏二月廿六日沙汰浦江積ト申所ニ御着有テ
陸へ御上リアルニ鞍置タル馬引テ通ル者アリ此
馬ニ召テ何方凡思定タル所モ無リケル處ニ富士
名三郎申ハ當國ノ守護近江孫三郎高負某カ一族
ニテ候是ヲ御頼有へク候ト申ケレハ御馬ヲ向テ
打セ給へ凡頻ニ跡へ帰ケル不思議也トテ馬ニ任

セヨト勅定ナル程ニ此馬本ノ船津へ繞テモトリ
ケル仔細有トテ御船ニ召レケレハ方々ノ大勢馳
集テ危カリシ同廿七日杵築浦へ着御祐之按此間
釣船御船ヲ
追進恠ニ杵築ノ神主
ヲス事アリ廿八日伯耆國へ馳渡セ給フ船ノ
五里計モ奈和庄ヨリ過サセ給フヲ奈和港へ漕モ
トセト仰ケレハ何如ニモノ東へコソ馳サセ給フ
へキニアノ追手船ノ中ニ何トメ向ハセ給フト申
ケレハ只思召様アリ疾々御船ヲモトシ奉レト頻
ニ勅定アレハカ及ハス主上ト忠顯ヲ船底ニ隠シ

其上ニ乾タル籟ノ俵ヲ積重テ漕モトシ隱岐前司
 カ弟能登守參河守 祐之按能登守清 秋三河守清房 カ船ノ中へ漕
 入ヨト仰有テ漕通ス 祐之按追手ノ船楫取 御疲ニ
 望マセ水ヲ聞召ニカタノ大坂港ト云所ニ御船ヲ
 ヨセ楫取共行方シレス水取ニ参リタレ凡楫取サ
 へ失ニケレハ弥御胸塞テ甲斐クシク水ヲ夕ニ聞
 召サス成田小三郎入道ヲ召テ長高カ館ヲ尋テ丸是ニ
 御著アリ頼マレ進ラセヨト仰下サレケレハ畏テ
 御前ヲ立ヌ 略 畠ウツ者ニ奈和庄ハ何ツソト問へ

ハ是ヨリ西へ二里計行テシカクト教へケル奈和
 庄地頭ハ是ニ有ヤラント尋ケレハ當時ハ京上ノ
 千劔破ノ敵ニ向ハレタリト承候ト申ケレハカ落
 ノアキレタリ傍ナル男嫡子ノ殿コソ京へハ上ラ
 レテ候大殿ハ是ニ御座候モノヲ左候へハコソ例
 ノ大墓目ノ音ハ昨日マテモ仕候物ヲト申ケレハサ
 カ附テ走ケル廿八日午刻ハカリニ成田奈和庄ノ
 館へ著案内ヲ云ニ及ハス内へ走入侍所ノ若黨等
 走寄テ左右ノ手ヲ引張何者ソト問人傳ニハ申マ

ント申ケル長高物越ニ見テ門ノ服ノ經所へ入テ
 事ノ様ヲ尋ヌ 略 勅定ハ免ニモ角ニモ長高ヲ深ク
 御頼ニ若頼ニ進ラスル事叶ハスハ取進ラセテ
 鎌倉ノ勲功ニモ預ルヘシ隱岐前司カ手ニハ懸ラ
 シトノ勅定也ト申ケレハ長高承リ少退キ袖カキ
 合泪ヲハラクト流ノ黍モ一天ノ君ノ勅定ヲ蒙テ
 争カ仔細ヲ申ヘク候縦千度萬度身ヲ滅シ命ヲ失
 フト申斥ナトカ辞シ申ヘク候御心安ク思召ルヘ
 ク候ヘトテ頓テ内へ入朝飯ヲ洗テ出シケリ御迎

ニハ長高ヲ始トノ二男孫三郎基長三男乙童九 参考

後正六位上四郎 長年舎弟鬼五郎助高姪ニ六郎太

左衛門尉高光 祐之案行氏嫡男 後弟小太郎信貞同次郎三

郎義氏 正五位下安藝守 郎實行婿ニ彦二郎忠秀鳥屋彦七宗家内河彦三郎

義真 祐之案後縫殿允左衛門尉備中守義直 此外若黨等都合廿餘騎

在合輦大坂港へ馳参ル ○増鏡曰閏二月十五日伯耆の

小指は浦より不ようはせ給へりいふなるを此又右節
 かろくしやうしてあやうた民をさといとまうにさかると
 じろくくさうとさうくくむあうくたものけりかたうとく

宣方と佐々木... 又百住務の勢... 乃宣方は... 隠岐判官清高等發兵襲先主不克出奔

隠岐判官清高等發兵襲先主不克出奔

太平記曰廿九日隠岐判官佐佐木彈正左衛門尉... 昌綱 一云名 其勢三千餘騎ニテ南北ヨリ推寄タリ 略 彈

正左衛門遙ノ麓ニ控テ居タリケルカ何方ヨリ射... 吹雨降雷ノ鳴コト山ヲ崩スカ如シ寄手是ニ恐レ... 進メ散々ニ射サセ敵ノ楯ノ端ノユル夕所ヲ得タリ

ヤ賢シト拔連テ打テ懸ル大手ノ寄手千餘騎谷底
へ皆マクリ落サレ命ヲ殞ス者数ヲ知ラズ隱岐判
官幸キ命ヲ助リテ小舟一艘ニ取乘本國へ逃還リ
ケルヲ國人イツシカ心變シテ拒ケル間越前敦賀
へ漂ヒ寄ケル程ナク六波羅没落ノ時江州番馬ノ
过堂ニノ腰切テ失ニケリ **通考** 参考一曰大手ノ寄手
残ル兵共當國ノ守護糟谷弥次郎入道元覺カ中山
城ニ楯籠リシヲ行氏信真以下究竟ノ兵ヲ率シ只
攻ニ攻ケレハ清高赤谷津ヨリ小舟ニ取乘本國へ

帰ケルヲ國人心變云云○増鏡曰かくて隱岐ノ兵
出エモ移シ小ノ部ヲ信子よりさハ死アハシテ隱岐のふ乃かこ
おしてはつとよきもれをいふにきくおほきれた運也
こほもそのいそみうきくいふに門かたにたり
系にもあはれふしかつ移きさらくさばあはれ屋へ

三月海西諸國應先主

太平記曰主上隱岐國ヨリ還幸成テ船上ニ御座在
ト聞ヘシカハ國々ノ兵共馳參ル事引モ切ス先一
番ニ出雲ノ守護鹽冶判官高負富士名判官ト打連

千餘騎ニテ馳参ル其後朝山次郎八百餘騎参考一作朝山
 二郎兵 金持一黨三百餘騎大山ノ衆徒七百餘騎都
 衛家就
 テ出雲伯耆日幡三箇國ノ間ニ弓矢ニ携ハル程ノ
 武士共ノ参ラヌ者ハ無リケリ是ノ三ナラス石見
 國ニハ澤三角一族安藝國ニハ熊谷小早河参考一載毛利
 吉美作國ニハ管家一族江見坪和渋谷南三郷参考一載
 川 横尾横山 備後國ニハ江田廣澤宮三吉参考一載深
 鶴大河 備後國ニハ江田廣澤宮三吉参考一載深
 首藤岡崎戸島開石 備中ニハ新見成合那須三村小
 田岩村池田籠守 備中ニハ新見成合那須三村小
 坂河村莊真壁参考一載豐島戸島春日市瀬皆備前
 田久我妹尾有木勝間田佐伯

二ハ今木参考一云今 大富太郎幸範参考一作親經
 經 和田備後二郎範長知間二郎親經参考一載和田
 郷葛西岩郡阿瀬川 藤井村越五郎九衛門尉範負参考
 野尻野坂企救一黨 藤井村越五郎九衛門尉範負参考
 負一兒島参考一作兒 中吉美濃権介参考諸異本名
 作真 兒島参考一作兒 中吉美濃権介参考諸異本名
 四一本作小田美濃権 和氣弥二郎季經参考一作季
 介諸枝十六作佐重 和氣弥二郎季經参考一作季
 經 石生彦三郎参考一云 此外四國九州ニテモ聞傳
 々々馳参ル間其勢船上山ニ居餘テ四方ノ麓二三
 里ハ木ノ下草ノ陰ニテモ人ナラヌ所ハナシ

先主以名和長年為伯耆守

伯耆卷曰長高ヲ近ク召レ村上ト申ス流ヲ御尋アリ畏テ申ケルハ村上天皇ノ御子ニ六郎王子七郎王子ト申二人ノ唾王子アリ七郎王子ハ備前國ニ流サレ六郎王子ハ但馬國ニ流サル七郎王子ハ物ヲ仰ラレテ召返サレ六郎王子ハ後ニ物仰ラレケレ氏都へ御帰アルマシトテ但州一國ニ知行シ給フ此末小野悪四郎ト申者上頭ノ領家御室ノ御代官ヲ七度マテ打殺候罪科ニ一國ハ召レ屋敷所十七個所残サル其後二方太郎ト申者京都ニ候ケル

カ山法師能禦候功ニヨリテ彼者ノ末ニ於テハ七代マテ弓箭ノ道ヲ許サセ給トノ勅定ニテ繪旨ヲ成下サレ家ニ傳テ候其由來ニヤ承久ニ君ノ御方申テ屋敷十七個所ヲモ召レ候テ末葉等皆々牢浪仕トテ女子分ニ僅ナル所ヲ傳テ數輩ノ者共ニテ候其家僕長高ニテ候ト申君聞召アナ不思議ヤサル事アリケニモ角アレハコソ黍モ生レ遇ヒ進ラセタルナレ忒但馬國ヲ先規ニ任セ一圓ニ下サルヘシ御代召レン後ハ何事ニテモ所望ニヨルヘシト

初定アリ其夜左衛門尉ニ任セラル如何思召ケン
長ク高キ物ハ虞事アリ長高ヲ改メ長年ト申セト
初定ニ依テ長年ト號ス○又曰朔日二日續テ合戦
有ケルカ後ニハ弥物ノ数トモセス多ノ敵ヲ滅シ
ケリ三日長年ニ伯耆國ヲ賜テ伯耆守ニ成ル
之按増鏡長年除任在六月四日先主還京之下

通祐考

長年遣兵陷隱岐前司清高城

伯耆卷曰隱岐前司清高ハ我城ニ引籠モリ同三日
前司カ館ヘ討手ヲ向ヨト仰下サレ信負
彦五郎長年執事土

屋孫二郎 行氏 六郎後正五位下安
宗重子 藝權守長年弟 大將ニテ向ケルカ

今日ハ日暮テ候合戦ヲ暮ニ仕リ懸テハ難儀タル
ヘシ明日夜ヲ籠テ向ヘク候ト申ケレ氏思召様ア
リトテ船上ヨリ清高カ城ヘハ三里許ノ所ヲ馬ヲ
早メテ押寄散々ニ攻ニケリ信負行氏カ方ニモ能
者三十餘人討レ手負六百餘人ニ及リ城ノ内ニモ
四十餘人討レニケリ夜半ハカリニ清高ヲ追落ス

兵部卿親王賜大山寺地

太平記参考一日丹波國和崎庄事今度依抽合戦之

忠勤且依御祈禱忠所有御寄附也可令知行給者大
塔二品親王令旨如件元弘三年三月三日左少將定
恒大山寺寺僧中

大和國兵塞東兵糧道

太平記曰四日關東ヨリ飛脚来テ軍ヲ止テ徒ニ日
ヲ送ル事然ルヘカラスト下知シケレハ宗徒ノ大
將評定有テ廣サ一丈五尺長サ二十丈餘ニ梯ヲ造
ラセ城ノ切岸ヘ倒シ懸サセ五六千人モ上ヲ渡テ
進メタレハ城中ヨリ投松明ニ火ヲ附テ薪ヲ積ル

ルカ如ク集メタレハ梯桁ニ燃附テ中ヨリ折レ數
千ノ兵燒死タリ玄程ニ吉野戸津川宇多内郡ノ野
伏共宮ノ命ヲ含テ相集ル事七千餘人立隠レテ寄
手ノ往来ヲ差塞クニテ諸國ノ兵ノ兵糧盡テ引歸
ル所ヲ待受テ日々夜々ニ討取程ニ寄手ノ兵残り
少ニ成テケリ

先主行賞

伯耆卷日十三日勲功ノ輩ニ除目行ハレ少將殿ハ
頭中將ニ成給フ京都ヘ御祭向アルヘキ評定有テ

頭中將殿ニ長年弟村上判官高重同信濃法眼源盛
西大將ニテ差向ラルヘキ評定有リ十七日船上山
ヲ立テ人々丹波路ヲ經テ京都ヘ榮向セラレ

先主賜書于長年

伯耆卷日十五日ノ夜長年ヲ近ク召レ今度凶徒ノ
難ヲ遁ル、事海上ノ故也今亦御在所船上山也丸
ハ船汝ハ水三心相應ノ謂レアリ旁舟ヲ以テ吉事
トス更ニ今ヨリ汝カ紋ニ水ニ船ヲ仕ヘシトテ御
手自忠顯ニ教ヘテ帆懸船ヲ書セ下サル○又曰此

間思召レ續ル事凡粗有テ是ヲ游ハサレタリ末代
ノ龜鏡ニモ仕レトテ黍モ勅筆ヲ下サレケリ漫々
タル海上ニイワク凡漂ヒテ四日許ハ過又二十七
日ノ夕方ニマ杵築浦ニテ西風ハケシク吹テイカ
ナルヘキニカト心騒セシカ凡風ニ任セシニ夜ヨ
リ波ノ上モ靜ニテ明ヌレハ此彼モミヌルニ伯耆
ノ湊ニ著又楫取モ今ハカ盡ヌト云フ兎角ノ大坂
ト云所ニ盡ヌ爰ハ荒磯ニテ釣舟タニモ希也此所ノ
主ト云者モ都ニ有ケレハヨシアシニ付テ答ヘキ

歴代傳

者モナシ供ナル人一人二人ハ猶人求ニトテ出又
楫取モ逃失ヌレハ恠シキ苔ノ下ニ只獨ウツモレ
居タル心ノ中イハン方ナシ直衣ナト引刷テ今ハ
限ト待居タルニ船ノモトニ人トトリ来リアラ、
敷モナキハイカナルニヤト恠シキニ忠顯ヲ尋テ
御迎ノ由ヲ奏ス嬉シナトハカ、ルタメシラソ云
ヘカメル中々其時ハ心モ詞モ及フヘキ限ニ非ス
思出ル度コトニ其氣味猶胸ニアリ忠ヲ致ス輩何
レモ疎ナルヘキニハアラ子斥指當テ待出タリシ

心ナナン譬フヘキ方ソナカリシ忘メヤヨルヘモ
浪ノ荒磯ヲ御船ノ上ニトメシ心ヲ祐之按新葉集
心ハニ作ル
新葉集曰此御歌ハ元弘三年隱岐國ヨリ忍テ出サ
セ給ヒケル時源長年御迎ニ参テ船上山ト云所ヘ
ナシ奉リケル程ノ忠例シナカリシコトナトシル
シオカセマシマシケルモノ、奥ニ書ソヘサセ給
トケル 長年カ忠功後代ノ人ニモ知ラセニカ為ニ
記ニ置也末々ノ君ニモ是ヲ見セ奉ラハ如何才口
カナラニ私ノ子孫マテモ此忠ハ朽シト思ヘハ正
直ヲ以テ報國トメ行末久シク仕ヘ奉ルヘシ

隱岐出雲應先主

歴代傳

伯耆卷曰隱岐國ノ守護糟谷カ城ヲ追落シ次ニ小鴨并忠長カ館ヲモ勅命ニテ攻落シ近國ノ者残ラヌ御方ニ参リケレ氏出雲ノ守護ハ一族ヲ訟ヘハ木ト云所ニ控テ参ラサリケリ長年聞テ基長助高ヲ大将トメ高貞ヲ討ヘシト大勢ヲ指向ラル高貞此由ヲ聞テ取物モ取敢ヌ船上ヘ馳参ル通考梅松論曰清高カ盡テ出雲國ニ歸テ船ニ乗若狹越前ヲ志メ海上ニ浮ヒケリ既ニ此事風聞シケル間山陽山陰十六個國ノ軍兵悉君ノ御方ニ参ル

赤松與小笠原戰于瀬河

太平記曰六波羅勢既ニ瀬河ニ著ヌト聞ヘケレハ合戦ハ明日ニテ有ント少シ油断シタル處ヘ阿波ノ小笠原三千餘騎ニテ推寄タリ赤松僅ニ五十餘騎ニテ駈入四十七騎ハ討レ父子六騎ニ成テ虎口ニ死シ遁レタリ同十一日赤松三千餘騎瀬河ノ宿ニ控ヘタル敵ノ陣ヘ推寄依用兵庫助範家参考赤松家譜兵庫助範重子或作為範宇野能登守國頼参考家譜子或作田心弟未知孰是郎頼中山五郎左衛門尉光能飽間九郎左衛門尉光定子泰郎等共ニ七騎ニテ竹ノ一叢繁リタルヲ木楯ニ

取差ツノ引ツノ射ケル間其勢大半討レテ京ニ帰
ル入道ハ摩耶ヘ引返サントシケルヲ子息則祐軍
ノ利ハ勝ニ乘テ逃ルヲ追ニシカスト其夜ヤカテ
宿河原ヲ立テ攻上ル

六波羅遣隅田高橋等與赤松戰于桂河京軍敗績

太平記曰十二日西國勢既ニ三方ヨリ寄タリトテ
騷ケレハ北方仲時事躰ヲミルニ何様居ナカラ敵ヲ
京都ニテ相待ンハ武畧ノ足ラサルニ似タリト西檢
断隅田高橋ニ在京ノ武士ニ萬餘騎ヲ相副テ差向

ラル是ハ桂川ヲ隔テ戰ヲ致セトノ謀ナレハ其趣
ヲ守テ川ヲハ越サス西陣川ヲ隔テ矢軍ニ時ヲ移
シケル中ニ則祐只一騎岸ヨリ下ニ打下シ韃カヒ
クリ渡サントス父ノ入道遙ニ見テ昔佐佐木三郎
カ藤戸ヲ渡シ足利又太郎カ宇治川ヲ渡シタルハ
兼テ三ホシルシヲ立テ案内ヲ見置敵ノ無勢ヲ目
ニ懸テ先ヲハ懸シ物也今川上雪消水増テ淵瀬モ
見ヘヌ大河ヲ案内ヲモ知スメ渡サルヘキカト再
三強テ止ケレハ則祐馬ヲ立直シ太刀ヲ歛メテ申

ハ味方ト敵ト對揚スヘキ程ノ勢ニテ候ハ、我ト
手ヲ摧カス尺運ヲ合戦ノ勝負ニ任スヘシ御方ハ
總三千餘騎敵ハ是ニ百倍セリ急ニ戦ヲ決セスノ敵
ニ無勢ヲ見透カレテハ戦尺利有ヘカラス太公カ
兵ノ詞ニモ兵勝之術密察敵人之機而速乘其利疾
撃其不意ト云リト漲ル流ニ游カセケレハ飽間伊
東河原林木寺宇野五騎續テ打入六波羅ノ二萬餘
騎ニトロニ成テ色ノキ渡ル所ヲ見テ御方討ス十
續ケヤヨト籠資籠負真前ニ進メハ佐用上月ノ兵

三千餘騎一度ニ颯ト打入岸ニ上テ死ヲ輕シタル
勢ヲ見テ六波羅勢ハ戦ハサル前ニ作道ヲ北ニ東
寺ヲ指テ引モ有竹田河原ヲ上リニ法性寺大路ヘ
落ルモ有玄程ニ西七條ノ手高倉少將ノ子息左衛
門佐小寺衣笠ノ兵共早京中へ攻入タリト見ヘテ
大宮猪熊掘川油小路邊五十餘箇所ニ火ヲ懸タリ
京勢共只六條河原ニ馳集テアキレタル躰ニテ控
タリ

新主西院幸六波羅六波羅兵邀撃赤松軍

太平記曰主上六波羅へ臨幸ナリケレハ院後伏法見
 皇園花東宮康仁皆六波羅へ御幸アリ西六波羅ハ七條
 河原ニ打立隅田高橋ニ三千餘騎ヲ相副テ八條口
 へ差向河野九郎左衛門尉陶山二郎ニ二千餘騎差
 副テ蓮花王院へ向ラレ七八度カ程揉合散々ニ戦
 ケル隅田高橋カ勢ハ高倉左衛門佐小寺衣笠ニ懸
 立ラレシヲ河野進ニトシタルヲ彼等カ高名ニセ
 ニカ悪シト陶山暫シト制シケレ凡餘リニ進ミ立
 ラレシカ由ナシト両手一ツニ成テ攻シカハ寄手

打負寺戸ヲ西へ引返ス筑前守貞範赤松律師則祐
 兄弟六騎ハ笠驗ヲカナクリ捨敵ニ紛レテ御方ヲ
 待シヲ馬物具ノ濡タルヲ驗ニ討テト呼ハリケレ
 ハ紛レテハ悪カリナント二千騎カ中へ駈入テ戦
 ケルカ筑前守ハ推隔ラレ則祐ハ只一騎落行信濃
 守貞範カ羅城門ノ陣へ馳入暫クアレハ駈散サレ
 タル兵馳集テ又千餘騎ニ成テ六波羅勢ト戦ケレ
 凡河野ト陶山トカ勢ニ後陣ヲ破ラレ山崎ヲ差テ
 引返ス河野陶山ハ生虜二十餘人首七十三取テ朱

二成テ六波羅へ馳參ル 考通 皇年代記曰十二日主上
 并西院幸於六波羅内侍所同渡御以北方為皇居閏
 二月以來伯州主出御擾亂之由也當所探題仲時時
 益奉保護○増鏡曰三月にむかりぬ十日あまりのふと依
 まよの中いいうねなるがふそとまけいけり故の風よりおね
 乃るふし入る心とやうその先争の勅もきこひてせ免
 くふありとてまよのうちに阿そとばふまきの六波羅^があり
 とはまよとてよ下まよとさう馬車ほりまぢい武士も乃ら
 こころとてあふさばいとおねはゆきまよとて六波羅の軍陣^にて

そ乃ぬいか乃とのま引返ぬとてまよとてまよとてまよと
 かやふしおきちぬんが成てらゆいなるやそ乃ぬ
 陸も足かまかいまよとてまよとてまよとてまよと
 するとてまよとてまよとてまよとてまよとてまよと
 傳ら久我のたのおく小い月とわとわいとの候式りりみ
 よろけいけ内大臣及ゆうろにけうまほり新へいまこまひ
 ゆりてまよとてまよとてまよとてまよとてまよと

是日右大臣藤原朝臣季衡出家 補任 ○新主以河野某為
 對馬守陶山某為備中守

太平記曰其夜臨時ノ宣下アリテ河野九郎ヲ對馬守ニナサレ御劍ヲ下サレ陶山次郎ヲ備中守ニ成シテ寮ノ御馬ヲ下サル

菊池入道寂阿攻九州探題英時不克死之

太平記曰主上船上ニ御座在リニ時少貳入道妙惠

参考曰俗名貞經 大友入道具簡 参考一作愚鑑按大

筑後守盛經子 友家譜具簡俗名貞

宗日幡守親時 菊池入道寂阿 参考曰俗名武時隆

子稀頭孝寺 菊池入道寂阿 盛子兄時隆狼為嗣 三

人同心ノ御方へ參ルヘキ由申入ケル間則論旨ニ

御旗ヲ副テ下サル此事煩テ探題英時へ聞ヘケレ

ハ實否ヲ伺見ニ為ニ菊池ヲ博多へ呼ケル菊池此

使ニ膽ヲツキ遮テ觀面ニ勝負ヲ決セント兼テ約

セシ少貳大友カ方へ觸遣シケレ氏大友ハ天下ノ

落居見定サリケレハ分明ノ返事ニ及ハス少貳ハ其

比六波羅勝ニ乘由聞ケレハ己カ答ヲ補ハントヤ

思ヒケン却テ使ハ幡除四ヲ討テ首ヲ探題ノ方へ

出シタリ菊池大ニ怒テ三月十三日僅百五十騎ニ

テ探題ノ館ニ押寄英時自害セントシケル處ニ少

貳大友六千餘騎後攻シタリケレハ叶ハシト思ヒ

嫡子肥後守武重ニ庭訓ヲ加ヘ肥後國ヘ返シノ和
 和歌ヲ袖ノ笠駢ニ書テ故郷ヘ送ルフルサニ男肥
 トニ今夜計ノ傘凡知ラテア人ノ我ヲ待ラン
 後三郎参考曰菊池家譜名賴隆ト相共ニ百餘騎攻入テ一人モ
 残ラス討死ス考通按今年五月少貳大友滅英時至于
 六月奏于京師又見五月末而太平記載在本文之前
 相齟齬其詞云京都鎌倉ハ既ニ高氏義貞ノ武功ニ
 依ラ静謐シ又今ハ筑紫ヘ討手ヲ下サレ九國探題
 英時越後守久時子攻ラルヘシトテ二條大納言
 師基二條開白太宰帥ニ成カレテ己ニ下ニ奉ラン
 魚基子

トスル處ニ六月七日菊池少貳大友カ許ヨリノ早
 馬到來九州ノ朝敵残ル所ナク對治候ト奏聞ス

赤松以中將貞能稱皇子陣于山崎八幡邊

太平記曰赤松ハ中院中將貞能ヲ取立参考一作良宣或定平按
 定平始名良定後改名 聖護宮ト號シ山崎八幡ニ陣ヲ取河尻
 シ差塞ク三月十五日六波羅勢八條ヨリ一手ニ成
 テ桂川ヲ渡リ河嶋ノ南ヲ經テ物集女大原野ノ前
 ヲリ寄タリケル赤松是ヲ聞テ一手ハ小鹽山一手
 ハ狐河ノ邊一手ハ向日明神ノ後ナル松原ノ陰ニ

隠ス六波羅勢是ニテ出合ヘキトハ思ヒ寄ス深入
ノ方々ヨリ追立ラレ捨鞭ヲ打テ引返ス片時ノ戦
ナレハ京勢多ハ討レ子氏整濱深田ニ落入馬物具
取所モナクヨコレテ白昼ニ京ニ歸ル

兵部卿親王馳檄於山門擊六波羅兵

太平記曰官軍動スレハ利ヲ失フ由聞ヘテ大塔宮
ヨリ牒使ヲ立ラレ山門ノ衆徒ヲ語ラハル是ニ依
テ三月二十六日一山ノ衆徒會合シ未レ八日六波
羅ヘ寄ヘシト定ケレハ着到ヲ付ルニ十萬六千餘

騎ト記セリ八幡山崎ノ御方ニモ牒シ合セス二十
八日ノ卯刻法勝寺ニテ勢揃アルヘシト觸ケレハ
西ニ陣取テ待懸三方ヨリ関ヲ作り六七度駈惱シ
ケル間山徒ハ皆歩立ノ上重鎧ニ肩ヲ履レ次第ニ
疲レタル躰ニソ見ヘニケリ叶ハシトヤ思ヒケシ
法勝寺ノ中ヘ引籠モラントシケル處ヲ丹波國住
人佐治孫五郎ト云兵五尺三寸ノ太刀ヲ以テ敵三
人胴切タルヲ見テ山徒ハ法勝寺ニモ敵有トヤ思

ヒケン寺内へモ入ラス真如堂ノ前神樂岡ノ後ヲ
ニツニ分レテ山上へト引返ス時ニ東塔南谷善知
房ノ同宿豪鑿豪仙ト云惡僧高名メ死タリ

六波羅間山門

太平記曰山門猶寄ヘシト聞ヘケレハ衆徒ノ心ヲ
取ニ為ニ武家ヨリ大庄十三個所山門へ寄進ス宗
徒ノ衆徒ニ便宜ノ地ヲ一二個所ツ、祈禱ノ為ト
テ恩賞ヲ行ハレケルニソ山門ノ衆議心々ニ成テ
ケリ

夏四月赤松與六波羅兵戰而不利

太平記曰赤松ハ其勢大半減ノ今ハ僅ニ一萬騎ニ
モ足サリケレハ武家ノ軍立京都ノ有様恐ル、ニ
足スト見透メ七千餘騎ヲ二手ニ分テ四月三日卯
刻ニ又京へ押寄スル一方ニハ殿法印良忠中院定
平ヲ兩大將トメ伊東松田参考一頓宮富田判官カ
作和田
一黨并ニ真木葛葉ノ溢レ者ヲ加テ三千餘騎鳥羽
竹田ヨリ押寄ル一方ニハ赤松入道圓心ヲ始トメ
宇野柏原佐用真島得平衣笠菅原一黨都合其勢三

千五百餘騎西七條ヨリ押寄ル西六波羅ハ勝ニ乘
 テ其勢三萬騎六條河原ニ手分ラス山門武家ニ通
 ストイヘ氏野心ヲカ存スラン油断スヘカラスト
 佐佐木判官時信常陸前司時知長井縫殿秀正ニ
 一作頭正顯 三千餘騎ヲ差副糺河原ヘ向ラル
 一作助頭慶 十二月ニ勝タル吉例也トテ河野陶山ニ五千騎ヲ
 相副法性寺大路ヘ差向ラル富樫参考一云林カ一
 族島津祐之案下段作安藝前司参考作名有親家譜
 資久参考一作島津大膳大夫春久又載吉川
 小早河カ西勢ニ國々ノ兵六千餘騎ヲ副テ八條東

寺邊ヘ差向ラル厚東加賀守参考一作東野一加治
 源太左衛門尉参考一作梶原源太隅田参考一作次
 治高橋参考一作糟谷参考一作土屋参考一作備小
 笠原参考一作彦六二七千餘騎ヲ相副テ西七條口
 八向ラル自餘ノ兵千餘騎ヲハ新手ノ為ニ六波羅
 ニ残居タリ其日ノ己刻ヨリ軍始テ戦タレ氏更ニ
 勝負モ無リケリ所ニ夕陽ニ及テ河野ト陶山トカ
 一手三百餘騎木幡ノ寄手ヲ足モタメス駈立ル小
 早川ト島津安藝前司己カ陣ヲ河野陶山ニ掃ハレ

無念ニ思ヒ花ヤカナル軍セント西八條ヲ上リニ
 西朱雀へ出タルニ此ニハ赤松入道究竟ノ兵ヲ勝
 リテ三千餘騎ニテ控ヘタレハ左右ナク破ルヘキ
 様モナシサレ氏島津小早川カ横合ニ懸ルヲ見テ
 戦ヒ疲レタル六波羅勢カラ得テ三方ヨリ攻ケル
 間赤松カ勢忽開靡テ三所ニ控ヘタリ爰ニ赤松勢
 ノ中ニ備中國住人頼宮又二郎入道 参考一作孫三郎入道春甫
 子孫三郎 参考一名負利 田中藤九郎盛兼同舍弟弥九郎盛
 泰ト云者五尺餘ノ太刀ヲ帶ハ尺餘ノ金サイ棒ノ

八角ナルヲ提ケテ数千騎ノ内ヲ破テ通り島津ト
 小早川トヲ相手ニノ討死ス又播磨國住人妻鹿孫
 三郎長宗 参考一作長泰一作長時 相伴フ一族十七人皆尋常ノ
 人ニハ越テ進タルカ六波羅勢三千餘騎ニ取巻レ
 十七人ハ討レ孫三郎一人西朱雀ヲ指テ引ケルヲ
 印具駿河守ノ勢五十餘騎追駈ル其中二年ノ程ニ許ナ
 ル若武者カ総角ヲ攫テ馬ノ上三町許行タルカ此
 武者討スナト五十餘騎跡ニ附テ追ケルヲ孫三郎
 ハタト睨テホシカラハ取ラセント右ノ手ニ取直

之跡ナル馬武者六騎カ上ヲ越テ深田ノ上ヘ見ヘ
又程打込タレ赤松入道ハ今日ノ軍ニ憑切タル一
族ノ兵八百餘騎討レケレハ氣疲レカ落果テ八幡
山崎ヘ又引返シケリ

先主遣藤忠顯為頭中將未拒六波羅軍不利僅逃

太平記曰京都數個度ノ合戦ニ官軍每度打負ヌト
船上ノ皇居ヘ聞ヘケレハ赤松入道ニカラ勅セ六
波羅ヲ攻ヘシト六條少將忠顯ヲ頭中將ニナシ差
向ラル伯耆國ヲ立シマテ其勢僅千餘騎ト聞ヘシ

カ因幡出雲伯耆美作但馬丹後丹波若狹ノ勢共馳

加リ程ナク二十萬七千餘騎ニ成ニケリ又第六ノ

若宮参考神明鏡作四宮ハ元弘ノ亂ノ始ヨリ武家ニ囚ハレ

但馬國ヘ流サレ給ヒシヲ其國ノ守護太田三郎左

衛門尉参考一云名守延取立丹波國篠村ヘ参會ス頭中將斜

ナラス悦ヒ錦ノ御旗ヲ建此宮ヲ上將軍ト仰キ軍

勢催促ノ令旨ヲ成下サレ四月二日宮篠村ヲ立テ

西山ノ峯堂ニ御陣ヲ召レ殿法印良忠ハ八幡ニ陣

ヲ取り入道圓心ハ山崎ニ屯ヲハレリ彼陣ト千種

殿ノ陣相去ル事僅ニ五十餘町ナレハ牒シ合テコ
 ノ京都ヘモ寄ヘカリシヲ頭中將我勢ヲヤ憑レケ
 ン獨高名ニセントヤ思ハレケン竊ニ日ヲ定テ四
 月八日卯刻ニ六波羅ヘ寄ラレ笠駈ナクテハ同士
 討モ有ヌヘシト白絹ヲ一尺ツ、截テ風ト云文字
 シ書テ鎧ノ袖ニ附サセケレハ孔子ノ言ニ君子ノ
 徳ハ風也小人ノ徳ハ州也州ニ風ヲ尚ル時ハ必偃
 ト云心ナルヘシ六波羅ハ軍ノ成敗心悪カラス源
 ハ同流也トイヘ凡江南ノ橋ハ江北ニ移サレテ枳

成習ナリ弓馬ヲ守ル武家ノ輩ト風月ノオヲ事ト
 スル朝廷ノ臣ト戦ヲ決セニニ武家勝スト云事有
 ヘカラスト各勇ニ進テ七千餘騎大宮面ニ打寄ル
 互ニ死ヲ爭テ戦ケレ凡イツ勝負有ヘシトモ見ヘ
 サル處ニ但馬丹波ノ勢ノ中ヨリ兼テ京中ニ忍テ
 人ヲ入置タレハ此彼ニ火ヲ懸タリ折節風烈吹テ
 一陣ニ夫ヘタル武士共大宮面ヲ引退ク六波羅是
 シ聞テ弱カラシ方ヘ向ントテ用意ニ残シ留タル
 佐佐木判官時信隅田高橋南部下山河野陶山富樫

小早川等ニ五千餘騎ヲ差副テ一條二條ノ口ヘ向
 ラル此新手ニ懸合テ太田三郎左衛門モ討レケリ
 丹波國住人萩野彦六参考作彦六左衛門足立三郎参考云一名祐秀
 ハ四條油小路ニテ攻入タルヲ備前國ノ薬師寺ハ
 郎参考曰一作十郎克季中吉十郎参考一云名政信太平記九卷作能宗丹兒玉
 カ勢共七百餘騎支テ戦フ二條ノ手破レタレハ萩
 野足立モ引返ス金持三郎参考一云名家武カ七百餘騎七
 條東洞院ニテ攻入タルカ深手ヲ負テ播磨國住人
 肥塚カ手ニ生虜ラル丹波國神池ノ衆徒八十餘騎

五條西洞院ニテ攻入御方ノ引ヲモシラテ戦ケル
 カ備中國住人莊三郎参考一云名高為真辨四郎参考一云名宗久
 カ三百餘騎ニ取籠ラレ一人モ餘サス討死ス方々
 ノ寄手ハ皆桂川ノ邊ニテ引タレ氏名和小二郎ト
 参考曰一云名高方按名和家譜無高方者伯耆卷作
 村上小二郎行村伯耆卷云長年従兄弟村上小二郎
 行村参考入道道教嫡子尤兒島備後三郎カ一條ノ
 衛門尉後歸大石豊前守
 寄手ハイマ夕引ズ禦クハ陶山ト河野ニノ兒嶋ト
 河野トハ一族ニノ名和ト陶山伯耆卷作陶山義隆トハ知人
 ナリケレハ日比ノ詞ヲマ耻タリケン後日ノ難シ

ヤ思ヒケン互ニ命ヲ惜ス戦ケル大將頭中將ハ内
野へ引レケルカ神祇官ノ前へ引返メ兒島ト名和
トシ呼返シケレハ陶山河野ニ色代ノ兩陣共ニ引
分ル千種殿ハ本陣峯堂ニ歸テ手負死人ヲ註セラ
ル、ニ七千人ニ餘リ宗ト憑ミタル太田金持カ一
族以下数百人討レ畢ヌ仍テ高德ヲ侍大將ニモ成
ヘキ者トヤ思ハレケン召寄敗軍ノ士卒疲レテ再
戦ニ難シ都近キ陣ハ悪カリナンクシ境ヲ隔テ陣
ヲ取重テ近國ノ勢ヲ集テ攻ハヤト思フハイカニ

ト申サレケレハ高德聞モ敢ヌ軍ノ勝負ハ時運ニ
依ル事ニテ候へハ負ルモ耻ニ非ス只引マシキ所
ヲ引セ駈ヘキ所ヲ駈サルヲ大將ノ不覺ト申如何
ナレハ赤松入道ハ僅ニ千餘騎ノ勢ヲ以テ三個度マテ
攻入叶ハ子ハ引退テ八幡山崎ノ陣ヲハ去ラテ候
御勢過半討レ候共残兵六波羅勢ヨリ多カルヘシ此
御陣後ハ深山前ハ大河好ム所ノ砦ナルヘシ引ン
ト思召事然ルヘカラス候但シ御方ノ疲レニ乘テ
夜討ニ寄ル事モヤ候ハント存候へハ高德ハ七條

ノ橋爪ニ陣取テ相待ヘシ御心安カラシ兵ヲ四五
 百騎梅津法輪ノワタリヘ差向警固ヲサセラレ候
 ヘトテ兒島ハ七條ノ橋ヨリ西ニ陣ヲ堅メケル千
 種殿ハ耻シメラレ暫ク峯堂ニオハシケルカ敵夜
 討ニモヤ寄スラント云ツル言ニ驚サレテ夜半過
 ル程官ヲ御馬ニ乗セ葉室ノ前ヲハ幡ヘサシテ落
 ラレケル高德ハ峯堂ノ篝次第ニ消タルカ恠サニ
 行テ見ント上ル處ニ萩野彦六朝忠ニ行合大將己
 ニ夕ベ子ノ刻ニ落給フ間我等モ丹波ヘト志シ候

イサ、セ給ヘ打連申サント云ケレハ高德大ニ怒
 リ懸ル臆病ノ人ヲ大將ト憑ミケルコソ越度ナレ
 サリナカラ直ニ事ノ様ヲ見サランハ後難モ有ヌ
 ヘシト手ノ者ハ麓ニ留メ只一人落人ノ中ヲ分テ
 峯堂ノ上大将ノオハシツル本堂ヘ入テ見レハ能
 遠テ、落ラレタリト見ヘテ錦ノ御旗鎧直垂マテ
 捨ラレタレハ御旗ヲ卷テ下人ニ持セ追分ノ宿ノ
 邊ニテ萩野ニ追付ケル萩野ハ丹波丹後出雲伯耆
 へ落ケル勢ヲ篠村稗田邊ニ打集テ三千餘騎丹波

高山寺ノ城ニ楮籠ル

先主下軍制數條

参考曰光明寺藏書曰官軍可存知條條一高時法師
 黨類僭上無禮之間為正彼暴逆所被舉義兵也仙洞
 己下縱雖有與同彼凶黨之族不可混朝敵之族每事
 不可違年未之儀之上者官軍等於仙洞邊不可致狼
 藉若誤而有無禮事者可處重科一長誦堂領以下本所
 各別莊園等不可致濫妨一執柄以下一流家家縱雖
 有不忠事不可斷其跡家領莊園等不可有其妨事條

條一先陣之輩後陣不助成之間徒失其命之族多之
 云云向後乍知先進之軍士不合力者可奪三個度之
 勲功矣一諸將等以同心同德之義可成掌之處不一
 同之間於事不落居太不可然縱雖含私遺恨合戰之
 間慥止執情各無私可同心之由可進各各告文有所
 存者天下靜謐之後可申也一兵糧米事不可有內外
 親疎若及饑飽者可為一向之義無偏可施之間恣可
 獻忠節矣此間者方方恣加評議同時可有其沙汰事
 一凶徒之中有召捕之輩者不日可誅戮但於申子細

之族者可注進交名事一路次狼藉事特可有沙汰於侍者懸主人嚴密致沙汰至凡下輩者不日可誅事一手負并死人事能加實檢可註進交名依忠功之淺深可有恩賞沙汰事一雖為片時於取陳之所所者可搆隨分之要所凶徒縱雖寄來無怖畏之樣可致沙汰事一兵糧米捨斷事方方大將并可然之輩特加評議以撫民之儀可致其沙汰事元弘三年四月日○入洛輩可有存知條條一誅伐仲時時益以下輩奉捕禁裡仙洞奉遷本御所可守護申也於供奉之卿相雲客者

悉注進交名可經奏聞被相尋子細之後可被定罪名矣一於被註下名字之人人者警固在所可待申臨幸之由可申之矣一御入洛之時軍勢等供奉關白可參會八幡宮矣一梨本青蓮院兩門跡竹園可奉捕之於彼門跡方事者諸事可相問大塔二品親王御下知遠勅之北嶺法師等者任被仰下之交名不迴時刻可追罰矣一忽差遣軍勢於金剛山追罰桑向之輩可被召出正成矣一於洛中有致狼藉之輩嚴密尋搜犯過之凶賊檢違

此下

賜千種忠顯綸旨并勅制軍中法三通

被遣委細之旨被仰宗成候畢可令存知給者依天氣
上啟如件元弘三年五月三日勘解由次官光守謹上
頭中將殿○勅制軍法條條一勲功賞事右武士以下
緇素貴賤不論其人於致合戰忠之輩者本所帶本訴
等安堵之外各新可有不次之恩賞其功及子孫可令
永代相傳之條勿論也又戰場殞命者其子孫妻妾并
親類郎從等中雖為何仁撰其器用充賜所領可令繼
其跡矣一參仕并降人事右卿相雲客并武士以下諸
社諸寺執行別當神官社司等凡帶一官一職之輩者

各早速馳參者本領知之外可被行別之恩賞繼又其
身參仕雖不可叶或出兵糧支軍要或進使者獻忠言
觸事為官兵有其益者是又子細同前次合戰之時降
人者先宥罪科全身命其後隨忠節之淺深可有次第
之恩賞矣一可先仁政事右東夷等運命已窮滅亡將
至依之漫取無辜平民首不知其數盜奪尊卑男女之
財逐日暴佛閣人屋之灰燼在在所一字追捕梟惡
之甚人面獸心者也不誅罰彼逆黨萬民何措手足義
兵所向專為除此害也然者官軍士卒上下同心只伐

厚史律
叛者不煩衆人偏先仁慈更無侵奪凡人生擒之類於
凡下者速可放棄於有名之輩者召置之可經奏聞附
是非無左右不可斷罪將又敵方城郭之外者可令禁
放火但於戰場者可隨時義歛神社佛閣等堅可戒之
次官軍入洛之時寄宿之三字扶持其家主雖消塵不
可費之可加隨分之恩惠以有道伐無道其不然乎天
神地祇之擁護宗廟社稷之靈驗指掌可知各存義勇
互可警誡矣右為致周武一統之太平且約漢高三章之
制法四海九州東關西國各令承知敢勿違越勅制如

斯主者施行

六波羅兵濫入西郊

太平記曰頭中將西山陣ヲ落給ニ又ト聞ヘケレハ
翌日四月九日京中ノ軍勢谷堂峯堂以下淨住寺松
尾萬石大路葉室衣笠ニ亂入在家ニ火ヲ懸タレハ
淨住寺最福寺葉室衣笠ニ尊院参考一作
大鼓御所總ノ堂社
三百餘個所在家五千餘宇灰燼トナル谷堂ト申ハ
八幡殿ノ嫡男對馬守義親嫡孫延朗上人造立ノ地
也

鎌倉遣足利高氏名越高家來擊先主師名越軍敗而死
 太平記曰西六波羅ハ度々合戦ニ打勝ケレ氏宗徒
 ノ勇士結城九郎左衛門尉親光ハ敵ニ成テ山崎ノ勢
 ニ加リ又國々ノ勢ハ轉漕ニ疲テ五騎十騎國々ニ
 帰リ或ハ時ノ運ヲ計テ敵ニ属シケル間官方ハ負
 ケレ氏勢重リ武家ハ勝トモ兵日々ニ減セリ角テ
 ハ如何有ヘキト世ヲ危ム人モ多カリケル處ニ足
 利名越ノ西勢上洛シタレハ人皆色ヲ直メ勇合リ
 云云四月廿七日ハ八幡山崎ノ合戦ト兼テ定ケレ

尾張守ハ大將トメ七千六百餘騎鳥羽ノ作道ヨリ
 向ハル高氏ハ搦手ノ大將トメ五千餘騎西岡ヨリ
 向ハル八幡山崎ノ官軍是ヲ聞テ中將忠顯ノ五百
 餘騎ハ大渡ノ橋ヲ渡リ赤井河原ニ控ヘ結城親光
 カ三百餘騎ハ狐河ニ向ヒ赤松同心カ三千餘騎淀右河
 久我暎ノ南北三個所ニ陣ヲ張ルサテ足利ハ未明
 ニ京都ヲ立給ヒヌト披露有ケレハ名越モ人ニ先
 シ懸ラレヌト思テ久我暎ノ馬足モ夕、又泥土ノ
 中へ馬ヲ打入我先ニト前ケル所ニ赤松ノ一族佐

用左衛門三郎範家態ト物具脱テ歩立ノ射手ニ成
畔ヲ傳ヒ藪ヲ潜^シテ近々ト子ラニ寄テ射矢一筋ニ
テトウト落引色ニ成タル官軍是ニ機ヲ直シ勝關
ヲ作テ攻合ス尾張守カ郎從七千餘騎或ハ討死或
ハ自害シテ果ニケリ

高氏叛于鎌倉

太平記曰半ハ京都ヲ警固シ宗徒ハ船上ヲ攻ヘシ
ト名越尾張守ヲ大將トノ外様ノ大名二十人ヲ催
サル其中ニ足利治部大輔高氏ハ所勞ニテ起居未

快カラサルヲ頻ニ催促有ケレハ足利殿憤リ思ハ
レケルハ我先年父ノ喪ニ居テ三月ヲ過ス筈置ノ
後ニ赴キ今又病ニ卧ノ憂未夕休サルニ征伐ノ後
シ催サル、事コソ遺恨ナレ 太平記本文父ノ喪ニ居ル
ト病ニ卧タルヲ以テ并
ニ此時ノ事トノ先年今度ノ字ヲ脱ス案スルニ高
氏父貞氏ノ死ハ元弘元年ニ在テ其歲十一月河内
備中楠櫻山カ蜂起ヲ告ク因テ役ニ赴ク也今年父
ノ喪ニ居ルニ非ス故今参考本ニ從テ本文ヲ改メ
記ス異本或ハ先 所詮先帝ノ御方ニ参リ六波羅ヲ
年今年ノ字有リ
攻落ノ家ノ安否ヲ定ヘキト心中ニ思立ツ猶モ入
道ヨリ工藤左衛門尉ヲ使トメ上洛ノ延引ヲ責ラ

レケレハ一族郎従ハ申ニ及ハス女性幼稚マテ残
 ラス上洛ト聞ヘケレハ長崎入道圓喜恠ニ思ヒ相
 摸入道ニ此由ヲ告シ子息ト御臺トシハ鎌倉ニ留
 ノ申サレ一紙ノ起請文ヲ書セラルヘシト申ケレ
 ハ相摸入道使ヲ以テ其旨ヲ述ラル是ヨリ御返事
 シ申ヘシトテ舍弟兵部大輔 参考一作宮内
 少輔共言直義 カ意見
 ラ問ハル、ニ暫ク思案有テ今此一大事ヲ思召立
 ツ事全ク御身ノ為ニ非ス天ニ代テ不道ヲ誅シ君
 ノ御為ニ不義ヲ退ントナレハ設ヒ詐テ起請ノ詞

ヲ載セラル、臣佛神ナトカ忠烈ノ志ヲ守ラサル
 ヘキ就中御子息ト御臺トノ事ハ大義ノ前ノ小事
 ニ候公達ハ幼稚ニ候ヘハ其為ニ残シ置ル、郎従
 何方ヘモ懐キテ匿スヘシ御臺ハ赤橋殿トテモ御
 座候ハニ程ハ何ノ御痛敷事カ候ヘキトカリ猶豫
 有ヘキニ非スト申ケレハ千壽王 義
 註 御臺所赤橋相
 州ノ御妹 参考云北條家譜高氏
 妻平登子時久子守時妹 ヲ鎌倉ニ留置一紙
 ノ起請文ヲ書テ相摸入道へ遣サル入道是ニ不審
 ヲ散シ高氏ヲ招請有テ頼朝ヨリ二位禪尼へ相傳

ニタルハ幡殿ヨリ代々家督ニ傳テ執セラレ、白
 旗ノ候此旌ヲサ、セテ凶徒ヲ急キ對治有ヘシト
 テ錦ノ袋ニ入ナカラ餞ニ送ラル自餘馬鞍太刀
ノ贈物有リ則
 兄弟吉良上杉仁木細川今川荒川以下ノ一族三十
 二人高家ノ一類四十三人都合其勢三千餘騎三月
 廿七日ニ鎌倉ヲ立大手ノ大將ト定メラル名越尾
 張守高家ニ三日先立テ四月十六日京都ニ著ス
 考通 難太平記曰大御所尊氏御産湯ノシケル時山鳩二
 飛來テ一ハ左ノ御肩サキニ居リ一ハ杓ノ柄ニ居

ケリ錦小路殿直義御産湯ノ時ハ山鳩一ツ飛來テ御
 杓ノ柄ト湯桶ノ端ニ居タリケリ先代ノ世ニ憚テ
 其時ハ披露ナカリケリ當御代ニ御年比ノ人々モ
 申出ケルニマ元弘ニ御上洛ノ時不思議ノ事有ケ
 リ参河國八橋ニ御著ノ時御前無人数ノ夕ニ白キ
 衣カツキタル女一人参テ云御子孫惡シキ事ナク
 ハ七代守リ申ヘシ其支證ニハ每度合戦ニ出給フ
 時雨風シ以テ示シ申ヘシト云テ夢ノ如ク失ニケ
 リ其ヨリメヒト御謀叛ノ事思召定テ即上杉兵

庫入道 参考云兵庫頭藤憲房入道 御使ニテ先吉

良上総禅門ニ 俗名 眞義 仰合ラレシニ御返事ニ今ニテ

遅クコソ存候ツレ最目出カルヘク候云云其後人

々ニモ御談合アリケリ此事關東御立ノ時ヨリ内

内兵庫入道ハ申勸ケルニヤ家時貞氏此西御所ノ

御造意ヲ大方殿ノ 謂尊 氏母 上杉ハカリニ仰聞ラレケ

ルトカヤ是ニ依テ殊更此人骨ヲ折河原合戦ニ討

死シケルトカヤ今ノ上杉中務入道ノ 按中務少輔 朝宗法名禪

助憲 藤子 祖父也

五月足利高氏應先主乃賜綸旨

太平記曰足利殿ハ京着ノ翌日ヨリ伯耆船上へ潛

ニ使ヲ進ラセ御方ニ参ヘキ由申サレタリケレハ

獻感有テ朝敵追伐ノ綸旨ヲ下サレケル○増鏡曰

卯月十日ヨリ東より北にぬかほくのあり中よむと

笠をへしむしきりし後大浦原高氏のほりり後を

ぬのりくきくさかひのたふへむくへきり

後をへむせりし月日立しゆもくろく多し

くろくありきりありとちくと又去るまはれ

庭の公やいゝつんとくまゝあるもらゝ何れもけさる氏
い古乃程義徳長のなるり有りたれいその程々い中しと
おれたぬいなるて取久より二乃さかゝるきし源氏
ともくそう後を造りてあゝねむろくいきほひよふ
こもしてあふふおよものも乃おほく造いかにあまの老きあを
得てあまのいそいそとやあゝんかともふささくくと
たさく伯耆あへむふへゝとつひなしてあまおほり
ささりに一とありして云云 通考 参考一本曰足利殿ハ
兼テヨリ海老名六郎季行ヲ潜ニ伯耆ノ船上ヘ進

ラスト云云○又曰光明寺藏書載論旨云被論旨備
前相摸守平高時法師猥背君臣之禮節不顧國家之
軌範掠領諸國勞苦萬民僭亂之至何事加之早已為
朝敵不道天罰速相率軍兵追討凶徒勲功賞宜依請
者依天氣狀如件 年月蠹損 高氏請文云論旨重令拜
見候任勅命先日捧領狀之請文弥可抽軍忠候以此
旨可令奏聞給候誠惶誠恐謹言元弘三年五月二日
前治部大輔高氏 参考曰此請文蓋非所載論旨請文定知有別賜論旨
高氏率兵陣于丹波國

太平記曰追手ハ戦初リケレ厄搦手ノ足利ハ桂川ノ西ノ端ニ下居テ酒盛シテオハシケルカ追手ノ大将討レヌト聞テイサヤ山ヲ越ントテ山崎ノ方ハ見捨テ丹波路ヲ西へ篠村ヲサシテ馬ヲ早メラル爰ニ備前國住人^討中吉十郎^{参考一云名能宗太平記第八并一本作中吉十郎}政^{参考一}搦手ノ勢ノ中ニ有信^{参考一}搦手ノ勢ノ中ニ有ケルカ中吉奴可ヲ呼ノケ心得ヌ事カナ追手ハ軍始マリタルニ搦手ハ芝居ノ長酒盛ニテ休ヌ結句名越殿討レヌト聞ヘヌレハ丹波路ヲサシテ馬ヲ

早ノ給フハ此人如何様野心ヲ挾ミ給フカイサヤヲ引返シ六波羅殿へ此由ヲ申サント云ケレハ奴可ハ一矢射テ帰ラント打テ廻ラントシケルヲ中吉我等僅ニ三十騎ニテアノ大勢ニ駈合テ大死シタラシハ本意カ嗚呼高名ハセヌニハ如シト云ケレハ共ニ大江山ヨリ引返テ六波羅へ事ノ由ヲ申ケル足利殿篠村ニ陣ヲ取テ逆國ノ勢ヲ催サレケレハ當國ノ住人久下弥三郎カ二百五十騎ヲ始トノ^{太平記曰久下カ旗ト云字ヲ書タリ高右衛門尉師直ヲ召テ尋ラレケレハ彼先祖武藏國ノ住人久下二郎重光頼朝大将}

殿土肥ノ杉山ニテ御旗ヲ揚ラレシ時一番ニ参リ
 タルヲ御感有テ若我天下ヲ保タハ一番ニ恩賞ヲ
 行ヘシトテ一番ト云文字ヲ書テタヒ長澤志宇知
 候ヨリ某家ノ紋ト成テ候ト善ヘケリ
 山内葺田余曰参考一酒井波賀野小山波波
作全田伯部其外近國ノ者残ラス馳参ル参考一梅松論曰將軍
 ハ山陰道丹波丹後ヲ經テ伯耆ヘ御登向アルヘキ
 ナリ高家ハ山陽道播磨備前ヲ經テ同ク伯耆ヘ登
 向セシノ船上ヲ攻ヘシト議定有テ下向ノ處ニ久
 我繩手ニテ手合ノ合戦ニ名越高家討タル、間當
 手ノ軍勢戦ニ及スノ悉都ニ帰上ル同日將軍ハ御

領所丹波國篠村ニ御陣ヲ召ル抑將軍ハ關東誅伐
 ノ事累代御心底ニ挾ル、上細川阿波守和氏上杉伊
 豆守重能兼日潛ニ綸旨ヲ賜リテ今度御上洛ノ時
 近江國鏡驛ニテ披露申サレ既ニ勅命ヲ蒙ラシメ
 給フ○難太平記曰六波羅戦ノ時大將名越討タレ
 シカハ今一方ノ大將足利殿先皇ニ降参セラレタ
 リト太平記ニ書タリ返ス、無念ノ事也此記ノ作
 者ハ宮方深重ノ者ニテ無案内ニテ推テ如此書タ
 ルニヤ是又尾篭ノ至リ也衣切出サルヘキヲヤ凡

歴代傳

テ此太平記ノ事誤モ空事モ多キニヤ昔等持寺ニ
テ法勝寺ノ惠珍上人 参考法舊作北今
改之珍又或作鎮 此記ヲ先代
餘卷持參シ給テ錦小路殿ノ御目ニ懸ラレシヲ玄
惠法印ニ讀セラレシニ多ク虚事モ誤モ有シカハ
仰云是ハ且ク見及フ中ニモ以ノ外ノ違ノ多シ追
テ書入又切出スヘキ事等有り其程外聞アルヘカ
ラサルノ由仰有シ後中絶也近代重テ書續ケリ次
ニ入筆氏多所望シテ書セケレハ人ノ高名数ヲシ
ラスト云リサリナカラ随分高名ノ人々モ只勢揃

計ニ書入タルモアリ一向畧シタルモ有ニヤ今ハ
御代重リ行テ此三四十年来ノ事々ニモ跡形無
キ事共我意ニ任テ申ノレハ哀々其代ノ老者共ノ
在世ニ此記ノ御用捨アレカシト存スル也平家ハ
多分後徳記ノ慥ナルニテ書タルナレ氏其々ニモ
少々遠ノアリトカヤマシテ此記ハ十カ八九ハ作
リ事ニヤ大方ハ遠フヘカラス人々ノ高名ナトノ
偽多カルヘシ正シク錦小路殿ノ御前ニテ玄惠法
印談シテ其代ノ事ム子ト彼法勝寺上人ノ見聞給

歴代傳

歴代集
ヒニ夕ニ如牝空言有シカハ唯押テ難シ申ニ非ス
云云

六波羅搦險屯兵

太平記曰六波羅ニハ平場ノ合戦ハカリニテハ叶
フマシ要害ヲ搦ヘテ時々馬ノ足ヲ休メ兵ノ機ヲ
扶テ敵近カハ駈出々々戦ヘシト六波羅ノ館ヲ中
ニ籠テ河原面七八町ニ塹ヲ深ク掘テ鴨川ヲカケ
入タリ

高氏帥兵入京師

参考一本曰高氏ハ五月七日ノ寅刻ニ篠村ノ宿ヲ
立テ内野ニ指向ハル去月篠村ノ八幡宮ニ願書ヲ
獻ラル匹壇参考一
作瞻田妙玄是ヲ書敬白立願事右八幡
大菩薩者王城之鎮護我家之廟神也而高氏為神之
苗裔為氏之家督於弓馬之道誰人不復異哉依之代
代滅朝敵世々誅凶徒于時元弘之明君為崇神為興
法為利民為救世被成綸旨之間隨勅命所舉義兵也
然間古丹州之篠村宿立白旗於楊木本於彼木之本
有一之社尋之村民所謂大菩薩之社壇也義兵成就

之先兆武將頓速之靈瑞也感淚暗催仰信有憑此願
 忽成我家再榮者令莊嚴社壇可寄進田地也仍立願
 如件前治部大輔源朝臣高氏敬白元弘三年四月二
 十九日 梅松論ニ柳ノ大木ノ梢ニ御旗ヲ立ラレタ
 リ是ハ春ノ陽ノ精ハ東ヨリ萌シ始メ随テ柳ハ
 卯ノ木也東ヲ司テ五トス武將モ又卯ノ方ヨリ進
 祭セシメ給フ順ニ西ニ運タル相生ノ夏ノ季ニ朝
 敵ヲ亡シ給フヘキ謂レ給フ云云○太平記所載ノ
 願書今省ク是乃篠村社司所收實ニ是妙玄カ書ス
 ル所ナルヘシ○難太平記云高氏篠村ハ幡宮ノ御
 前ニテ御旗ヲ舉給ヒシニ御願書ヲ引田妙源書シ
 トハ見ヘタリ同時西御所ノ御上箭シ一ツ、神前
 ニ進ラセラレシニ後人二人アリ一人ハ一色右馬
 助一人ハ今川中務大輔ナリ此事ハ仔細アル事ニ
 テ口傳ナキ人ハ誤モ有ニヤ此事ナトハ必書入ラ

レテ氣味有ヘキニヤ此中務大輔 相從フ人々ニハ
 トハ我等カ兄ノ範氏ノ事也云云
 舍弟兵部大輔直義吉良上総入道省觀子息上総三
 郎滿義尾張弥三郎高經洪川二郎義季 丹波守 一色
 太郎入道道猷畠山上野介高國 河波守 細川八郎四
 郎頼直同弥八和氏上野太郎入道小股孫太郎上杉
 兵部入道道勸 参考一作兵 庫入道道勤 小笠原孫五郎胤長同五
 郎頼氏高左衛門入道貞忍 俗名 子息右衛門尉師直
 大高二郎重成南部八郎宗繼宇都宮三河守同石見
 六郎志水弥三郎光宗安保二郎光泰設樂富永ヲ始

ノ宗徒ノ兵二萬五千餘騎○増鏡曰五月七日は乃く
 あつる程より大なる本戸をとおし、
 乃大路をせんくき海小七のよきし
 こ乃は神上捕ちやうより先帝の勅をうき
 教をひろかさんとする有りけり
 けふすに地のそくをき梵天のま乃中もき
 けふんとそふりりそよこあひまき
 とのおほいし人のね

足利赤松等兵敗六波羅軍大克之

参考一本曰六波羅ニモ三將ヲ三手ニ分テ三所ニ

陣ヲ張ル先一方ハ名越尾張將監高邦 参考曰家譜作高郡

高家子稱 大將トノ河越 参河入道圓重佐佐木隠岐

前司清高常陸前司時知長井丹波守宗胤河野對馬

守通治波多野上野前司宣通島津常陸介忠秀ヲ始

メ二萬餘騎太政官廳ノ前神泉苑ノ邊ニ陣ヲ張足

利殿ニ相當ル一方ハ淡河参考云太平記第十一作 京亮通時

治 大將ニテ備後民部大輔康世東三郎左衛門尉氏

時長井左近將監高廣大見能登前司陶山備中守高
 通ヲ始トメ一萬餘騎東寺西七條ニ陣ヲ取ル赤松
 シ討テト也一方ハ伊具藏人入道大將ニテ佐佐
 木大夫判官時信撰津伊勢入道行意長井右馬助小
 串五郎兵衛尉秀信武田十郎長信水谷兵衛藏人貞
 有波多野目幡前司通貞佐佐木朽木横山富樫介長
 左衛門尉ヲ始トメ一萬餘騎千種頭中將ヲ防カン
 ト竹田伏見ニ陣ヲ張テ軍始テ休時無リケリ○太
 平記曰大高二郎重成河野カ勢ト戦テ河野猶子七

郎通遠ハ討レヌ是ヨリ軍始タレ氏源氏ハ大勢ナ
 レハ平氏遂ニ打負六波羅ヲ指テ引退又東寺ノ手
 ハ妻鹿孫三郎武部七郎 参考一云 塹ヲ越ヘ堀ヲ崩
 シテ攻入タレハ六波羅勢破レテ七條河原へ追出
 サル 禪林諸祖傳釋友梅傳云元弘年中赤松圓心義
 勇闘於天下奮然獨歸尊氏麾下破兩六波羅
 一日七戰高合之衆北走唯殘七騎馬斃代牛彼軍如
 雲不得攻勝日之晡也與則祐父子一處欲自勿南向
 男山合掌誓願此舉若得勝我當建一寺安置百僧當
 報神助天下安穩干戈泰定心念片刻祥風時來旗脚
 靡敵時有謠者曰敵旗其紋鱗形也我旗左巴水也水
 之與水相成故無勝負加以大龍必勝矣聞頓繪大龍
 於巴上出戰 一陣破レテ殘黨全カラサレハ六波羅
 乃得大勝

ノ勢竹田ノ合戦モ打負小幡伏見ノ軍ニモ負テ落行
 散々ニ六波羅城ニ北麓ル勝ニ乘テ北ヲ逐四方ノ寄手
 五百餘騎皆一所ニ寄テ五條ノ橋瓜ヨリ七條河原迄
 六波羅ヲ圍ヌル事幾千萬ト云数ヲシラスサレ凡東
 一方ハ熊トアケラレタリ是ハ敵ノ心ニナサテ輒
 ク攻落サン為ノ謀也千種頭中將士卒ニ向テ此城
 尋常ノ思ヲナシテ延々ニ攻ハ千劔破ノ寄手彼ヲ
 捨テ此後攻ヲシツト覺ルソ諸卒心ヲ一ニメ一時
 カ間ニ攻落スヘシト下知セラレケレハ出雲伯耆

ノ兵雜車ニ三百兩取集テ家ヲ壞テ積舉一方ノ木
 戸ヲ燒破リケリ爰ニ梶井宮ノ御門徒上林房参考
一作
 光林 勝行房ノ同宿共地藏堂北門ヨリ五條橋瓜へ
 打テ出タル間坊門少將殿法印ノ兵三千餘騎マク
 リ立ラレ河原三町ヲ追越ル梅松論云城郭ヲ圍テ
打取ヘキ由申ケレハ
 細川河波守申サレケルハ然ル如クナラニハ敵
 思切テ御方多ク損スヘシ一方ヲアケテ没落セシ
 ノハ敗軍ニ成テハ御對治容易カルヘキ由申サレ
 ケル間亦シカルヘシトテ一方ヲ明ラレタリ懸リ
 シ程ニ城ノ内多ク心變リ
 シテ將軍ノ御方ニ參シヌ

西六波羅奉新主及諸院奔關東時益中矢而死

太平記曰爰ニ糟谷三郎宗秋六波羅殿ノ御前ニ参
 テ申ケルハ御方ノ御勢次第ニ落テ今ハ千騎ニ足
 ラヌ程ニ成候太平記曰軍勢寡ト云凡其數五萬騎
 ニ餘レルカ我先ニト落行殘留ル兵
 僅千騎ニモ
 足スト云云此御勢ニテ大敵ヲ防ニ事ハ叶ヒトコ
 ノ覺候ヘ東一方ヲハ敵イマ夕取廻シ候ハ子ハ主
 上上皇ヲ取奉リ關東ヘ御下リ候テ後重テ大勢ヲ
 以テ京都ヲ攻ラレ候ヘカシ云云再三強テ申ケル
 程ニ女院皇后北政所ヲ始面ノ女姓少キ人々ヲ忍
 ヤカニ落シテ後心關ニ一方ヲ打破テ落ヘシト評

定シケレハ我先ニト迷出ツ仲時ハ北ノ方子息松
 壽参考後孫左馬助友時
 曆應二年誅於龍口ヲ別シ惜ミ時ヲ移サレケ
 ル處ニ南方左近將監時益ハ行幸ノ御前仕テ打ケ
 ルカ馬ニ騎ナカラ越後守ノ中門ノ際マテ打寄テ
 主上ハ早寮ノ御馬ニ召レ候ニナトヤ長クシク打
 立セ給ヌト云捨テ打出ケレハ仲時カナク縁ヨリ
 馬ニ打騎北ノ門ヲ東ヘ打出十四五町打延テ顧レ
 ハ早六波羅ノ館ニ火懸テケリ苦集滅道ノ邊ニ野
 伏充滿シテ射ケル矢ニ時益ハ頸ノ骨ヲ射ラレ馬

ヨリ倒ニ落ヌ糟谷七郎 参考一云 名時廣 主ノ首ヲ取錦ノ

直垂ノ袖ニ包ミ道ノ傍ノ田ノ中ニ深ク隠シ腹搔

切テ主ノ死骸ノ上ニ重リテ抱著テソ伏タリケル

参考曰時益死所元弘日記裏書作關山梅松論作四

官河原増鏡作守山皇年代記畧記於番馬自害蓋非

也 龍駕四宮河原ヲ過サセ給比ハ東宮ヲ始ノ供奉

ノ卿相雲客方々へ落散テ僅ニ日野大納言資名勸

修寺中納言經顯綾小路中納言重資 據公卿補任 中將為得 禪

林寺宰相有光 参考曰一本載大覺寺參議右大辨氏

世鷹司中 ハカリソ供セラレケルカ流矢主工ノ尤

納言通宣

ノ御恥ニ立テ陶山備中守御劊ヲ吮フ篠目ノ比見

渡セハ野伏共ト覺シクテ五六百人待懸ケタルヲ

備前國ノ住人中吉弥ハ追拂テ其日篠原ノ宿ニ著

セ給フ 梅松論ニ其夜ハ近江國觀 天台座主梶井ニ

品親王ハ是マテ御供申サセ給ヒケルカ道ノ程心

安ク過ヘキ庄覺サセ給ハ子ハ引別レテ伊勢ノ方

へ赴キ神官カ方ニ三十餘日御忍有テ京都少静リ

テ後三四年カ間白毫院ト云所ニ御遁世ノ躰ニテ

御座ケル 一本其夜竊ニ安宅ト云山 ○増鏡曰みかま

善美院の人まきちりあきしてむらりなり一ねかき一まき
 竹の畑とのまきうらなひあはれふかきうらなひ
 常いさきあきさびつり武士も中まことけし今割山へむら
 多れいさかぬのりやふあかきりにあひいさあき
 かたりのいさあきとまきをけしあきわたまわいあき
 こなりあめりりもあき一はとあきあきあきあき
 乃まへふ死をうらなひまのあきとまき一日一夜ソとみあき
 けしあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 て今かきとあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 上皇御殿上人

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 いそあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 然あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 南あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 言えあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 すあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 くれいあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
 あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

日のうらひのつらや〜
 いかゞ〜
 ちりく〜
仲時 在成 時益
 西園寺の大御堂〜
 隆徳天皇の御事〜
 天皇と〜

内大寺殿に浄子別當通を〜
 いま〜
 此れ多ふらゆ〜
 出た〜
 ね〜
 ぶ〜
 う〜
 る〜
 む〜

丁未も又あまききつえくといふことりふいふう何れなり

先主遷賢所於禁中

皇年代記曰賢所豫御禁中八日頭中将源忠顯含伯
州詔命奉迎之禁中七日夕三主御没落之時為女官
沙汰奉入權大納言公宗北山第自彼第奉入禁中也
祐之案與太
平記文異

内大臣源朝臣通顯出家

補任 ○新主諸院御近江國

皇年代記曰十日遷御伊吹山太平護國寺暫以此所
為御在所西院以下又同御此寺

是月權中納言藤原朝臣俊實出家

補任曰於江州馬場宿邊出家貞和六年二月二十三
日薨年五十

權大納言藤原朝臣資名前權中納言藤原朝臣賴定出家

補任曰藤資名藤賴定於江州馬場宿邊出家 通考 增鏡

曰涉ふく乃由るふいりきもの乃ちちえん徑頭の中納言賴定
乃中ちえんはちのちちえん管領の事お陸落ちしもの
さゆひるきものよきこといふる

きりてり

一院請出家於先主不聽

増鏡曰一院よりもかたりてせ給ふ尼かふ所文とまり
給してせんふ山出家あへてなまそそりしれき道とせ
おしりてんふとをかくりしれきとやそせり

越後守仲時自殺其黨悉死

太平記曰六波羅打負テ關東へ落ラル、由披露有
ケレハ安宅篠原日夏老曾愛智河小野田十九院摺
針番馬醒井柏原其外伊吹山鈴鹿河邊ノ山立強盜

共二三千先帝第五宮御遁世ノ躰ニテ伊吹ノ麓ニ

忍テ御座在ケルヲ大將ニ取立番馬ノ宿ノ東ナル

小山ノ峯ニ御旗ヲ差舉タリ 参考一本曰五过兵部
卿親王宮ヲ先帝五宮

ト辨シ伊吹麓太平寺ト云山寺ニ城郭ヲ搦ヘ云云

○又曰五过宮名守良龜山帝子也為兵部卿稱五过

宮又云後醍醐帝第四子以下長幼次第諸説不同太

平記所謂第五宮不知何皇子一本説蓋得其實

越後守仲時篠原ヲ立テ仙躰ヲ促シ奉ル昨日一テ

ハ兵二千騎ニ餘リシカ所今ハ僅ニ七百騎ニモ足

ス佐佐木時信ニ後陣ヲ打セ糟谷三郎ニ先陣打セ

番馬ノ峠ヲ越ントスルニ数千ノ敵道ヲ夾三待懸

タルヲ糟谷一陣ニハ打勝ヌレ氏二陣ノ敵ハ大勢
ナリ矢種ハ皆射盡シヌ越後守ニ申ケルハ弓矢取
身ノ死スヘキ所ニテ死セサレハ耻ヲ見ルト申習
シ、ハ理ニテ候都ニテ討死ニスヘキ身ノ一日ノ
命ヲ惜ミ落来テ今ハ云甲斐ナキ田夫野人ノ手ニ
懸ランコソ口惜候此一所計ニテ候ハ、打拂テモ
通ルヘク候カ推量仕ルニ先土岐一族ハ最初ヨリ
謀及ノ張本ナレハ美濃國ヲハ通スマシ吉良ノ一
族モ遠江國ニ城郭ヲ構テ候ト申我等落人ト成テ

人馬共ニ疲レ矢一筋射ヘキカナシ只佐佐木ヲ御
待候テ近江國ヘ引返シ關東勢ノ上洛ヲ御待候ヘ
カシト申ケレハ時信ヲ待テ評定アラメト辻堂ニ
下リ立テ待タリケル佐佐木ハ一里許引下テ三百
餘騎ニテ打ケルカ六波羅殿ハ番馬ノ峠ニテ野伏
ニ取籠ラレ討レ給ヌト告タリケレハ越智河ヨリ
引返シ降人ニ成テ京都ヘ上ル仲時ハ時信ヲ待期
過テケレハ早敵ニ成ニケリ今ハ何クヘカ引返シ
何クニテ落ヘキナレハト軍勢共ニ懇ナル詞ヲ遺

之腹切テ伏ニケリ糟谷三郎宗秋モ仲時カ柄口一
 テ腹ニ突立タル刀ヲ取テ己カ腹ニツキ立仲時カ
 膝ニ抱付テ伏タリケル是ヲ始メ佐佐木隠岐前司
 高橋隅田安藤中布利石見武田關屋黒田竹井寄藤
 皆吉小屋塩屋岩切浦上岡田吉井壹岐窪糟谷櫛橋南
 和原宗御器所怒借屋西郡秋月半田平塚毎田花房
 宮崎山本足立参河廣田伊佐片山木村二階堂石井
 海老名弘田覺井石川進藤備後加賀三嶋武田満王
 野池守齋藤筑前田村信濃真上陶小見山高境塩谷

庄藤田金子真舜江馬近部能登新野佐海藤里愛多
 義是等ヲ始メ都合四百三十二人同時ニ腹ヲ切テ
 ケル **考通** 増鏡曰きて内存者を以て問ふかりまとはる伊以
 とふきこしなふりのまろや法師そいさうなる光帝の
 内公よそかやうのまも不のうろえ信々ふやまらうきて
 矢とともち移ふ又京よりもおいてかふるときえんれを
 六原のやとしい一仲付のまふあ院住一きてまつり馬
 とふ所の山乃うへふ入まりきりまのまもなる城のらて
 志さういけきたれも我もかなんともやあはるんはあふけ山

つて獲切よりお形一き南討益とつひいこれまた事也
大山乃色つて矢にまるとまきこえー○皇年代記曰七
日六波羅城敗績仲時等奉伴主上上皇以下赴東國
於江州馬場仲時時益等自殺三主以下御逗留○公
卿補任曰八日曉主上并兩上皇令赴東國給京都守
護越後守仲時時益等奉圍繞而於江州馬場宿邊三
主令留給是守護之輩自殺之故也

六波羅兵解千劔破圍而還

太平記曰昨日ノ夜六波羅既攻落サレテ主上上皇

關東へ落サセ給フト翌日午刻千劔破城へ聞ヘ夕
レハ寄手何様一日モ遅ク引カハ野伏弥重リテ山
中ノ路難儀ナルヘシト十日ノ早旦二十萬餘騎ノ
寄手南都ノ方ヘト引テ行前ニハ野伏迹ハ敵ニ急
ニ追懸ラレ今朝マテハ十萬餘騎ト見ヘツル寄手
ノ勢残少ニ討ナサル宗徒ノ大將ハ一人モ討レス
ノ其日ノ夜半許ニ南都ヘコソ落着ケル

大山寺奏捷書

太平記参考曰大山寺注進狀云依賜大塔二品親王

令旨播磨國大山寺衆徒等自去閏二月十五日致合
 戦忠抽御祈禱實事一當寺長日不断藥師如來供粮
 法一撰州小平野兵庫嶋合戦後二月十五日初一同
 廿三日尼崎合戦手負實名時一同二十四日同國坂
 部村合戦打死刑部二郎實名一摩耶山合戦三月打
 死兵衛三郎實名一京都合戦同十二日打死大夫房
 大將實肥後實名同日手負民部實名兵部實名少輔
 名源真肥後實名同日手負民部實名兵部實名了源少輔
 實名丹後實名一摩耶山城于今警固右今年二月二
 十一日忝賜令旨之間自赤松城始於所所度度合戦

千壽王出奔

畢仍註進如件元弘三年五月十日進上御奉行所
 太平記曰二日夜半ニ足利殿ノ二男千壽王殿義大
 藏谷ヲ落テ行方ナシ是ニ依テ鎌倉中騷動シ又京
 都ノ事ハ道遠キニ依テイマ夕分明ノ説モ無リケ
 レハ每事心元ナシトテ長崎勘解由左衛門入道考
 諸異本長崎思元子又一云名諷訪木工左衛門入道
 高泰或作為基入道字蓋衍
 ト兩使ニテ上セラル、虜ニ六波羅ノ早馬駿河ノ
 高橋ニテ行逢名越ハ討レ足利ハ敵ニ成又ト申ケ

レハ西使ハ鎌倉ノ事覺来ナシトテ引返ス

竹若奔京師鎌倉人捕殺之

太平記曰高氏ノ長男竹若ハ伊豆ノ御山ニ御座シ

ケルカ舅宰相法印良遍参考曰系作覺遍為竹若母兄遍或作泉兒同宿

十三人山伏ノ姿ニテ竊ニ上洛シケルカ浮嶋原ニ

テ西使ニ行合諏訪長崎生捕ニト思フ處ニ宰相法

印馬上ニテ腰切ケレハ竹若ヲハ長崎刺殺ス同宿

シモ勿ヌ

平泉寺僧攻牛原淡河時治自殺

太平記曰淡河右京亮時治ハ京都合戦寂中北國ノ

鋒起ヲ鎮ニ為ニ越前國ニ下テケルカ裁程ナク六

波羅波落ノ由聞ヘケレハ平泉寺衆徒七千餘騎五

月十二日居所牛原大野郡推寄ケレハ力及ハス自害

シ又先達テ幼キ子二人ヲ鎧唐櫃ニ入レ乳母二人

ニ昇セ鎌倉河ノ淵ニ沈ヨト見送タレ母儀ノ女房

モ共ニ跡ヲ追テ淵ニ沈ミヌ

新田義貞擁千壽王舉兵於武藏國

太平記曰鎌倉ニハ兵糧ノ為トテ近國ノ庄園ニ臨

時ノ俊夫ヲ懸ラル中ニモ新田莊世良田ニハ有徳ノ者多シトテ五日カ中ニ六萬貫ヲ沙汰セラレケレハ使庄家ニ放入テ譴責スル事法ニ過タリ義負是ヲ聞テ我館ノ邊ヲ雜人ノ馬蹄ニ懸サセツル事コソ無念ナレトテ西使出雲介親連ハ禁メ置黒沼彦四郎入道ハ首ヲ斬テ里中ニ懸ラレケル相摸入道大ニ怒テ武藏上野ニ仰テ義負并舎弟照屋二郎義助ヲ討テ進ラスヘシト下知セラル義負聞テ評定セラレケルニ各宣旨ヲ額ニ當テ

案先達テ大塔官ノ令旨ヲ受

虚病ヲ設テ帰國 義兵ヲ舉勢附スハ鎌倉ヲ枕ニメ討死スヘシト義助カ議ニ一同ノ同五月八日笠懸山ヘ打出ラル相従フ人々ニハ大館次郎宗氏家氏子息孫二郎幸氏二男弥二郎氏明三男彦二郎氏兼掘口三郎貞満左馬權頭貞義子舎弟四郎行義岩松三郎經家政經子里見五郎義胤脇屋二郎義助江田三郎光義参老諸本作行義江田家譜有氏子後為兵部大輔修理亮光義恐非桃井次郎尚義満氏是等ヲ宗徒ノ兵トメ百五十騎ニハ過サリケレハ如何ト思フ處ニ其日ノ晚景利根川ノ方ヨリ越後國ノ

一族里見鳥山田中大井田羽川ノ人々二千騎許後陣ノ越後勢并甲斐信濃ノ源氏其勢五千餘騎馳来義貞義助斜ナラス悦ニ暫モ逗留スヘカラストテ同九日武藏國へ打越紀五左衛門参考紀五一作金吾又作紀五郎左衛門足利ノ子息千壽王殿ヲ具足ノ二百餘騎ニテ馳着夕リ増鏡曰東にももてんしややまの末乃一々なる抄田山甲義貞とよとの今此高氏のよ乃やちりくをたか軍やて武藏より是ヨリ期セカル兵集リテ二十萬七千餘騎ニ成テケル去程ニ京都へノ討手ハ閏テ十日己刻ニ金澤武藏守貞將五萬餘騎ヲ差副テ下河邊へ下

ナル又一方ハ櫻田治部大輔貞國櫻田禪師時教子時政七世孫ヲ大將ニテ長崎二郎高重参考曰長崎家譜高資子同孫四郎左衛門加治二郎左衛門入道ニ六萬餘騎ヲ相副テ上路ヨリ入間河へ向ラル同十一日義貞入間河ヲ打渡テ相戦フ三十餘度義貞ノ兵三百餘騎討レ鎌倉勢モ五百餘騎討死ノ日モ暮ケレハ義貞ハ三里引テ入間河ニ陣シトル鎌倉勢モ三里引退テ久米河ニ陣ヲ取ル夜明レハ又軍始テ長崎二度ノ戦ニ打負テ引退ク十二日ノ軍打負タル由鎌倉ニ聞ヘ

テ相摸入道ノ舍弟四郎左近大夫入道惠性ヲ大將
軍ニノ重テ十萬餘騎ヲ下カレ十五日ノ未明分陪
ニ著ケレハ押寄テ関ヲ作ル平家はニ利ヲ得テ義
貞打負遂ニ掘金ニ引退ク其日頓テ追テハ之寄夕
ラハ義貞爰ニテ討ルヘキヲ今ハ敵何程ノ事カア
ラシ定テ武藏上野ノ者カ討テ出スラント大様ニ
憑テ時ヲ移スノ平家ノ運ノ盡ルシルシナリ

三浦義勝援義貞大敗惠性軍

太平記曰三浦大多和平六左衛門義勝
参考一作和田大多

和佐原皆三浦同宗也家譜大多和平六左衛門義行
三郎左衛門尉季信子鎌倉俊属新田義貞立戦功云
云又義行姪有彦六左衛門義勝未知孰是
兼テヨリ義貞ニ志有シカハ
相摸努ヲ具足ノ其勢六千餘騎十五日ノ晚景ニ義
貞ノ陣ニ馳参リ始終ノ落居ハ天命ノ帰スル所ニ
テ候御勢ニ義勝カ勢ヲ合テ候氏猶敵ノ勢ニハ及
ハス候ヘ氏今度ノ合戦ニ一勝負セテハ候ヘキト
申ケレハ義貞モ當手ノ疲レタル兵ヲ以テ大敵ノ
勇誇タルニ懸ラシ事ハ如何ト宣ケレハ義勝重テ
申ケルハ今日ノ軍ニハ治定勝ヘキ謂レ候其故ハ

昔秦ト楚ト國ヲ争ヒケル時楚ノ將軍武信君終ニ
 八萬餘騎ノ勢ヲ以テ秦ノ將軍李由カ八十萬騎ノ
 勢ニ討勝首ヲ斬コト四十餘萬也是ヨリ武信君心
 驕リ軍懈テ秦ノ兵ヲ恐ル、ニ足スト思ヘリ楚ノ
 副將軍ニ宋義ト云ケル兵是ヲ三テ戦ニ勝テ將驕
 リ卒惰ル時ハ必破ルト云リ武信君今如此ヒスノ
 何ヲカ待ント申ケルカ果ノ後ノ軍ニ武信君秦ノ
 左將軍章邯カ為ニ討レテ忽一戦ニヒニケリ義勝
 昨日潛ニ人ヲ遣シテ敵ノ陣ヲ見スルニ其將驕ル

事武信君ニ異ナラス是即宋義カ云シ所ニ違ハス
 所詮明日ノ御合戦ニハ義勝カ新手一方ヲ承テ一
 當テ當テ、見候ハント五月十六日ノ寅刻ニ三浦
 四萬餘騎カ真先ニ進ンテ分陪河原ニ押寄敵陣近
 ツクマテ態ト旗ノ手モ下サス関ノ聲モ揚ス敵ノ
 遊君酒宴ニ酔卧タル所へ三方ヨリ押寄タリ惠性
 関ノ聲ニ驚テ騒ク所へ義負義助縦横無盡ニ駭立
 ル大将入道モ關戸邊ニテ既ニ討レヌト見ヘケル
 シ横溝八郎安保入道道漣

参考一作道忍 等討死ノ
 又一作道潭

身ハ恙ナク山内マテ引レタリ

先主以藤道平為左大臣氏長者

補任日伯州詔命為現任氏長者○増鏡曰白と云ふ
まゝに二條のちや乃長者と宣下せりてや此と
くも人並いあまきよくうけゆるあまのぬきくけと云
た

先主復藤宣房以下官

補任日以大納言藤宣房權大納言藤師基中納言藤
藤房權中納言藤實尹源通冬藤為定藤冬信藤良基

藤隆資藤公清藤實守參議藤公重藤實治源通冬藤
實頭藤光頭為本職

先主以前關白右大臣藤經忠復為右大臣不受藤忠輔

為前權大納言元前大納言藤長隆為前權中納言元前權中納言○

先主以關白藤冬教為太政大臣藤兼季為前右大臣

兼季見元弘二年十一月

先主罷左大臣藤基嗣以下官

補任日權大納言藤冬信藤師平平親時藤公清權中
納言藤實守藤資明藤忠兼藤經頭參議源具雅藤公名

藤實継藤長光罷

越中守護名越時有黨自殺

太平記曰越中守護名越遠江守時有

参考曰民部少輔公貞子時政

七世孫

舍弟修理亮有公甥兵庫助貞持三人出羽越後

ノ宮方北陸道ヲ經テ京都ヘ攻上ルト聞テ道ニテ
支ヘント越中二塚ト云所ニ陣取タル所ニ六波羅
攻落サレ東國ニモ軍起ルト聞ヘケレハ唯今マテ
馳集タル能登越中ノ兵モ心變テ五月十七日敵一
萬餘騎守護ノ陣ニ押寄ニトスト聞ヘケレハ今ハ

小勢ニテ何程ノ事ヲカ仕出スヘキト女房幼キ者
ヲハ舟ニ乘セテ澳ニ沈ノ残留ル人々上下七十九人
同時ニ腹切テ焼死ス

東八州兵悉属義貞

太平記曰義貞打勝ト聞ヘケレハ東八個國ノ武士
共付從テ軍勢六十萬七千餘騎ト著到ニ付ラル此
ニテ一方ニハ大館二郎宗氏ヲ左將軍トシ江田三
郎行義ヲ右將軍トシ其勢十萬餘騎極樂寺ノ切通
ヘ向ラル一方ニハ掘口三郎貞満後美濃守ヲ上將軍ト

トシ大島讚岐守守之ヲ裨將軍トシテ十萬餘騎巨福
呂坂ヘ向ラル一方ハ義貞義助諸將ノ命ヲ司テ五
十萬七千餘騎假粧坂ヨリ寄ラル鎌倉ニモ相摸尤
馬助高成城式部大輔景氏丹波左近大夫將監時守
ヲ大將トシテ三手ニ分テ防カル一方ニハ金澤越後
左近大夫將監 参考一為有時按家譜有時文永
七年卒今所謂金澤不詳其名 カ三
萬餘騎假粧坂ヲ固メ一方ハ大佛陸奥守貞直カ五
萬餘騎極樂寺ノ切通ヲ固メ一方ハ赤橋前相摸守
盛時六萬餘騎洲崎ノ敵ニ向テ同日己刻ヨリ合戦

始マリテ終日終夜攻戦トイヘルイマタ勝負モ無
カリケリ

赤橋盛時自殺

太平記曰中ニモ赤橋相摸守盛時ハ一日一夜ノ間
六十五度マテ切合残ル勢僅ニ三百餘騎ニ成ニケ
ルカ侍大將ニテ候南條左衛門尉高直ニ向テ宣ヒ
ケルハ今此戦ニ敵聊勝ニ乘ニ似タリト云ヘ凡當
家ノ運今日ニ窮リヌトハ覺ヘス然リト云ヘ凡盛
時ニ於テハ一門ノ安否ヲ見果ルマテモ無ク此陣

頭ニテ腹ヲ切ント思フ其故ハ盛時足利殿ニ女姓
 方ノ縁ニ成ヌル間相摸殿ヲ始メ一家ノ人々サコ
 ノ心ヲモ置給フラノ是勇士ノ耻ル所也此陣急ニ
 ノ兵疲レタリ何ノ面目有テ陣ヲ引テ嫌疑ノ中ニ
 暫クノ命ヲ惜ニヤトテ戦半ナル寂中ニ帷幕ノ中
 ヘ入腹切テ伏タリケル南條是ヲミテ續テ腹切ケ
 レハ同志ノ侍九十餘人同ク腹切テ死ニケル十八
 日ノ晩程ニ洲崎一番ニ破レテ義貞ノ軍ハ山内ニ
 テ入ニケリ

本間山城殺大館宗氏而自裁

太平記曰本間山城左衛門ハ多年大佛貞直息願ノ
 者ニテ聊勸氣ヲ蒙リ出仕ヲ許サレヌニ五月十九
 日早且極樂寺ノ切通ノ軍破レタリト聞テ中間百
 餘人ヲ引具シ大館次郎宗氏カ三萬餘騎控ヘタル
 中へ駈入テ追散シ宗氏ハ本間カ郎等ト引組テ刺
 違ヘタル首取テ貞直ノ陣ニ馳参リ多年ノ奉公多
 日ノ御恩此一戦ヲ以テ報シ奉リ候御不審ノ身ニ
 テ空ク罷成候ハ、後世ニテノ妄念ニモ成ヌヘク

候へハ今ハ御免ヲ蒙テ心安ク冥途ノ御先仕候ト云モ敢ス涙ヲ押へ腹搔切テ矢ニケル

新田義貞滅鎌倉高時自殺其族死者二百八十餘人

太平記曰宗氏討レヌト聞ヘケレハ義貞二十一日夜半許ニ極樂寺坂へ打臨ミ江田大館以下ノ六萬餘騎一手ニ成テ稻村崎ノ遠干瀉駈通テ鎌倉中へ乱入ル爰ニ島津四郎ト云シ長崎入道カ烏帽子子ニセシ一人當千ノ者ニモ白波ト云馬ヲ引レタルニ其馬ニ乗テ駈出降参シヌサル程ニ濱面ノ在家

稻瀬河ノ東西ニ火ヲ懸タレハ餘烟四方ヨリ吹懸テ相摸入道殿ノ屋形近ク火懸テ入道殿ハ千餘騎ニテ葛西谷ニ引籠諸將ハ東勝寺ニ充滿ス是ハ代々ノ墳墓ナレハ防矢射サセテ心開ニ自害セニ為ナリ中ニモ長崎三郎左衛門入道思元カ子息勘解由左衛門為基参考一作基氏又作隆泰又作高泰二人ハ手勢六百餘騎ヲ勝ツテ小町口ニ向フ義貞カ兵中ニ取籠テ討ントス懸ル處ニ天狗堂ト扇谷ニ軍有ト覺テ馬烟夥ク見ヘケレハ長崎父子左右へ別レケルヲ勘解

由左衛門名残惜ケニ立留リ父ノ方ヲ見遣テ行モ
 過サリケルカ父キツト見テ高ラカニ耻シメ云ケ
 ルハ何カ名残ノ惜カルヘキ獨死ノ獨生残ラニコ
 ノ再會其期モ久シカランスレ我モ人モ今日ノ中
 ニ討死ノ明日ハ冥途ニテ寄合ニスル物カ一夜ノ
 程ノ別何カサマテハ悲シカルヘキト申ケレハ為
 基淚ヲ押ヘ從フ兵二十餘騎如本ノ中ニ乱入駈入テ裏
 ヘヌケ取テ返テハ駈乱シ其後ハ生死ヲ知ス成ニ
 ケリ大佛負直ハ昨日マテハ二萬餘騎今朝ハ濱ノ

合戦ニ三百餘騎ニ討成サレ剩ヘ敵ニ後ヲ遮レ前
 後ニ度ヲ失ヒタルニ鎌倉殿ノ御屋形ニモ火懸リ
 ヌレハ宗徒ノ郎從三十餘人主ノ自害シヤ勸ケン
 並居テ腹切タルヲ見テ日本一ノ不覺者共舉動カ
 ナ千騎カ一騎ニナルマテモ敵ヲ止メ名ヲ残スコ
 ノ勇士ノ本意ナレイサ、ラハ最期ノ一戦快クセ
 ント大島里見額田桃井等カ六千餘騎ニテ控ヘ夕
 ル真中ヲ破テ敵數多討取駈出見レハ二百騎僅ニ
 六十餘騎ニナル其兵ヲ指招テ今ハ末々ノ敵ト駈

合テモ無益也トテ服屋義助力控タル真中ニ駈入
 一人モ残ラス討死ス 参考曰太平記第十一卷金剛
 山寄手被誅段大佛負直於南
 都難誅出降七月九日於阿弥陀峯被誅按保曆間記
 北條家譜於阿弥陀峯被誅者大佛右馬助高直也弟
 六七卷圖金剛山亦有大佛負直高直之訛乎若為負
 直未審何時帰鎌倉○北條家譜五月二十二日負直
 戰 金澤武藏守負将モ山内ノ合戦ニ打負我身モ七
 死 個所ノ劊ヲ被テ相摸入道ノ才ハシマス東勝寺へ
 打帰リタレハ入道斜ナラス感謝ノ頓テ西探題ニ
 居ラルヘキ御教書ヲナシ相摸守ニシ遷サレケル
 負将ハ一家ノ滅亡日ノ中ヲ過シト思ヒナカラ多

年ノ所望氏族ノ規模トスル職ナレハ彼御教書ヲ
 受取又戰場へ打出ケルカ御教書ノ裏ニ棄我百年
 命報公一日思ト大文字ニ書キ鎧ノ引合ニ入テ大
 勢ノ中へ懸入テ討死ス 北條家譜曰元弘三年五
 月二十二日負将戦死 普
 恩寺前相摸入道信息 参考一作信惠北條家譜信息
 俗名基時尾張守時兼子時政
 六世孫一名鑑 假粧坂ニ向レタリ夜晝五日ノ合戦
 忍或云觀恩
 二郎從悉討死残タル若黨諸共自害セラル子息仲
 時死ヲ聞テ一首ノ歌ヲ御堂ノ柱ニ血ヲ以テ書付
 待テ暫シ死出ノ山邊ノ旅ノ道同シク越ヘテ憂キ

世語ラン塩飽新左近入道聖遠 参考一左近一作嫡
左衛門遠一作圓

子三郎左衛門忠頼 参考諸本實ハ永
井掃部入道カ子 其第四郎自害

ス 聖遠薛世提持吹毛截断虚空大火聚裡一道清風
○忠頼ニハ奉公モセサレハ出家シテ身ヲ道レ

ヨト云ト 安藤左衛門入道聖秀 参考一作昌
賢又作聖賢 ハ新田

モ聞カス 義貞ノ北臺ノ伯父也鎌倉殿ノ燒跡ヲ廻リテ人ノ

腹切タル者無キヲ見テ口惜ク思ヒ自ラ心閑ニ自

害セント向ヒタル所ニ新田殿北臺ノ使トテ文ヲ

捧ク開キ見レハ此方へ御出候へ身ニ替テモ申宥

ムヘク候ト書レタリ安東大ニ怒テ武士ノ女房々

ル者ハケナケナル心ヲ一ツ持テコソ其家ヲモ継

子孫ノ名ヲモ顯ス事ナレ我只今マテ武息ニ浴シ

テ人ニ知ラル、身トナレリ今事ノ急ニ臨テ降人

ニ出タラハ人豈耻ヲ知タル者ト思ハンヤ女性心

ニテ縦加様ノ事ヲ云ハル、左義貞勇士ノ義ヲ知

ラハ制セララルヘシ義貞縦志ヲ計云左北方ハ固ク

辞セラルヘシ似タルヲ友トスルウタテサト使ノ

前ニテ其文ヲ刀ニ拳リ加へ腹切テ伏ス相摸入道

ノ舎弟四郎左近大夫入道ハ思フ様有トテ奥州ノ

方へ落行人々ニハ屋形ニ火ヲ懸サセ自害サセ伊
 達六郎 参考一云 名匡衡 南部太郎 参考一云 名景家 二人ハ案内者
 之トテ貌ヲヤツシ夫ニナシ召ツレ武藏ニテ落行
 又其後西園寺ノ家ニ仕テ建武ノ比京都ノ大將時貞
 ト云シ也時ニ誣訪三郎盛高 九馬助 入道子ヲ召テ姪ニテ
 アル龜壽ヲ匿シ置テ 参考一作桃壽或作兆壽梅松
 論作勝壽九北條家譜相摸二
 郎時行小名龜 壽一云全嘉丸 時至テ素懐ヲ遂ラルヘシ兄ニテ有
 ル萬壽五大院右衛門 名宗 繁ニ申附タレハ心安ク覺
 ムルト云則相摸殿ノ姪二位局ノ扇谷へ参リ龜壽

シスカシ出シ具足ノ信濃へ下リ誣訪ノ祝ヲ憑テ
 建武元年ノ春大軍中前代ノ大將ニ相摸二郎ト云ハ
 是也長崎次郎高重 参考一作基資一 打残サレタル
 兵百五十騎ヲ卒シ義貞ノ陣半町許懸入組ニト思
 へ凡叶ハス祖父入道圓喜カ前へ帰り自害ヲ勸メ
 ケル間攝津刑部大輔入道道準誣訪入道直性長崎
 入道圓喜ヲ始メ腹切相摸入道モ腹切又 参考云以 諸記案卒
 年三十一北條家譜 其門葉タル人二百八十三人腹
 四十二歳恐非也
 切テ屋形ニ火ヲ懸タリ五大院右衛門宗繁ハ故相摸

入道重恩ノ侍ニテ入道ノ嫡子太郎邦時ハ此宗繁
 カ妹ノ腹ニ出来タル子ナレハ甥ナリ主ナレハ預
 置レシニスカシテ伊豆ノ山へ落給ヘト云テ五月
 二十七日夜半許ニ忍テ落サセ船田入道ニ知ラセ
 一所安堵ノ吹舉ヲ乞ケレハ二十八日ノ曙窶レタ
 ル姿ニテ相摸川ヲ渡ル所ヲ餘所ニ立テ教へ其翌
 日首ヲ刎サセケル義貞モ宗繁カ不道ノ旨聞届ケ
 テ誅スヘシト聞ヘケレハ此彼ニ隠レ行ケルカ後
 ニハ乞食ノ如クニ成テ飢死ケルト聞ヘシ

通考
 増鏡

曰こ乃此の將軍ハ吉邦親王トシおい〜まは後尾尾がまふ
 言付入及貞顯入を城介入及田原長清入を田原た〜ふとのた
 おとらきさいきて言付入及才又四市さいをた文泰家といひ〜ハ
 今と入るを〜とそ大ねま下〜まふ二月十四日福入を〜あらて
 むふ平勢十萬餘騎言付入及の〜さうはにさ〜ふとのそ〜
 ころむら〜して福氣け〜ま〜〜新田の代付政より〜トに
 ころまておほくの年月をたどり〜つた〜新田を〜子國入
 又あやま〜い〜か〜ほろ不き〜へ死とおほえ〜ふほ〜
 十〜ふか〜れ〜ふか〜は〜ふちのた〜く〜ま〜えて〜か〜

こほちさりのりしは世のそとふ滅するやとおほえし四帝
をた丈入及いらふうけけしやとふ武王のり
なくおどるへはきぬれいえきぬものさうり六六百端
そ十六日のおよ入てかほくく川かつる月いふ中一りあて
かくるりぬると愛かそおほえしかくていふいふさ
うらまをせしれい日六二日高付獲切てう勢にたり

將軍守邦親王為僧而降先主南朝紀傳 ○大宰少貳妙惠大
友具簡滅九州探題英時

太平記曰西六波羅モ攻落サレ千劔破ノ寄手モ引

退ト聞ヘシカハ少貳入道仰天ノ探題ヲ討テ身ノ

咎ヲ遁レント菊池肥後守大友入道へ内々使者ヲ

遣タルニ菊池ハ先ニ懲テ耳ニモ聞入ス参考一云菊池先ノ

憤ヲ散セント又其大友ハ領掌ス英時此隱謀ヲ聞

使ヲ斬テ首ヲ送ル参考一云使ニノ少貳

テ實否ヲ窺ハント長岡六郎参考一云使ニノ少貳

カ許ヘ遣シタレハ相勞ル事有トテ對面セス長岡

カナク子息筑後新少貳尚カ許ニ行向ヒ事ノ様ヲ

見テ刺違ニト思ヒケルニ新少貳何心ナケニ出合

フ長岡座ニ著ト均ク飛テ懸ル新少貳飽マテ心早

キ者ナレハ側ナル將棊ノ盤ニテ受留引組テ長岡
ヲ討取タリ少貳入道今ハ己事ヲ得ス大友入道相
共ニ七千餘騎ヲ卒ノ同五月二十五日探題英時ノ
館ニ押寄一朝ノ間ニ英時打負自害シヌ

長門探題時直降于峯僧正俊雅

太平記曰長門探題遠江守時直ハ京都合戦難儀ノ
由ヲ聞六波羅ニカヲ合セント大船百餘艘ニ取乘
海上ヲ上リケルカ阿波ノ鳴渡ニテ京モ鎌倉モ源
氏ニ滅サレヌト聞テ九州探題ト一所ニ成ント舟

ヲ漕戾ノ伺ニ聞ケハ探題英時モ亡サレヌレハ郎

等一人ヲ少貳島津参考一
作大友カ許ヘ遣シ降人ニ成ヘキ由ヲ

傳フ少貳モ島津モ年來ノ好アレハ急キ迎入ル其

比峰僧正俊雅君ノ御外戚ニテ笠置合戦ノ刻筑前

ヘ流サレテオハシケルカ今暫九州ノ成敗ハ勅許

以前ニ此僧正ノ計ニ在シカハ少貳島津彼時直ヲ

同道シ降参ノ由申入ル僧正子細有ラシトテ御前

ニ召レ不日ニ飛脚ヲ以テ此由奏聞有テ勅免ノ上

懸命ノ地ヲ安堵セラル哉程ナク病テ死ス

新主諸院還京師

皇年代記曰二十八日自江州還幸於京都○太平記
 西五官ノ官軍共主上上皇ヲ取進ラセ其日長光寺
 へ入奉リ参考一國分寺 寺一作太平寺三種ノ神品並玄象下濃二
 間ノ御本尊迄モ自五官ノ方へ渡サレケル日野大
 納言資名卿ハ遊行ノ聖ヲ憑テ出家シ又四句ノ偈
 事有ケニ候ト申サレケレハ汝是畜生 祭菩提心ト唱ケル經顯有光二人ヨリ外
 ハ供奉ノ人モナシ其外ハ皆見馴又敵軍ニ圍マレ
 テ都へ帰り上リ給フ

宇都宮紀清以下皆降先主

太平記曰京洛静ニルトイヘ凡金剛山ヨリ引返ス
 平氏猶南都ニ留テ帝都ヲ攻ントスル由聞ヘケレ
 ハ中院中将定平ヲ大將ニシテ五萬餘騎大和路へ差
 向ラル楠正成ニ歳内勢二萬餘騎ヲ副テ河内國ヨ
 リ搦手へ向ラル南都ニ残留ル兵尚五萬餘騎有ト
 云ヘ凡日来ノ儀勢盡果テ徒ニ日ヲ送ル間先一番
 二南都ノ一ノ木戸口般若寺ヲ圍タル宇都宮公紀
 清兩黨七百餘騎給旨ヲ賜リ上洛ス是ヲ始トシテ

百騎二百騎五十騎十騎我先ニト降参ス又阿曾彈

正少弼時治大佛右馬助貞直 参考曰當作高江馬遠直説出于前

江守 参考本作朝宣恐非也北條家譜作公篤但太平記第十高時自害時江馬遠江守公篤自殺不審

佐介安藝守 参考一云名貞俊北條家譜作時俊ヲ始清時子時政五世孫左京亮貞俊父

ノ平氏十三人長崎四郎左衛門 名高二階堂出羽入貞

道道蘊以下各出家ノ律僧ノ形ニ成テ降人ニ出ツ

定平是ヲ受取テ高手小手ニイマシメ京へ帰ラル

京著ノ後皆黒衣ヲ脱セ元ノ名ニ改テ一人ツ、大

名ニ預ラル 通考 増鏡曰令別山たり〜東武士をもさるか

かうへけきひてゆりきほひきほほのほ〜ちとかくやとんえ
るり

六月先主還自伯耆國

太平記曰都ヨリ六波羅ノ没落船上へ奏聞ス依テ

諸卿僉議アリテ還幸ナルヘキヤ否ノ意見ヲ獻ラ

ル時ニ勘解由次官光守 中納言藤經守子 諫テ暫ク皇居ヲ

遷サレス諸國へ綸旨ヲ成下サレ東國ノ變違ヲ御

覽セララルヘクヤト申サレケレハ諸卿悉此議ニ同

シケレ片主上自周易ヲ披テ蓍筮ニ就テ御覽セラ

ル、ニ師卦ニ出テ師負丈人吉無咎上六大君有命
 開國承家小人勿用御石ステニ如此上ハ何ヲ疑ヘ
 トテ同二十三日伯耆卷作十八日船上ヲ御立有テ頭大
 夫行房勘解由次官光守ハカリ衣冠ニテ其外ハ皆
 戎衣ニテ前騎後乘ス塩谷判官高貞ハ千餘騎ニテ
 一日前ニ先陣ヲ仕ル朝山太郎ハ一日路引後レテ
 五百餘騎後陣ニ打ケリ金持大和守参考一作景藤太平記十七作
 俊錦ノ御旗ヲ差テ御左ニ候ス伯耆守長年ハ帶劍
 後ニテ右ニ副フ五月廿七日ニハ播磨國書寫山ヘ

行幸ナル晦日ハ兵庫福嚴寺ト云寺ニ儲餉ヲ點ス
 其日赤松入道父子四人五百餘騎ヲ卒ノ参向ス此
 日一日御逗留アル虜ニ義貞許ヨリ相摸入道以下
 ノ一族ヲ追討ノ東國靜謐ノ由ヲ注進ス六月二日
 瑤輿ヲ廻サル、虜ニ楠正成七千餘騎ニテ参向ス
 同五日ノ暮程ニ東寺ニテ臨幸ナリケレハ武士ハ
 甲ニ及ハス撰政關白以下我方ニト馳参ル同六日
 東寺ヨリ二條内裏ヘ還幸成テ其日先臨時ノ宣下
 有テ足利治部大輔高氏治部卿ニ任ス舍弟兵部大

輔直義 左馬頭 二任ス 案高氏直義 通 增鏡曰之やふい

伯耆よりのを治とて 廿中 じうくま川 東へしを治ひてみ

定りふ二條のお乃おと 道平 然りありて海より治へてみ

日裡へしを治へた候 重祚たふてあるへんれり意の治と

西へしを治へた候 重祚たふてあるへんれり意の治と

つたふりききふふ六日 東寺より治への治のききふり内裡へ

そいせ治ひたる 略 治は二條 富小路の内裡より治へぬれ

後陳の兵い移東寺の門まで治へた候 治へた候とて治へて

と治へた候とて治へた候 又市川伯耆より治へた候とて治へた候

このまふうちまを

廢新主及新元號停元年九月以後官位

皇年代記曰六月四日為伯州詔命奉退皇位元號又廢○

公卿補任曰五日入御二條富小路皇居自立登極但

不及重祚禮元號復元弘元年九月以後任官除位皆

停廢之由被仰之 通考 東寺長者補任曰五月七日以後

者不用正慶年號如元可為元弘者也又曰每事元年

風儀相同ス仍先御代元弘元以來官符宣旨任官叙

位等一切不可用之由被成御事書之間如此所職以

下如根本也

復禮成門院為中宮

増鏡曰禮成門院もまご中宮と号えきと六日の辰屋を
内親王に遷すはつふくろはくろにきかたるを
おろし孫をいれく又壇の由修法はくろは

廢皇太子康仁補任 ○右大臣源長通内大臣藤公賢参議

藤清忠還任補任 ○權大納言藤公宗罷補任 ○以護良親王

為將軍乃入京師

増鏡曰十三日大塔法親王にやふり給ふこ乃月廿五日

おほしてえもいとときよなる男なかり給へどかの赤地乃
けきの由よひいむくわとよものきとまはりて淨馬ふて
まゝり給へは依ふゆいをなる武士をうちかえてんかその
由依なりふもなとくおろふきかありすこやふ給軍の
宣多とかり給ひぬ ○太平記曰三日大塔宮志貴
ノ毘沙門堂ニ御座有ト聞ヘシカハ畿内近國京中
遠國ノ兵馳参ル間其勢頗天下ノ大半ヲ盡シヌラ
ニト黜シ同十三日ニ御入洛有ヘシト定ラレケル
カ其事トナク延引有テ諸國ノ兵ヲ召レ楯ヲ作り

鏃ヲ磨キ合戦ノ御用意有ト聞ヘシカハ主上右大
 辨宰相清忠左中將藤俊輔子ヲ勅使ニテ天下既ニ鎮リ夕
 ルニ猶干戈ヲ動シ士卒ヲ集メラル、ノ條具用何
 事ソヤ又四海騷乱ノ程ハ敵難シ遁シカ為ニ一旦
 其容シ俗弊ニカヘラル、共世己ニ静謐ノ上ハ急
 キ剃髮染衣ノ姿ニ帰シ門跡相承ノ業ヲ事トシ給
 フヘシト仰ラレケル宮ノ勅答ニ今四海一時ニ定
 テ萬民無為ノ化ニ誇ル事陛下休明ノ徳ニ依微臣
 籌策ノ功ニ因レリ而ルニ足利治部大輔高氏僅ニ

一戦ノ功ヲ以テ其志ヲ萬人ノ上ニ立ント欲ス今
 若其勢ノ微ナルニ乘メ是ヲ討スニハ高時カ惡逆
 ヲ取テ高氏カ威勢ノ上ニ加フル者ナルヘシ是故
 ニ兵ヲ舉武ヲ備フ全ク臣カ罪ニ非ス次ニ剃髮ノ
 事兆前ニ機ヲ鑿サル者定テ舌ヲ翻ンカ今天下無
 事ニ属スト云ヘ斥與黨猶身ヲ隠シ隙ヲ窺テ時ヲ
 待スンハアルヘカラス此時上威嚴ナクンハ下必
 暴慢ノ心アルヘシ文武二道同ク立テ治ムヘキハ
 今ノ世或ハ出塵ノ輩ヲ俗弊ニ帰シ或ハ退弊ノ主

ラ帝位ニ即奉ル和漢其例多シ抑我僅ニ一門跡ヲ
 守ラント幕府ノ上將ニ居テ遠ク一天下ヲ鎮メシ
 國家ノ用何レシカ吉トセント仰ラレケレハ主
 上具ニ聞召大樹ノ位ニテ武備ヲ守ルヲ全セン事實モ
 朝家ノ為ニ人ノ嘲ヲ忘ル、ニ似タリ高氏誅罰ノ
 事彼カ不忠何事ソヤ太平ノ後天下ノ士卒猶恐懼
 ノ心ヲ抱ク若罪無ノ罰ヲ行ハ、諸卒豈安堵ノ思
 ラ成サンヤ然レハ大樹ノ任ニ於テハ子細有ヘカ
 ラス高氏征罰ノ事ニ至テハ堅ク其企ヲ止ヘシト

聖断有テ征夷將軍ノ宣旨成ル是ニ依テ宮ノ御憤
 モ散シケルニヤ六月十七日志貴ヲ御立同レ三日
 御入浴アリ先一番ニ赤松入道圓心二番ニ殿法印
 良忠三番ニ四條少將隆資祐之案公卿補任
時中納言為得四番ニ
 中院中將定平前陣ヲ仕ル湯浅権大夫山本四郎次
 郎忠行伊東三郎行高参考伊東或作伊豆或
作伊達三郎或作二郎加藤太
 郎光直参考一載思地牲川神實五郎
政友佐佐木道譽子高秀等我内近國ノ勢
 打コ三ニ二十萬七千餘騎後陣ニ支ヘタリ

尊澄法親王及卿相還自諸州

太平記曰妙法院宮ハ讃岐ヨリ藤房卿ハ預人小田
 民部大輔 一云名 兼秋 相具ノ常陸國ヨリ法勝寺ノ圓觀
 小預人結城上野入道相具ノ上野ヨリ文觀ハ硫黄
 島ヨリ忠圓ハ越後ヨリ帰洛セラル季房ハ配所ニ
 テ身罷リ又其外解官停任セラレ人々盡ク召出サ
 ル○増鏡曰季房寧ホ入意のそ阿はりたりたるもの
 なまける死んてへや阿りえん阿りまのむーやれのまきけま
 うらしてらまの先の中納之友府ハかるりのほまつまも
 父の大納之母の尼上形とるたれつきまをむいほあいらで

たり中納之友陸奥とくまかいらおろく女も又整おれぬ
 本より茶をいほふりあくとかたの女もふをかくまを
 かまふふもあいらりあるま今もさふ眉をむくけま
 かうて男もふれん何れもろかあんとおれこもね
 さらしあをせらるる名座まといほせ一ほ親まふ
 かくかりませをまいてとをきれまありむまはま
 毛は乃まもかへり月草のうほまいかもる花のあま

秋七月阿曾大佛等伏誅

太平記曰七月九日阿曾彈正大佛江馬佐介長崎以

下十五人阿弥陀峯ニテ誅セラルニ階堂道蘊ハ朝敵ノ宸一ナレ氏賢才ノ譽兼テ敵聞ニ達セシカハ召仕ハルヘシト死罪一等ヲ赦サレ懸命ノ地ニ安堵セシカ又隱謀ノ企有トテ同年ノ秋ノ季ニ終ニ死刑ニ行ハル佐介左京亮貞俊平氏ノ門葉タレハ定テ一方ノ大將ヲモト身ヲ高ク思ヒケル處ニ相摸入道サマテノ賞玩モ無リケレハ憤ヲ抱キナカラ金剛山ノ寄手ノ中ニ在ケル然ル處ニ千種頭中將綸旨ヲ申與ヘテ御方ニ參ルヘキ由ヲ申サレケ

レハ去五月降參シ阿波國ヘ流サレテ在シカ遂ニハ如何ニモ野心有又ヘケレハ悉誅セラルヘシトテ召捕ラレテ誅セラル辞世ニ皆人ノ世ニ在ル時ハ數ナラテ憂キニハ洩レ又我身ナリケリ
通考梅松
論曰建武元年三月上旬關東ニ本間ト渋谷カ一族先代方トノ謀叛ヲ興メ相摸ヨリ鎌倉ヘ寄来ル間渋谷刑部大輔義季ヲ大將トメ極樂寺ノ前ニ馳向テ攻戦フ事數刻アリシニ凶徒打負又此事京都ヘ注進申タリシ程ニ去年召置レシ金剛山ノ討手ノ

大將阿曾霜臺陸奥右馬助長崎四郎左衛門尉邊土
 ニ於テ誅セラル○保曆間記曰建武元年四月故高
 時一族少々并本國ノ者共其外同意ノ族有テ鎌
 倉へ打寄セ足利直義ニ對メ合戦ヲ致ス此事京都
 ニ聞テカクノ者モアラハ不思議ノ事モアリナン
 トテ治時高直長崎四郎左衛門去年出家ノ大著作
 タリシヲ召出メ東山阿弥陀峰ニメ誅セラル此外
 高時一族或ハ降参或ハ所々ニ隠レ居タリケルヲ
 皆取出メ同日ニ首ヲ刎ラレケリ

祐之按太平記ニハ此君重祚ノ後諸事ノ政未行
 ハレサル前ニ刑罰ヲ專ニセラレン事ハ仁政ニ
 非トテ潛ニ是ヲ切ラレシカハ首ヲ渡サル、一
 テノ事ニ及ス面々ノ尸骸ヲ便宜ノ寺々ニ送ラ
 ル云云

復天下諸國非高時黨者地

太平記参考曰宣旨左辨官下常陸國應除高時法師
 黨類以下朝敵與同外諸國輩當知行之地不可有相
 違事右大納言藤原朝臣宣房宣奉勅兵革之後士卒

民庶未安堵仍降絲綸被救牢箠而萬機事繁施行有煩諸國輦不論遠近悉以上京徒妨農業之條還背撫民之義自今以後所被閣此法也然者除高時法師黨類以下朝敵與同輦之外當知行之地不可有依違之由宜仰五畿七道諸國勿敢違失但於臨時勅斷者非此限諸國宜承知依宜行之元弘三年七月二十六日大史小槻宿禰少辨藤原朝臣

是月前將軍守邦親王薨

南朝紀傳曰年三十三

八月以源高氏為從三位兼武藏守賜諱字參議源顯家兼陸奥守

公卿補任曰五日源高氏為從三位元左兵衛督從四位下今日以高字為尊皇年代記肩書云本高字被下後醍醐院御諱字同日

兼武藏守考通保曆間記曰高氏昇殿官途ハ成タレ凡カセル恩賞モナシ其故ハ大塔宮還俗才ハシメシテ官將軍ト申ケルカサ、ヘ申サセ給ヒケリ高氏兵權ヲ執テハ昔ノ頼朝ニ替ルヘカラス此次ニ誅罰セラレヘシト申サレケルヲ帝サシモノ軍忠ノ

仁也トテ其儀ナシ彼宮種々ノ謀ヲ廻シテ高氏ヲ
討ントス其比畿内西國ノ武士楠ナント申者ハ皆
彼宮ノ御方ナリケレハ便宣アラハ高氏ヲ討ント
セラレケレ氏東國ノ武士多クハ高氏方ナリケル
上ニ普代ノ武勇ナレハ輒クモ討レス將軍ニサヘ
成ヘシト聞ユ○太平記曰八月三日ヨリ軍勢恩賞
ノ沙汰有ヘシトテ洞院左衛門督實世卿ヲ上卿ニ
定ラレ恩賞ヲ望ム者幾千萬人ト云數ヲ知ラス數
月ノ内ニ僅二十餘人ノ恩賞ヲ沙汰セラレケレ氏

事正路ニ非ストテ頓テ召返サレ萬里小路中納言
藤房卿ヲ上卿ニ成サレ申狀ヲ附渡サル藤房忠否
ヲ正シ浅深ヲ分テ各申與ヘントシ給ヒケル處ニ
内奏秘計ニ依テ朝敵ナリシ者ニモ安堵ヲ賜リ忠
ナキ輩モ五個所十個所ノ所領ヲ給リケル間諫言
ヲ納レカ子テ病ヲ稱シテ奉行ヲ辞セラル角テ九
條民部卿ヲ上卿ニ定テ光經卿
頭中宮大進
藤定光子 諸大將
ニ其手ノ忠否ヲ尋究テ申與ヘントシケル處ニ相
摸入道ノ一跡ヲ内裡ノ供御料所ニ舍第四郎左近

大夫入道ノ跡ヲ兵部卿親王ニ大佛陸奥守ノ跡ヲ
准后ノ御領ニ定ラル其外相州ノ一族關東家風ノ
輦カ所領シハサセル事ナキ郢曲妓女ノ輦蹴鞠伎
ノ者共乃至衛府諸司官女官僧ニテ一跡ニ跡ヲ合
テ内奏ヨリ申賜リケレハ軍勢ニ行ハルヘキ關所
ハ無リケリ光經モ心ハカリハ無偏ノ息地ヲ申沙
汰セント欲シ給ヘ片叶ハテ年月ヲ送ラレケル又
雜訴ノ沙汰ノ為ニトテ郁芳門ノ左右ノ昭ニ決断
所ヲ造ラル其議定ノ人数ニハ才學優長ノ卿相雲

客紀傳明法外記官人ヲ三番ニ分テ一月ニ六箇度
ノ沙汰ノ日ヲ定ラル凡事ノ弊嚴重ニ見ヘタレモ
理世安民ノ政ニハ非サリケリ或ハ内奏ヨリ訴人
勅許ヲ蒙レハ決断所ニテ論人ニ理ヲ附ラレ又決
断テ本主安堵ヲ賜レハ内奏ヨリ其地ヲ別人ノ恩
賞ニ行ハル如此互ニ錯乱セシ間所領一所ニ四五
人ノ給主附テ國々ノ動乱休時ナシ○梅松論曰御
聖断ノ趣ハ五歳七道ヲ八番ニ分ラレ卿相ヲ以テ
頭人トシ新決所ト稱メ新ニ作ラル是ハ前代引附

ノ沙汰ノタツ所也大義ニ於テハ記録所ニ於テ裁
許アリ又窪所ト號ノ土佐守兼光太田大夫判官親
光富部大舍頭参河守師直等ヲ衆中トシテ御出有
テ聞召昔ノ如ク武者所ヲ置レ新田ノ人々ヲ以テ
頭人トシテ諸家ノ輩ヲ結番セラル古ノ興廢ヲ改テ
今ノ例ハ昔ノ新儀也朕カ新儀ハ未未ノ先例タル
ヘシトテ新ナル勅裁漸々聞ヘケリ爰ニ記録所決
断所ヲ置ルト云斥近臣臨時ニ内奏ヲヘテ非義ヲ
申シ行フ間論言朝ニ變シ暮ニ改リシ程ニ諸人ノ

浮沈掌ヲ反スカ如シ○参考一本曰公家一統ノ政
ニ出シカハ態ト開白ヲ置レス左大臣道平公右大
臣經忠公萬機ノ諮詢ヲ佐ラル偏ニ延喜ノ佳例ヲ
追ルト聞コヘシ

以藤光顯兼出羽守為秋田城務

公卿補任曰参議藤光顯兼出羽守宜為秋田城務之
由宣下十一月八日辭職叙從三位

冬十月後京極院藤禧子崩

歷代皇記○祐之按太平記
作八月二日未知孰是

○以義良親王為陸奥太守

錄曰義良天皇弟五子

十一月皇太子崩

太平記

通考 参考曰後醍醐帝嘗立光嚴為太子還幸之後無立太子至建武元年以恒良為太子此所謂東宮不知何人蓋指光嚴帝子康仁而言耶

十二月奉太上天皇尊號

皇年代記曰御年二十三同日被獻隨身兵仗詔朕恭承帝系叨握神符王道難覃謝德於姬周之賢庸昧可耻宣化於夷夏之俗而皇太子謙讓合道惠澤普及今

避儲位於青園之月伴仙游於射岫之雲仍雖無准的之舊蹤加以禮制之崇敬宜上尊號為太上天皇普告遐邇俾知朕意主者施行元弘三年十二月七日以成良親王為東國守護

南朝紀傳曰此月二十八日成良親王東國守護之事

か後々小山下向呈利左子改並義魚相執權摸守より二階寺

小治山撫子作り銘入りり○太平記曰下御所左

馬頭殿供奉し奉らしカ東八個國ノ輩大略属

之奉りテ下向ス通考按紹運錄成良天皇弟四子前坊

律

上野太守今按南朝紀傳所謂東國守護義不相屬是
蓋上野太守欵

